
すま村のすまさん家。もういっちょ！

秋空藤乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すま村のすまさん家。もういつちょ！

【Nコード】

N5093E

【作者名】

秋空藤乃

【あらすじ】

学校に通ったり、おやつを食べたり、乱闘したり、ぐうたら寝たり……………。すま村は今日も平和ですが、すま家は今日も波乱が起きそうな予感です。（この作品は「すま村のすまさん家」の続編です。初めて読む方はまずそちらを読むことをおすすめします。）

マスター＆クレイジーのご挨拶

「皆さんこんにちは、そしてお久しぶりです。このシリーズを初めて読む方もいらっしゃると思いますので改めて自己紹介させていただきます。私はスブラワールドの創造者・右手ことマスターハンドです。」

「よっす！元気だったか？もしくは初めまして！俺は破壊者・クレイジーハンドだぜ！」

「このストーリーは『すま村のすまさん家』の続編です。」

「初めて読む奴・内容を忘れた奴はそっちから読んだ方が設定が分かりやすいぞ。」

「今回もすま家では相変わらずうるさいに近い賑やかさで、FE3兄弟のどこか抜けている生活や、リンクとダークのゼルダ争奪戦も繰り広げられますよ。」

「ファルコンとサムスのイチヤつきや元気なちみつこ達、他の村の連中も忘れちゃならねえな！」

「続編ということでリニューアルした『すまさん家』は、いろいろ新しいことが始まるんですよ。」

「新しいこと、って何だよ？」

「そうですねえ……今の所企画しているのは、学校が始まったり、オリジナルキャラクターが出演したり、ですかね。」

「学校？オリキャラ？……ずいぶんいろんなことやるんだな。」

「まあ、あくまで企画ですけど。」

「なんか俺らも忙しくなりそうだな。」

「そうですね、でも私は忙しいのも嫌いではありませんよ？」

「……変わり者だな、アンタ。」

「フフ……おつといけない、そろそろ挨拶終了の時間ですね。」

「マジかよ、もうそんなに経ってたっけ？」

「そうみたいですネ……では皆さん、本編でお会いしましょう。」

「じゃあな！本編楽しみにしてろよ！」

本編へ。

マスター＆クレイジーのご挨拶（後書き）

いよいよ始まりました。 気合いをいれていきます。

新しい制服を着ると何かワクワクする

『学校！？』

すま家のリビング。

マスターからの手紙を見たマルス達は一斉に声を上げる。

そんな彼らの向かい側で、ファルコンとサムスは茶を飲みながら頷く。

「これ………どういうこと？」

「手紙に書いてある通りよ。マスターが村に学校を創立したから、その生徒になってほしいってことみたい。」

「ハッハッハッ。学校かあ、羨ましいなあ。」

「ちなみに、うちの子供達は皆入学することになってるから。」

サムスが言うと、ちみつこ達は『わーい学校だー！』と喜んだ。

「『教員は、校長・マスターハンド、教頭・クレイジーハンド、その他特別講師』……この二人がメインに教えるのか……」

「マスターはともかく、クレイジーって勉強教えられるのかな………」

「『授業は4時間で給食が出る、服装やカバンは自由』………だって。」

「……服装が自由か……面倒だからいつもの格好でいいだろう。」

アイクがボソリと言うと、『えー！！』とマルスがいかに不満げな声を上げた。

「どしたの？」

「だってせっかくの学校だよ！？制服がなきゃ始まらないじゃない

か!？」

「まあ、言われてみればそうかも……。」

「おしゃれだしね。」

「私も着てみたいです。」

「僕、リンクさんとシークさんの制服姿が見たいです!」

「えゝ…制服ってそんなにいいものかな…?」

首を傾げるリンクの肩を、ポンポンとダークの手が軽く叩いた。

「?……何?」

「…お前は分かってねえなあ、男の制服姿は見ていてもつまんねえけどよ……ゼルダが着るとどうよ?」

「!!!」

ボツ!とリンクの顔が真っ赤になるのを見ると、ダークはますます拍車をかける。

「想像してみる、ゼルダは何が似合うと思う?やっぱり男のロマンはセーラー服だよなあ……それとも、しとやかに着こなしたブレザーか……悩むよなあ……」

ダークがニヤニヤといやらしく笑う一方、リンクの脳内にはセーラー服を着たゼルダとブレザーを着たゼルダの姿が浮かんた。

「(ゼルダは何着ても似合うしな……ハッ!!これじゃあ俺、まるで変態みたいじゃないか……でも、どっちかというところ……。)」

「じゃあ皆でいってらっしゃい。学校は明日から始まるから早く準備しなきゃ…ハイこれ、マスターが支給してくれたお金よ。」

ハッ和我にかえりリンクがサムスの方を向くと、シークが彼女から代金の入った袋を受け取っていた。

「ちみっこ達は制服いらないから留守番ね。」

『ええゝ!』

「僕はちみっこじゃないもんねゝ」

自信満々に言うピットを、『えゝ…』とロイは疑いの目で見ていた。

「んな…っ!!何だよその目は!?!」

「ピット君はまだ小学生でしょゝお?」

「違うよ失礼な！少なくともお前よりは頭の出来がいいしね！」
「何だところ！？」

ギヤーギヤーとケンカをする二人だったが、いつの間にかマルス達が玄關に向かったのに気付कि、慌てて走っていった。

すま村の小さな服屋。

マルス達は早速制服を選び、試着をしている。

「じゃーん！どうコレ！？」

シャツと試着室のカーテンが開き、マルスが近くにいるアイクとロイに自分の格好を見せる。

彼が着ているのは全体的に青を強調したブレザーで、彼の髪の色に合わせとても似合っていた。

「へえ、似合ってるじゃん。」

「……なかなか良いな。」

「そうでしょ、まあ僕は何を着ても似合うからね。」

「それはさておき、君はそれで決定するの？」

「うん、これが一番気に入ったからね。君達は決まった？」

「……俺はこの学ランとTシャツでいい……。」

「僕は黒ズボンにYシャツ。」

「よし、決まったんならシークの所行こうか。」

「……その前に、制服脱いでけ。」

「え？……あつ！危ない危ない。」

再びカーテンを閉め、マルスは元の服に着替え始めた。

「シークさん！こんな感じでどうですか！？」

白いYシャツにチエック模様のズボン、セーターとネクタイを持ったピットがシークに駆け寄る。

「組み合わせがいいね、とても君に合ってるよ。」

「へへ……ただ、羽根のせいで試着出来ないんですよねえ……。」

「そういえばそうだねえ……まあ、このサイズだと君にちょうどいいだろうし、家に帰ったら羽根用の穴を開けてあげるよ。」

「ありがとうございます！……ところでシークさんはどんなのにしたんですか？」

「僕はね、上は肩で切れたセーターとブラウスの組み合わせだよ。」

「シークさんもセーターなんですか！？お揃いで嬉しいです！」

その時、試着を終えたリンクとダークが戻ってきた。

「こっちは決まったよ。」

「選ぶの苦労したぜ……。」

「二人共どうだった？」

シークが尋ねると二人は持っていた制服を広げてみせた。

「見る！制服っていったらやっぱり学ランだろ！これとあと家にある俺のイカしたロンTと組み合わせれば完璧よ！！」

「俺は普通にブレザー……ちょっと地味かな？」

「そんなことないですよ。リンクさんは落ち着いた感じの方が似合います。」

「ダークも元はリンクなのに、ずいぶんと正反対なんだね……。」

「まあ、姿形が似てるだけで俺とリンクは別物だからな……ところ
でさ、ゼルダは？」

「ああ、彼女だったら今試着してるけど。」

「どの辺で？」

「あそこの試着室だよ。」

「ふん……。」

スス……とその試着室に近付いていくダークの肩を、『覗き禁止だよ』とシークの手がガシツとつかんだ。

「チツ…バれてたか…なあシーク、ゼルダってセーラーなのか？それともブレザー？」

ダークの質問にリンクはピクリ、と思わず聞き耳を立てる。

「お前、何の質問してんだよ！」

「はいガキは黙る…で、どっちなんだ？」

「……さあね。」

「いいじゃねえか教えてくれても！」

「そんなに気になるならさ、そろそろ出てくるかもしれないから自分の目で確かめたら？」

その時、シャツと試着室のカーテンが開きゼルダがヒョコリと顔を出した。

「シーク……って、あら？皆さんお揃いで。」

「ゼルダさん！」

「ゼルダ、どうだった？」

「はい、サイズもぴったりですし、とても可愛らしい制服です。」

「ゼルダ…どんなの！？見してくれよ！」

「ええ……！？ちよつと恥ずかしいです……。」

「ゼルダ、俺も見たいな……。」

「うっ…分かりました……。」

少し頬を赤らめつつも、ゼルダは彼らの前に立った。

彼女の制服は白が中心のブレザーで、可憐で清楚なものだった。

チェックのスカートと首元の赤いリボンが彼女に似合いとても可愛い。

『おお……。』

リンク達（シークを除く）の口から思わず声が漏れる。

「うん、やっぱり似合ってるね。」

「ゼルダさん、すごく綺麗です！」

「セーラー服も見たかったが……こっちなかないじゃねえか。」

「（ゼルダ……すっごい可愛い……！！）」

「制服は初めて着るので、似合うと言ってもらえて嬉しいです……。」

ゼルダが照れながら微笑むと、彼女の後ろからマルス達が歩いてきた。

「やつほ。」

「あつゼルダ可愛い〜！」

「……似合ってるな。」

「まあ……ありがとうございます。」

「マルス、そっちは決まったの？」

「うん、さっさと買っちゃおうか。」

「あつ、待ってください！私着替えますので……。」

「ええ〜ゼルダ着替えちまうのかよ〜！？」

「はい、では失礼します……。」

ゼルダはそう言うのと再び試着室に入り、シャツとカーテンを閉める。そんな時、リンクの耳元でシークがコッソリと言った。

「……君も彼女のセーラー服姿、見たかっただろ？」

「……んな……っ！！」

ボツ！と瞬時に真っ赤になるリンクを、シークはクスクスと楽しそうに笑った。

夜、 10時頃。

明日の準備を終えたマルスとロイはアイクの部屋に遊びに来ていた。

「あゝ明日から学校かゝ！」

「何か楽しみだよねゝ！」

テンションが上がりはしゃぐ二人は、ボスツと勢いよくアイクのベッド寝転ぶ。

「…お前ら、ベッド壊すなよ…。」

「ん？そういえばさ、僕ら以外の生徒って誰々なのかな？」

「シークが言ってたけど、スネーク家とソニックさん、あとドンキーさんの所のデディーだって。あ、あとプリンちゃんと」

「ええっ！？プリンちゃんも！？」

ガバリとロイは起き上がり、目を輝かせてマルスを見る。

「う…うん…プリンちゃんと、あと転校生が……って聞いている？」

マルスの話はそっちのけで、ロイはプリンと学校でも会えるという嬉しさに浸っていた。

「プリンちゃんと学校生活を送れるなんて……僕は今幸せの絶頂だゝ…！」

「あ、ちなみにこのことはプリンちゃんがアイクにした電話で知ったんだけどねゝ。」

「……………え？」

ピキ、とロイは固まったかと思うとそのままベッドへ倒れこみ、『うわああゝん！！』とマルスに抱きついて泣き声を上げた。マルスはそんな彼の頭を優しく撫でる。

「つかの間の幸せだったねゝ、ロイ……………」

「ひつく……………こんな悔しい思いしたの、人生で初めてだよ……………！」

「……？それよりマルス、転校生とは何だ……？」

「おおそうだ。何かね、母さんがマスターから聞いたんだって。詳しいことは明日分かるでしょ？」

「……そうだな……。」

「さうて僕は明日に備えてもう寝ようかな。」

「……僕もそうする。」

そう言うのと二人はモゾモゾと布団に潜り、数秒しないうちにスヤスヤと寝息を立てた。

「……！！……お前ら、俺が寝られんだろ……！！起きろ……！！……！！」

アイクの努力も虚しく、二人は夢の世界へと旅立っていった。

次に続く。

新しい制服を着ると何かワクワクする（後書き）

毎度こんな感じで始まるのがすま家です。転校生の正体はオリキャラです。オリキャラといってもスマブラに出ないというだけで私が考えたものではないので、あしからず。

転校生に恋とかがありがち

『いつてきまゝす!』

ちみつこ達はランドセルを背負い、マルス達は制服に身を包み、見送るファルコンとサムスに手を振り元気よく家を出る。

「気をつけていくのよ〜!」

「楽しんでこいよ〜!」

「あゝ学校かゝ!何かワクワクする!」

「そんなにはしゃいで……マルスつてさ、学校行ったことないの?」

「うん!ほら、僕って王子でしょ?勉強は全部城の中でやってたから……だから皆と一緒に同じ場所で同じことを勉強するのがすごく楽しみなんだ!」

エヘヘ、とマルスはロイに微笑みかける。

「あ、見えてきたよ。」

リンクの言葉に皆が一斉に前を向くと、一軒の建て物が見えてきた。

少し大きめの一階建ての家を連想する建て物の入り口の隣にはウィスピーウッズが立っており、上には

『SUMA village school (すま村学校)』と大きく書かれている。さらに校舎の左隣には広いグラウンド、後ろには24mのプールが設置されていた。

「へえ……以外と本格的だねえ……。」

「でも校舎小さくない？」

「生徒数を考えればちょうどいいよ、なんせ23人しかいないんだもの。」

彼らが校舎に近付いていくと、ウイスピーウッズがこちらに気付きニツコリと微笑んだ。

「やあ君達、おはよう。」

「おはようウイスピーウッズ。君確か、グリーングリーンスのステージにいたはずじゃあ……？」

ロイが質問すると、ウイスピーウッズは苦笑して答えた。

「いやあ何だかマスターがね、『貴方を学校のシンボルに欲しいから来てもらいます』とか言って私を引っこ抜いてここまで連れてきたんだよ。」

「マスターったら……大胆だなあ……。」

「ペポ！ウイスピーウッズ！リングゴちょうだい！」

「いいよ……ほら。」

ポトリとリングを落とし、それを受け取ったカービィは『ありがとう！』と言って嬉しそうにクルクルと回っていた。

「君達も早く教室に入るといい、他の皆はもう来てるよ。」

「そうだね、じゃあまた後で！」

彼らはクルリと背を向け、急々と玄関に向かう。

その背中をウイスピーウッズは優しい眼差しで見つめていた。

ガラリと戸を開け教室に入ると、見慣れた人物達がこちらを見ていた。

ロイはキヨロキヨロと教室内を見ていると、カービィの席の後ろに座ってこちらを見ているプリンに気付いた。

「これから始まる学校生活……淡い青春ラブストーリー……その結末は！卒業式満開の桜の木の下で……二人の男女は結ばれるんでしょ……キヤ~~~~~！」

ニコリと微笑んだ彼の制服は、白いYシャツに落ち着いた赤のネクタイ、水色のズボンと至ってシンプルなものだった。頭にはいつもの帽子を被っている。

「僕、トレーナーさんとお勉強できるなんて嬉しいです！」

「僕もだよ、頑張ろうねリユカ。」

「ハイ！」

「えーと、俺の席は………ここか。」

リンクは自分の席を確認すると、ドサリと机に荷物を置く。

「一番前か………ゼルダはどこなんだ？」

「私は………このようです。」

彼女の席。そこは一番前であり窓側。そして、リンクの隣だった。

「あら………貴方の隣のようです。」

「そ、そうか………！よろしくゼルダ！（やった………！！ゼルダの隣は誰にも取られなくなかったから………！）」

表面では平常を保ちながらも、内心は物凄く嬉しいリンクだった。

「何いっ！？納得できねえなオイ………！」

ガタンツ！と椅子から勢いよく立ち上がり抗議したのは、ダークである。

「テメエがゼルダの隣だなんてずれえぞ………！！俺の隣は鳥なのによ………！」

「鳥とは何だ鳥とは！？名前があんだからちゃんと呼べよ………！」

隣の鳥、ことファルコはトサカを立てて（にわとりじゃないけど）怒った。

「んでもって、何で俺の前がシークなんだよ！？おいテメエ席取っ替える………！」

「嫌だよ、ここ黒板見やすいからね。」

「僕も反対だよ！せっかくシークさんと隣になったんだから………！」

「ぐうつ………じゃあアイク………」

「断る。」

「何でだよ………？お前どうせ寝てばっかだろ………？」

「……ここは窓側だから、日の光が気持ち良い……。」

「……っああもうどういつもこいつも……っ!!」

ムキ……!と怒り狂うダークを後ろの席の二人・ソニックとウルフは面白そうに眺めている。

「Oh、彼がダークリンクか……なかなかfunnyな奴だな。」

「外見もリンクと同じで、恋路も同じとはな……。」

「う……僕の隣はマルスカ……何かちよつとガツカリ……。」

「僕だつてガツカリだよ!……ま、多分勉強は僕の方ができるから、分からなかったらその日のおやつを譲るって条件で教えてあげるよ。」

「

「タダじゃないのかよ!……ああ欲を言えばプリンちゃんの隣がよかったよ……!」

「ハイハイ諦めなさい。」

ふてくされるロイを軽くあしらい、マルスは後ろを向く。

彼の後ろの席にはフォックスが座っており、その隣は空席だった。

「ねえフォックス君。」

「ん?何だ?」

「どうして君の隣の席は空いてるの?」

「ああ、今日転校生が来るだろ?そのための席らしい。」

「じゃあ転校生と隣同士になるんだ……じゃあさ、もし転校生が

メチャメチャ可愛い女の子だったらどうする?惚れちゃう?」

「馬鹿か、俺には既に恋人が」

その時、ガラリと戸が開けられ、出席簿を持ったマスターと眠たそうに目を擦るクレイジーが教室に入ってきた。

「う……眠い……。」

「昨夜遅くまで起きているからですよ、何をしていたんです?」

「マ オテニスやってた……。」

「自業自得です……では、始めましょうか。」

マスターは教卓に立ち、生徒にニツコリと微笑んだ。

「皆さん、すま村学校にご入学おめでとうございます。手紙にも記しました通り、私がこの学校の校長であり教師のマスターハンドです。どうぞよろしく願います。」

「んあ……教頭のクレイジーハンドです……主に体育とか体を動かす授業を教えやす……よろしく……」

クレイジーは眠気のためフラフラとしていたが、ガンツ！と勢いよく後頭部を黒板にぶつけ、『いつてえ！』とその痛みにより完全に覚醒した。

「全く……さて、続いて皆さんに今日転校してきた新しい友達を紹介します。クレイジー、職員室に迎えにいつてきてください。」

「ういゝす。」

クレイジーは痛む後頭部をさすりながら教室を出た。

「さて、転校生が来るまで何か私に聞きたいことはありませんか？」

マスターが全員に尋ねると、『ハイ』とネスが手を上げた。

「はい、ネス君。」

「転校生ってどんな子ですか？」

「とても可愛い女の子ですよ。隣町から移り住んで来たらしいです。」

マスターがそう答えると、マルスは後ろのフォックスの方を見ながらニヤリと笑ってみせた。

「な……何だよ！？」

「良かったね」とっても可愛い女の子だってね。」

「だから俺には……！」

その時、『来たぞ』とクレイジーが戻ってきた。

「早いですね、まだ質問1つしか答えていませんよ？」

「職員室なんて教室から十歩くらい歩きやすくに着くぜ。」

「そうでしたね……とりあえず、入ってきてください。」

マスターが開いた戸に向かって声をかける。

すると、トコトコと初めてみる姿の女の子 いや、ポケモンが入ってきた。

薄いピンク色の体にアカアマリンの瞳はパツチリと開いていて、ウサギのように長い耳の右側には可愛らしい白いリボンをしていた。

「では、自己紹介をお願いします。」

「はい……えと……隣町から移り住みました、プクリンと申します。皆様どうぞよろしくお願いします。」

ペコリとプクリンは礼儀正しく頭を垂れる。

「あれ？何かどこことなくプリンちゃんと似てるような……。」

「そうでしゅ！プリンのお姉様でしゅ！」

「プリンちゃんのお姉さん！？姉妹揃って可愛いな……。」

「ロイ、君はどっちがいいのさ？」

「ん~~~~~やっぱプリンちゃん!!」

「あっそ……。」

マルスはそっけなく返事をする、フォックスをからかおうと後ろを向いた。

「フォックス良かったじゃ〜ん、なかなか可愛い……よ……?」
その途端、マルス言いかけた言葉を飲み込んだ。

フォックスは両目が点になり、半分口を開けたまま放心状態になっている。その頬はほんのりと赤く染まっていた。

「え……嘘……マジで……？」

「……フォックス……おい！」

「テムエ……まさか……！！！」

彼の変化にファルコとウルフも気付き、額に汗を流している。

「しっかりしろよオイ！！お前にはクリスタルがいるだろ！？忘れたのか！？」

「可憐だ……。」

「フォックス！？正気を持って！！フォックス！！！」

「何やら騒がしいですが……まあいいでしょう。プクリンさん、あの空いた席に座ってください。」

「はい。」

プクリンは静々と歩き、席に着く。

「プリ！お姉様と隣でしゅ！」

「ウフフ……そうですね。」

プリンに微笑みかけていたプクリンは、ふとフォックスが自分を見ていることに気付き、彼の方に体の向きを変えた。

「……！！！」

「初めまして。先程自己紹介いたしました但改めてご挨拶します。プクリンと申しますわ。」

「……フォ……フォックスだ……！！！」

「フォックスさん……素敵なお名前ですわね。」

「いや……そんなことは……！！！」

「そう謙遜なさらなくても……私、この村のことや学校のことをまだ分からないので、もしその時はご指導お願いしますわ。」

プクリンが頭を下げると、フォックスも先程の目が点状態のまま頭を下げ返した。

「（このバカ……）。」

「（あつちの世界に通じる電話でもあれば、クリスタルに言いつけてやるのによ……。）」

その様子を見たファルコとウルフはすっかり呆れかえっていた。

「（あゝ大変だ……。ん？）」

フォックスにマルスもまた呆れ、プクリンの方に目を向けると、彼女が熱い視線でどこかを見ているのに気付いた。それを辿りその先にいたのは

「（シーク……。！？）」

あゝあ、フォックスつたら可哀想……。」

その目線にこもった意味を悟ったマルスは、表面だけの同情をした。

学校生活初日。

もう既に大波乱が起こりそうです。

終わり。

転校生に恋とかがち(後書き)

いろいろと大変なスタートになりました。今後の展開にご期待ください。

ハンバーグは作ってみると以外に難しい

すま家、台所。

今日は皆の帰りが遅くなるので、家に残っているアイクとリュカは夕飯作りをしていた。

「さて、ご飯も炊いて味噌汁も作りましたから、後は主菜のハンバーグだけですネ。」

「…そうだな…。」

「僕は今材料を出しますので、アイクさんは冷蔵庫から卵と牛乳、それからひき肉を取ってきてください。」

「…分かった。」

アイクが冷蔵庫に向かって戻ってくるまでの間、リュカはパン粉・玉ねぎを用意する。

「…持ってきたぞ。」

「ありがとうございま……………す?」

卵・牛乳が置かれ、ここまでは順調だった。

しかし、リュカはアイクが持っている大量のパックに言葉を失う。

「………… アイクさん、それは何ですか?」

「肉。」

「肉は分かります…………何でそんなにあるんですか…………?」

「気にするな…。」

「気にしますよ!戻ってきてください!」

「…………仕方ない。」

アイクは渋々て使う分だけのひき肉を置き、冷蔵庫へ再び戻っていく。

「(そういえば、アイクさんってかなりの肉好きだったです…………。)

「置いてきたぞ……。」

「そうですね、では始めましょう。アイクさん、この玉ねぎみじん切りにしてください。」

「……肉は……？」

「まだ使いませんよ、さあ初めてください。」

スバシとリュカに言われ、アイクは渋々と玉ねぎをみじん切りにし始める。

その間にリュカは付け合わせの野菜を洗っている。

ボールにひき肉・パン粉・卵・炒めた玉ねぎを入れ、最後に胡椒をふる。

「よし、あとはこねて形を作ります。」

「俺がやる……。」

「えっ、でも……。」

「……お前だと手が小さいから手間がかかるだろ？俺に任せろ……。」

「そうですね……じゃあお願いします。」

アイクに形作りを任せ、リュカは洗った野菜を皿に盛り付ける。

「（アイクさん、ちゃんとやってくれるかな……？）」

リュカはチラリとアイクの方を見ると、均等大きさのハンバーグが並べられていた。

「（良かった、ちゃんとやってくれて　　ん？）」

リュカは気付いた。

並べられたその中の一つが異常にでかいことに。

「アイクさん！！均等にやってくださいよ！！」

「やってるじゃないか。」

「やってません！何で一つだけ大きいのがあるんですか！？」

「……目の錯覚だろ。」

「錯覚じゃありませ ああっ！今隠しましたね！？」

「気のせいだ。」

「気のせいじゃありません…もおお、アイクさん！！」

そんなこんなだが夕飯は無事仕上がり、帰ってきた皆を疲れた顔のリユカと相変わらぬ無表情のアイクが出迎えた。

終わり。

ハンバーグは作ってみると以外に難しい（後書き）

すまさん家はこのように時たま休日の話を含みながら進んでいきます。学校編ばかりだと私の息が詰まるので……（でも頑張ります！）

嫉妬とやきもちだと後者の方が可愛く聞こえる

「（ふう……また仕事増えちゃったな……。）」

破れたカーテンを両手に抱え、シークは廊下を歩いている。

可愛い星柄模様のこのカーテンはカービィの部屋のもので、数分前カービィがポポとナナとふざけあっていたところすっかり破いてしまい、3人が『直して』と泣きながらシークに頼んだのである。

「（まあ、退屈しないで済むからいいけどね……。ん？）」
リビングに入ったシークの目に最初に入ってきたのは、ムスツとした顔で頬杖をついているリンクの姿だった。

「……………」

いつも穏やかな彼が珍しい、ケン力でもしたのかと思いながらシークは彼の近くに座るが、リンクは何も言わず不機嫌な顔のままだ。

「（……ああ、成程ね。）」

彼の不機嫌の答えは、すぐに分かった。

ゼルダがソファーに座り、スヤスヤと気持ち良さそうに眠るピットに膝枕をしてあげていた。そんな彼女もまた瞼を閉じ、夢の中にいる。

「午前中、ピットは乱闘あっただろ？それでゼルダが彼に膝枕してあげてるだけ……。」

「……………」

「彼女は皆に優しいからね。」

「……………そんなこと、分かってるけどさ……。」

ようやく口を開いた彼の言い方は、駄々をこねた子供のようにだった。
「分かってるけど……………何？」

「…………ゼルダがさ……ダークはもちろん、アイクやマルス、ロイもピットも…………君でさえも彼女と仲が良さそうにしてるのを見ると…………なぜかムカムカするっていうか…………いらついてくるんだ…………これっておかしいよね？何ていうか…………ゼルダをとられてしまいそうな感じがしてさ…………何だろ？この感情…………ゼルダは皆のものなのに、まるで自分のものみたいに…………ゴメン、何か最低だよね…………。」

「…………成長したね、リンク。」

「へ？」

帰ってきた言葉の意味が分からず、リンクは疑問の声を上げる。

「何…………成長って…………？」

「君にもようやく『嫉妬』の感情が生まれたのか。」

「『嫉妬』…………？」

「簡単に言つと『やきもち』……かな？」

「?……どういふことなの……？」

リンクが首を傾げると、シークは説明を始めた。

「今日みたいにゼルダを独占したいと思つたりすること……それが叶わずにどうしてもどかしくなる時、訳も分からずイライラしてくる……それが『嫉妬』だよ……」。

でもね、『嫉妬』は汚い感情なんかじゃないんだ。恋以外でも起こりうることだし……そう、例えるなら乱闘とか。」

「乱闘……？」

「例えば君がマリオさんに何度も負けていたとする。どれだけ戦つても勝てない、いくらトレーニングしても自分は強くない……そういう時なぜか無性に憎らしくなり、どうしても彼はあんなに強いのか、何だかずるい。って思ってしまったら?……これで君はマリオさんに『嫉妬』したってことになるんだ。」

「そう……なんだ。」

「『嫉妬』は汚い感情ではないけど、あまりいいものでもない……リンク、君は優しいから普段はその気持ちを押し殺していたんだろ?？」

「……………」。

「カービイ達みたいにすぐ飛び付いて甘えることなんて出来ないしね……ま、このイライラの解消法はその人次第だから。君は、どうやって解消するの?」

「お、俺は……………」。

リンクが言いかけたその時、

「うつゝ……」と寝ていたピットが小さく唸り、うつすらと目を開いた。

「んあ……?リンクさん、シークさん……………」。

「あつ……ピット、おはよう……。」

「おはようございます……僕、もしかして寝てました……？」

「かなり熟睡してたよ。」

「そうなんですか……家に帰ってかなり眠くて……ゼルダさんに『寝なさい』って言われたのまでは覚えてるんですけど……。」

ピットが眠たそうに目を擦っていると、ゼルダが静かに目を開けた。

「ゼルダさん、おはようございます。」

「あれ……？私、寝ちゃいました……？」

「二人共、かなりぐっすり寝てたよ。」

「そうですか……。」

ゼルダは目を擦りながら時計を見ると、時刻はもうすぐで3時になりそうだった。

「リンク……もうすぐで3時ですよ？」

「え？………いっけない！！おやつ作らなきゃ！！」

リンクは慌てて立ち上がり台所へ向かおうとすると、ゼルダもソファーから立ち上がった。

「リンク、私も手伝います。」

「えっ、でも……。」

「一人より二人の方が早く作れます。私にも手伝わせてください。」

「ゼルダ………うん、じゃあお願いするよ。」

リンクはニコリいつもの穏やかな笑みを浮かべると、ゼルダと共に台所へと向かっていった。

シークがその様子を見てみると、何やら不安そうな表情をしたピットが彼の隣に座った。

「どうしたの？そんな顔して。」

「いえ、あの……リンクさん、僕のこと怒ってませんでした？」

「え？………どうして？」

「……リンクさんはゼルダさんのこと好きなのに……僕がゼルダさんに膝枕してもらったから、その……怒ってるんじゃないかと思って……。」

「……怒ってたね、さっきまで。」
「やっぱりですか……!？」
「でも、直ったみたい。彼はもう怒ってないよ。」
「本当ですか……？」
心配そうなピットの頭を、シークの手が優しくクシヤリと撫でる。
「大丈夫だよ……どうやら彼は『解消法』を見つけたみたいだからね。」

リンクのイライラ解消法
とにかくゼルダと触れ合う。

彼女の笑顔を見ると落ち着くそうです。

終わり。

嫉妬とやきもちだと後者の方が可愛く聞こえる（後書き）

嫉妬ネタは始めダークを思おうと思ったのですが何故かピットに……（汗）ダークは書いてて動かしやすいのであるべく積極的に出演させたいです。

服はサイズを見て着ないと大変なことになる

すま家、リビング。

今日の洗濯当番・マルスとシークは取り込んだ洗濯物を畳んでいた。

「よし！終わった。」

「昨日は皆乱闘あったからね……衣装ってマントやドレスとか、畳みにくくてしょうがないよ。」

「そうだよね……。」

ふと、マルスは近くにあったアイクの衣装をおもむろに手に取り、それをジッと見つめる。

「どうしたの？」

「……僕さ、他の人が着てる衣装、着てみたいって思うんだよね……君もそう思ったりしない？」

「いや、別に。」

「もう！ノリ悪いなあ！……でも、この衣装はどうやって着るのかな？とか考えたことあるだろ？」

「……少しはね。」

「ほらね！……皆買い物から帰るまで、まだ時間あるよね……。」
壁にかかっている時計をチラリと見た後、マルスは目を輝かせてシークを見る。

「……終わったらちゃんと畳んでよね。」

「わかってるよ……じゃあシークには、ハイこれ。」

そう言っただけでマルスが渡したのは、ロイの衣装だった。

「へ？」

「僕一人で仮装大会してもつまらないでしょ？だから君も参加するの！」

「拒否する権利は？」

「無いよ。さ、早く着替えよう」と

マルスはアイクの衣装を持つと、ルンルン気分で隣の部屋に歩いていった。

「……………仕方ないなあ。」

一人残されたシークはやれやれと思いつつ、ロイの衣装に着替え始めた。

「……………つと、こんな感じかな？」

鎧を身に付けマントを着込み、シークはサムスの部屋から持ってきた鏡で自分の姿を見る。

普段の忍者の様な衣装から一変し、騎士となった姿にシークは自分でも驚いた。

「（へえ……………服装を変えるだけでこんなにも印象が変わるものだとはね……………）」

「わあ……………シーク結構似合うじゃん！」

隣の部屋からヒョコリと顔を出したマルスは喚声を上げる。

「どっかのRPGに出てきそうだよね……………」

「そうかな……………で、マルス。君はどうなの？」

「いやあ、それがさ……………」

マルスは困ったように笑いながら部屋から出た。

アイクの衣装はマルスにとっては大きすぎ、全身ダボダボの状態であった。
特にズボンとマントは長すぎるため、ズルズルと引きずって歩いている。

「……サイズ大きいね。」

「そうなんだよ、アイクの衣装ってカッコいいから一度来てみたかったんだけどな……。」

シヨボンと落ち込むのもつかの間、マルスは今度、シークの衣装を手を取った。

「マルス……まさかとは思うけど……やめておいた方がいいよ。」

「僕ね、アイクの衣装の次に君の衣装が来てみたかったんだ！」

マルスがキラキラと目を輝かせてシークに目で訴えると、彼はやれやれと頭を振った。

「後悔しても知らないよ……。」

「やったあー！じゃあ君はハイこれ。」

マルスが再びシークに渡した衣装は、今度はリンクのものだった。

「また着替えると……？」

「うん じゃあ今度こそ着てみせるよ！」

マルスはシークの衣装を持つと、急々と隣の部屋に歩いていった。

「……………」

シークはもはや呆れつつも、リンクの衣装に着替え始めた。

「……よし、完了。」

着替え終えたシークは再び鏡の前に立つ。

「（んー何ともいえないなー……ってか、白タイツだしスカートなんかスースーするし……リンクはよくこんな服、毎日のように着れるな……。）」

その時、『シーク……』と弱った声が隣の部屋から聞こえた。

「どうしたの？」

「お願い……ちょっと来て……。」

「……？」

何だろう？と思ひながら隣の部屋に入ったその瞬間、シークは盛大に溜め息をついた。

「……何をやってるの、君は……。」

そこにいたのは、引きつった笑みを浮かべちょうど腿辺りで止まっているズボンを上げようと努力した果てに力つきたマルスだった。上着は何とか着たものの、元がピッチリした素材のスーツのためズボンはもうこれ以上上がらない状態になっている。

「シーク……助けて……。」

「だからやめておいた方がいいって言ったのに……君と僕じゃサイズだって違うんだしさ。」

「とりあえず、頑張つて脱いで見るね……ふんっ！！」

「ちょっと、気を付けて脱いで」

「あつ、今ビリッて。」

「ちょっとマルス、僕明日乱闘あるからそれ着なきゃならないんだけど。破いたりしたら、後が酷いよ……？」

「だって脱ぎ方分かんないんだものー！！」

「しょうがない……僕が手伝うよ……ほら、僕が引っ張るからまずズボンから脱いで。」

「えー『脱いで』だなんて……夜まで待てないの？ シークったら強引なんだから（ポツ）」

「……じゃ、後は頑張ってね。」

「わーごめんなさい！！冗談だから！！こんな格好で僕を一人にしないで！！お願いだから手伝って！！！」

数十分後。

買い物から帰ってきたアイク達の目に飛び込んできたのは、ゴチャゴチャになった洗濯物と、その中にマルスとシークが疲れきってうつ伏せになって倒れている光景であった。

終わり。

服はサイズを見て着ないと大変なことになる（後書き）

マルスとシークは人気もありとても動かしやすいキャラです。マルスがボケてシークが突っ込み、シークがボケてマルスが突っ込むといったバランスがとれています（笑）

昨日の敵は今日も敵

午後のすま村学校。

教室では生徒達がマスターの授業を受けている。

カリーン、カリーン

チャイム変わりのベルが鳴らされ、マスターは教科書を閉じた。

「今日はここまでのようですね……………掃除当番はしっかりと掃除を
してくださいね。では皆さん、さようなら。」

『さようなら〜!』

マスターは職員室へと戻り、掃除当番以外の生徒達は帰り支度をす
る。

今日の掃除当番・3班（シーク・ソニック・ロイ・カービー・ピカ
チュウ）は用具入れからホウキやらモップやらを取り出し掃除を始
めた。

「ポヨ〜 お掃除お掃除〜」

「ピ〜カピカ〜」

「さて、早く片付けようか。」

「Yes! 早くrunningしたいぜ!」

「う〜めんどい……………マルスもアイクも待っててよ〜?」

「うん、じゃあ僕ら公園にいるからね。」

「……………先に行ってる。」

「よし、俺らも帰るか。」

フォックス達はカバンを持ち、席から立ち上がった。

「トレーナー、今日お前日直だったっけ？」

「うん、だから花壇に水をやっていかなきゃ。」

「俺ら公園にいるからよ、終わったらピカチュウとピチューも連れてこいよ。」

「分かった。」

「さてと……………ん？」ふと彼らが目をやった先に、プクリンが曇った表情で俯いていた。彼女の隣のプリンは心配そうにプクリンを見ている。

「どうしたよプクリンちゃん？そんな暗い顔して。」

「ファルコさん……………いえ、大したことではありませんのよ……………」

口ではそう言うものの、プクリンは『ふう……………』と深い溜め息をつく。

「プリ……………お姉様ったら朝からずっとこうなんでしゅ……………」

「そうなのか……………プクリンさん、俺達でよかったら何でも相談に乗るぜ……………」

フォックスが顔を赤らめて言うと、パアツとプクリンの顔が明るくなった。

「本当ですの……………！？ありがとうございますわ！」

「お……………おう……………」

プクリンの笑顔を見たフォックスは、思わず顔をにやけさせる。

この時のファルコとウルフの呆れた眼差しに彼は気付いていなかった。

「プリ！ここじゃ何でしゅから公園に移動しましょうでしゅ！」

「そうだな、どうせ俺らもそこで待ち合わせしてるしよ。」

「ついでにオリマーさんとこのパン屋でパン買ってこーぜ」

プクリンとプリンを加え、フォックス達は教室を後にした。

すま村公園。

フォックス達とブクリン姉妹、そして途中から加わったマルスとアイク（正しくは、道中アイクを発見したプリンが彼に抱きついて離れなくなり、やむをえず彼らも同行することになった）の7人は、芝生の上に座り早速買ったパンを食べていた。

「旨え〜！すきっ腹にしみる〜！」

「ん！やっぱオリマーさんとこのメロンパンは最高だぜ！」

「村にこんな美味しいパン屋さんがあったなんて……素敵ですわ。」

「あれ？俺の唐揚げパンが無え……！」

「ファルコ君の？それだったらアイクが食べちゃったよ。」

「何で勝手に食ったんだよお！？最後までとつといてたのによ〜！」

「……肉の誘惑には勝てなかった……。」

「さすがアイク様……悪びれもなく口先だけで謝るあなたも素敵でしゅ〜」

「てかファルコ君、鳥の君が鳥を食べるなんて共食いじゃん？」

「何だと〜！？俺はニワトリじゃねえ〜！！！」

「さて、本題に入るけど……ブクリンちゃんは何を悩んでるの？」

「はい……実は私、お友達になりたい方がいらっしやるのですけど……私内気ですので、いつも声をかけられずに終わってしまうんですの……。」

そう言い終えるとプクリンはシュン、と落ち込んだ。

「プクリンさん……。」

「友達になりてえ奴……それってうちの学校にいるのか？」

「はい、学校の生徒さんですわ。」

「へ……どんな奴なんだ？」

ウルフが質問すると、プクリンは頬を染めて話し始めた。

「とても、素敵な方ですわ……澄ました綺麗な顔に、髪もサラサラと絹のように美しく、優しさが滲みでいて……花に例えるなら、そう……『白桔梗』の様な……。」

「花？『白桔梗』？」

「プリ、お姉様は花が大好きなんでしゅ。花言葉なんて全部言えましゅよ。」

「……すごいな。」

「桔梗の花言葉は『誠実』『優しい温かさ』……まさにあの方にピッタリですわ……転校してきたあの日から、ずっと目で追っていましたの……これを『一目惚れ』というんですのね……。」

話し終えたプクリンは、ポ……と赤い頬のまま遠い目をした。

一方、フォックスはプクリンの好きな人が自分では無かった（彼女が言ったその特徴は全て人間のものだったから）ことにショックを受けていた。

「（そ……そんな……誰なんだ、プクリンさんが惚れた男は……！

?

ワナワナと震えるフォックスの様子を、マルスはほんの少しの同情心が混ざった眼差しで見ていた。

「（あゝあ……本当に可哀想にね……ましてや、プクリンちゃんの恋のお相手がアイツだなんて彼が知ったら……。）」

その時、
「お待ちせう！」
と元気な声が後ろから聞こえた。

振り返ると、掃除を終えた3班全員とピチューを肩に乗せたトレーナーがこちらに歩いてきた。

「お、皆お疲れ。」

「ああっオリマーさんとこのパン！ずるいよう！」

「ペポ〜食べた〜い！」

「ハイハイ、ちゃんと君達の方も買つてあるから。」

マルスがパンの入った紙袋を差し出すと二人は「わい！」と喜んでそれを受け取る。

「Hey, guys、こんな所でpicnicか？」

「まあ、そんな所だな、ソニツクも参加しろよ。」

「Thanks、そうさせてもらっただけ。」

ワイワイと賑わう中、好きな人……シークを見つけたプクリンは、頬を染めプリンの後ろに隠れている。

「もうお姉様！せっかくシークさんがいるのに、チャンスなんでしゅよ！？」

「プ、プリン！声が大きいですわよ……！」

「……何がどうしたの？」

!!

二人が顔を上げると、名を呼ばれ反応したシークがいつの間にか目の前に座っていた。

「あ……シーク、さん……!!」

「プリ！お姉様がシークさんに言いたいことがあるみたいでしゅよ！」

「……!!……プリン……!!?」

「ほらお姉様、今日こそは思いきって想いを伝えるんでしゅ！」

ガシッとプリンは後ろのプクリンの手をつかみ、そのままシークの方へと乱暴に投げる。

「キャ……ッ……!!」

「おっと。」

よろめいたプクリンをシークは受け止め、二人の距離はかなり近い状態になっていた。この光景を見たフォックスはシヨックのあまり固まっている。

「……………っ!!……ごめんなさいですわ!!」

耳まで真っ赤に染まり、プクリンは慌ててシークから離れる。

「僕は構わないけど……君はケガとかしてない？」

「え……大丈夫、ですわ……。」

「そう……良かった。」

フツと優しく微笑んだシークに、プクリンの心臓は破裂寸前だった。

「えと……あの……!!」

「お姉様……!しっかりするでしゅ……!」

「（ハッ……!!そうですわね……『今日こそは言っ』と決めましたもの……!!）」

幾分か落ち着きを取り戻したプクリンは深呼吸をし、改めてシークの方を向くとゆっくりと口を開いた。

「……シークさん……」

どうか私と、お友達になってくださいませ!」

『……………』

シークを始め様子を見ていたマルス達も、驚きのあまりポカンと口を開けていた。

「あの……ダメ、でしょうか……?」

「別に構わないよ、むしろ大歓迎。よろしくねプクリンちゃん。」

ニコ、とシークは再び彼女に優しく微笑んでみせた。

『……やったああ……!』

嬉しさのあまりプクリン姉妹は手を取り合いピョンピョンと跳ねていた。

一方、フォックスはプクリンの想い人が犬猿の仲であるシークだということによる絶望感と、そのシークにプクリンを奪われたという敗北感にブルブルと身を震わせていた。

「フォックス…どうした…？」

「おい、フォックス…。」

「っ畜生おおおおお~~~~~~~~っ!!」

キラキラと涙を流し、フォックスは勢いよくその場から走り去っていった。

「……………行っちゃったよ。」

「まあ、これで浮気がチャラになりやあいんだけどよ…………。」

「フォックス……………どうしたんだろう？」

「何か面白くなってきたね。」

「そうかな……………僕にはフォックスが物凄く可哀想に見えるよ…………。」

「……………同感だ。」

彼らがフォックスを同情する一方で、プクリンは想いを口に出来た喜びと嬉しさで胸がいっぱいになっていた。

次の日の朝。

日直のシークが花壇に水をやっている、『シークさん！』と後ろから声が聞こえた。

シークが振り返ると、耳につけた白いリボンを揺らしながらプクリンが駆け寄ってきていた。

「おはよう、プクリンちゃん。」

「おはようございますわ、今日はシークさんが日直なんですのね……」

「ああ、面倒だけど花の水やりは結構好きなんだ。」

「……花壇にはこんなに花が咲いているんですのね……綺麗……。」

「そうだね……僕はこの小さな紫色の花が好きだな……。」

「あ……それは『紫苑』ですわね、花言葉は『追憶』ですわ……。」

「そうなんだ……じゃあこの鉢から生えた黄色い花は？」

「『ミモザ』ですわ。」

「この色とりどりの小さな花は？」

「『ポピー』ですわ。」

「……プクリンちゃん、すごいねえ……。」

「はっ！いえ……出過ぎた真似をしてしまいましたわ……ごめんなさい。」

「そんなこと無いよ。そうだ、良かったら今日家においでよ。家の花壇にもいろいろ綺麗なものが咲いてるからさ、是非君に見て欲しい」

な。」

「は……はい！喜んで！」

喜びのあまり頬を紅潮させながら、プクリンはニコリと微笑み頷いた。

その様子を、校舎の影からフォックスが嫉妬オーラ全開で憎たらしそうに眺めている。

「シークの野郎……！！プクリンさんとイチャつきやがってよぉ……

……！！ぜってえ修理代とプクリンさんをアイツから奪ってやる

……！！！」

やっぱり大波乱が起きそうな（もう起きた？）学校生活。彼らの運命やいかに……！！

終わり。

昨日の敵は今日も敵（後書き）

すま村学校のイメージは、「ひぐらしのなく頃に」の雛見沢分校みたいな所です。生徒が23名しかいないので学校は小さいのです。

でもグラウンドやプールはある………探してみると、突っ込み所満載ですね（汗）

鼻をつまんで物を食べると味がしないっていつげど、やっぱりするものはする

すま家、食卓。

『ごちそうさまでした!』

夕食を終えた一同はそれぞれ椅子から立ち上がり、食器を洗い場に持っていく。

「皆残さず食べてくれたのね……………あら?」

ふとサムスが食卓に目をやると、ピットが箸を持ったまま険しい顔をしている。

その視線の先にあるのは

麻婆茄子。

「ピット、ナス残したらダメでしょう?」

「うゝ…僕ナス嫌い……………」

「あれゝ?ピット君てば、またナス残してるゝう。」

ロイがニヤニヤと笑いながら嫌味ったらしく言つと、ピットは顔をムツとさせる。

「ふん!人参とトマト食べれない奴にそんなこと言われたくないよ!」

「んなっ！そう言っただったらマルスだってピーマン食べれないよ！」

「ちよつと、何でそこに僕を出すのさバカ！」

「人にむやみやたらバカって言うな〜！」

ロイとマルスがギャーギャーとケンカをする一方、サムスはピットにナスを食べるよう説得を試みていた。

「ピット、ナスは栄養が沢山あるんだから食べないといけないですよ？」

「栄養面では認める……でも、この匂いとか食感とか、味もダメなんだよ〜……。」

「気持ちは分かるわ。でもせめて一口でいいから食べなさい。」

「うっ……本当に嫌なんだってば〜……。」

とうとうピットは箸を置き、プイとそっぽを向いてしまった。

「困ったわねえ……。」

「どうした？何か揉め事か？」

ちょうどその時、ファルコンがリビングから歩いてきた。

「あなた……実はね、ピットがナスを食べてくれないのよ。」

「何だと？それはいけないな！……ピット、好き嫌いをしているとパルテナさんに電話でいいつけるぞ！」

「うぐっ……！……そ、それだけは……。」

「それにな、何でも食べないと強くなれないんだぞ！父さんを見ると俺のように強くなりたかったら、何でも沢山食べないと！」

『ハッハッハッ！』と高笑いをするファルコンに、その様子を見ていたロイが思い出したように言った。

「あれ？でも父さんって、しいたけ嫌いじゃなかったっけ？」

「何でも沢山食べないと！」

「うわー！今の無駄に長いスペースの間でなかったことにしちゃったよー！」

「父さんズルいよー！！！」

「ハッハッハッ！とにかくピット、食べなさい！」

「ううううううううー！！いやだよー！！！！っ！！！」

その後、泣きながら家中を逃げ回るピットと、そんな彼を麻婆茄子を片手に追い掛けるファルコンの姿が目撃されたとか。

終わり。

鼻をつまんで物を食べると味がしないっていうけど、やっぱりするものはする

この作品が完成するまでいろいろと忙しかったので執筆が遅れてしまい申し訳ございません。（私のサイトがもう少しで10000ヒットなもので……）　もし私のサイトを見つけた方、その時はメールでも拍手でも掲示板でもお知らせしていただければ喜びます。

風邪を引いたらとにかく水分と睡眠をとろう

すま家、リビング。

今日はシークとピット、ちみっこ達以外は皆乱闘で、残った彼らは留守番をしていた。

ピットとちみっこ達がテレビを見ていると、テーブルで破れた衣類を縫っていたシークが突然『痛…っ！』と声を上げた。

「……シークさん、どうしました!？」

慌ててピットが駆け寄ると、シークの白い指の先にポツリと小さな赤い傷が出来ていることに気付く。

「大変だ……!!シークさんが縫い物でケガをするなんて……!!」

「大袈裟だよピット、『弘法にも筆の誤り』って言うじゃないか。」

「そうですね……シークさん、今まで一回も裁縫でケガしたこと無いじゃないですか……熱でもあるんですか？」

「ええっ!?シーク兄ちゃんお熱あるの!？」

ピットの言葉に反応したちみっこ達はわらわらとシークの周りに集まってくる。

「だから僕は大丈夫だって」

ピトリ、とシークの額にナナの手が当てられ、その途端彼女の顔が驚いたものになった。

「大変!シーク兄ちゃんおでこ、すっごく熱い!」

『えええ~~~~~!??』

「……シークさん……何ともないんですか……?」

「そっいえば……何か……フラフラする……。」

ボタンッ

「キャ~~~~シークさ~~~~んっ!!」

「ペポ~~~~シークが倒れた~~~~」

「とにかく、一旦ソファーに寝かせよう!それとマリ……Dr・マリオに電話しなきゃ!」

10分後。

ようやくすま家に着いたDr・マリオはソファーに横になっているシークの容態を聴診器を使って診察する。

ピットとちみつこ達、マリオの付き添いのピーチは心配そうな表情でその様子を見守る。

と、ここで診察を終えたマリオは耳から聴診器を外した。

「Dr・マリオ……シークさんは一体どうしたの!？」

「何、厄介な病気なんかじゃない。ただの風邪だよ。」

「風邪……?」

「おそらく疲れが溜まっていたんだろう。彼、続けて夜更かしをしていたとかあるかい？」

「……そういえばこの頃、縫い物をやつて遅くまで起きてることがあります……。」

「それが原因かもな。とにかく十分に水分を与えて、十分寝かせること。」

Dr・マリオはそう言いながら何やらカルテに書き込む。その時、
『ハイ』とピーチはネスに風呂敷に包まれた丸いものを渡した。

「これは？」

「ウチで採れたメロンよ。冷やして彼に食べさせるといいわ、そしてたら風邪なんて吹っ飛んじやうから。」

「わあ……お氣遣いもメロンも、ありがとうございます。」

「いえいえ、彼には早く元気になってほしいもの。じゃあ私達はこれで。」

ピーチとDr・マリオは立ち上がり、『お大事に』と言い残して玄関へと向かっていった。

ネスが早速メロンを冷やしに台所に向かったのと入れ違いに、ポポとナナがタオルを浸した氷水を持ってきた。

「お水持ってきた。」

「これでおでこ冷やすの。」

ナナがタオルを絞りシークの額に乗せると、彼は氣持ち良さそうに『フー……』と息を吐く。

「どうしよう……他に何かしておくことってあります？」

「Dr・マリオは『水分をとれ』って言ってたから……ポリスエツトあつたつけ？」

「あ、確か昨日で切らしちゃったんだよね。」

「買ってくるしかないな……カービィ、リユカ、一緒に買ってきてくれる？」

ネスが言つと、『ポヨ!』『分かりました』と二人は返事をした。

「シークさん、何か食べたいものありますか？ついでに買ってきてますんで。」

「……何か……ゼリーみたいな、冷たいものがあれば……ゴホッ！」

熱のため喘ぎながら答えたシークの声は弱々しかった。

「ゼリーですか！……じゃあポリのついでに何かフルーツのゼリーも追加して！」

「ハイ！分かりました！」

「いつてきまゝす！」

リユカとカービィが家を出た後、ピットとネス、ナナは心配そうな面持ちで熱に苦しむ兄を見つめる。

「氷枕作つたよ。」

台所から戻ってきたポポがピットに氷枕を渡すと、それをシークの頭の下に置く。

「シークさん……気持ちいいですか……？」

「……うん……ありがとう……ゲホッゴホッ……！」

時折彼が咳き込む度に、ピット達は不安な気持ちになってしまう。

「どうしよう……後は何をすれば……！？」

ピットがオロオロとしていると、シークが口を開き弱々しい声で言った。

「皆……僕のことはいいから、あと構わなくてもいいよ……？」

「シークさん！？……何を言ってるんですか……！？」

「……僕が風邪を引いたのは、自己管理が出来なかったからだ……
『バカは風邪引かない』って言うけど、自分の体調の管理が出来なかった僕こそがバカなんだよね……ゴホッゴホッ……！」

「……シークさん……。」

「ほら……うつすといけなから、離れた方がいいよ……ゴホッ……！」

「……構いません。」

「え……………?」

「シークさんの風邪がうつっても全然構いませんよ!!だって、こんなに苦しんでるシークさんを放っておくなんて出来ません!!僕はシークさんが治るまでずっと側にいます!!」

「ポポも〜!」

「ナナも〜!」

「……………僕もだよ。君の夜更かしの原因は僕らの衣類の直しのためだったっていうし、そうなるとやっぱり責任感じちゃうからね。」

「……………君達……………」

強い瞳で自分の方を見つめるピット達にシークは目を丸くした後、フツと穏やかに微笑んだ。

「……………ありがとう……………君達みたいな兄弟がいてくれて……………嬉しいよ……………」

瞼がゆつくりと降りていき、完全に閉じたと共にシークの寝息が聞こえてきた。

「……………寝ちゃった。」

「さっきよりも熱は下がったみたいだね……………」

『よかった〜!』

ポポとナナが嬉しさのあまりはしゃぎ回っている隣で、ピットはシークの頬を伝う汗を優しくハンカチで拭き取った。

これからはあまり無理しないで、手伝って欲しいときは言ってね?

お兄ちゃん。

おまけ。

シークの風邪が治った次の日。

「ふえつくしよん!!」

「ピット、大丈夫?」

「ううゝ……風邪引いたみたいです……。」

「僕のがうつったんだよね、ゴメン……今日は安静にして寝てな、僕がついててあげるからさ。」

「え!?!本当ですか!?!」

「うん、あの時のお返しだよ。」

「あ……ありがとうございます!!(シークさんが看病してくれるなんて……はうゝなんて幸せなんだろ!!)」

終わり。

風邪を引いたらとにかく水分と睡眠をとろう（後書き）

ロイ達には平気で毒を吐く彼ですが、ちみっこ達には優しい。そんな感じで書いてみました（＾－＾）

丸いものはよく転がる

すま村の、とある道。

「スイカ スイカ」

「スイカ スイカ」

ポポとナナは上機嫌に歌いながら、大きなスイカをゴロゴロと転がして歩いていた。

このスイカは二人がオリマーの所におつかいに行った時、オリマーが家で栽培したスイカが見事に実ったので、おすそわけとして二人にあげたものである。

「おつきなスイカ貰っちゃったね。」

「皆で食べようね。」

「ポポ、スイカ大好き！」

「ナナも大好き！」

「いっぱい食べようね。」

「ねー！」

そんなことを二人は話しながら歩いていた。

ちょうど坂道に差し掛かろうとした、その時、

ガツッ

「あ……っ……！」

どてっ！

ナナが足元にあった石に気付かずに、つまずいて転んだ。

その勢いでスイカを押してしまい、ゴロゴロと転がったスイカは坂道に入ってしまった。

『あゝ！！』

スイカは徐々にスピードを増していき、勢いよく下へと転がっていく。

「スイカが逃げちゃった〜！」

「待って〜！」

二人は慌てて駆け出し、猛スピードのスイカを追い掛けていった。

「ウツホ、ウツホホ。」

「ウキヤキヤ！」

乱闘を終えたドンキーとデイディーはトコトコと帰り道を歩いていた。

「ウホ、ウホホ。」

「ウキヤ？ウキヤキヤ？」

「ウツホ！ウホ！」

「キヤキヤ〜！ウキヤキヤキヤ〜！」

話している内容は分からないが、何だか楽しそうな二匹である。

そんな時、ゴロゴロゴロ……！とあのスイカが坂を転がって二匹に

近付いてきた。だが彼らは、話に夢中で気付く様子もない。
スイカはそのままぶつかると思いきや、ガツツと石にぶつかり、そ
の衝撃でバヒュウンッ！と宙を飛んだ。

そしてスイカは二匹めがけて飛んでいき

ゴーーーーンッ！！

「ウホウ……………ッ!？」

スイカが頭にクリーンヒットしたドンキーは目を回し、バタンッと
その場に倒れた。

「ウキヤキヤ〜!！」

デイディーが駆け寄ったその遙か後ろの坂道では、スイカが何事も
なかったかのように再びゴロゴロ…!と転がっており、二匹の横を
ポポとナナが『待つて〜!』と叫びながら通過していった。

「ふう…………この村もすっかり夏になったな。」

「全くだ、家の中が暑くてたまらん。」

こちらで乱闘を終えたメタナイトとルカリオが帰り道を歩いている。

「こんな暑い日は、冷たいスイカでも食べたいな。」

「そういえば、もうすぐでウチのスイカも収穫時だな。」

「今年も立派に育っているといいな！」
「そうだな。」

そんな時、ゴロゴロゴロ……！とまたあのスイカが坂を転がって二匹に近付いてきた。だが彼らは、話に夢中で気付く様子もない。
スイカはガツツと石にぶつかり、バヒュウンッ！と宙を飛んだ。

そしてスイカは二匹めがけて飛んでいき

ゴーーーーンッ！！

「ぐはあ……………っ!？」

スイカが頭にクリーンヒットしたメタナイトは目を回し、バタンツとその場に倒れた。

「メタナイト!? オイ、メタナイト……!!」

ルカリオが駆け寄ったその遙か後ろの坂道では、スイカが何事もなかったかのように再びゴロゴロ……！と転がっており、二匹の横をポとナナが『止まって……!』と叫びながら通過していった。

「暑いね、ピーチ……。」

「暑いわね、マリオ……。」
「こちらは買い物を終えたマリオとピーチ

が帰り道をてくてくと歩いている。

「それにしても、今日はお野菜が安かったわね。」

「そうだね、それにキノコも安かったから沢山買ったよ。これですばらくは食卓にキノコが並ぶな！ヒャッハウ！」

「まあ、マリオったら。」

そんな時、ゴロゴロゴロ……！と再びあのスイカが坂を転がって二人に近付いてきた。だが彼らは、やはり話に夢中で気付く様子もない。

スイカはガツツと石にぶつかり、バヒュウンツ！！と宙を飛んだ。

そしてスイカは二人めがけて飛んでいき

ゴーーーーンツ！！

「ぎゃば……………っ!？」

スイカが頭にクリーンヒットしたマリオは目を回し、バタンツとその場に倒れた。

「キヤアアゝ！！マリオ、大丈夫ゝ!？」

ピーチが駆け寄ったその遥か後ろの坂道では、スイカが何事もなかったかのように再びゴロゴロ……！と転がっており、二匹の横をポポとナナが『行かないでゝ!』と叫びながら通過していった。

「……暑い……………」

「暑いよね……………」

こちらは剣の稽古の帰りのアイクとマルスがいつもの衣装で帰り道をグツテリとした顔で歩いている。

「何なのさ、この猛烈な暑さは…………… ああゝもう！こんな着てらんない！」

暑さに耐えきれなくなったマルスはガバァッ！と着ていたマントと手甲、肩当てなどを脱ぎ捨てた。

「ふう、少しはマシになった…………… ほら！アイクも脱いで！」

「……なぜ俺まで……………」

「見てると暑苦しいの！ほら早く！」

マルスに急かされ渋々マントを脱いだその時、坂道の向こうからゴロゴロゴロ……………と何かが転がってくるのに気付いた。

「？……何だ……………」

「何か転がってくるね。」

やがてそれは段々とこちらに近付いていき、スイカはガッツと石にぶつかったかと思うと、バヒュウンッ！！と宙を舞った。

「わあ、見てアイク。スイカが飛んでるよ。」

「本当だ、夏の風物詩だな…………… しかもこっちに向かって落ちてくるぞ……………」

「アイク、あれ受け止めてよ？」

「任せろ……………」

ヒュルルル……と、砲丸の如く凄まじい勢いで落ちてくるスイカをアイクはものともせず、ドスッ！！といとも簡単に両手で受け止める。

「さっすがアイク。で、そのスイカ何？」

「…分かん……。」

その時、『止まった〜！』と喜びの声を上げながら、ポポとナナが走ってきた。

「あれ？二人共どうしたの？」

「ポポ達ね〜スイカ追っかけてたの〜！」

「やっと止まったの〜！」

「ふう〜ん、このスイカ貰ったの？」

『うん！オリマーさんから！』

「そっか、後でお礼しなきゃね。じゃあ帰って早速このスイカ冷やそうか。」

「…そうだな……。」

「お家に帰るの〜！」

「帰るの〜！」

アイクにスイカ（+マルスのマント等）を持たせ、4人はてくてくと帰り道を歩いていった。

おまけ。

翌日の夫婦の会話。

「母さん知ってるか？昨日ドンキーとメタナイトさん、マリオの3人が坂から転がってきた謎の物体に頭を殴られ、全治4週の怪我をしたらしい。」

「まあ恐い……通り魔かしら……？」

「どっちみち、母さんも気を付けんとな！大丈夫！！母さんは俺が守るからな！」

「もう！あなただったら……。」

昨日のスイカ事件は、闇の彼方に葬られてしまった。

終わり。

丸いものはよく転がる（後書き）

すま村産の野菜や果物は丈夫に育っています。なのでスイカはちょっとやそつとでは壊れないのです。……スイカって、ただ頭ぶつけても結構痛いんですね（汗）

掃除は皆で楽しくやろう

すま村学校。

ジリジリと日が照りつける中、生徒達は皆半袖に短パンの体操着でプールサイドにいた。手にはそれぞれデッキブラシを持っている。

「よし、今から説明するデ〜！」

「一回しか説明しねえからしっかり聞いとけよ〜。」

用務員のおじさんことデデ大王と、半袖短パンに着替えたクレイジーが生徒達に呼び掛ける。

「今日のプール掃除はブラシの担当とホースでの水引き係、バケツでの水汲み係に分かれてやってもらうデ。人数は……クレイジーも入れて24人か、結構な人数だな。」

「掃除が終わったら、かき氷が待ってるぜ〜。」

クレイジーの言葉に生徒達は『やったあ!』と両手を上げて喜んだ。『じゃあ早速始めるんだデ、俺様は溜まってたゴミの処理をするから、後は頼んだデ、クレイジー。』

「まっかせとけよ〜。」

デデ大王がプールから出ていくと、生徒達は早速水の入っていないプールに入った。

「よしお前ら!とつとと終わらせてかき氷食うぞ!」

クレイジーがブラシを掲げて言うと、何人かの生徒達が『お〜!』と手を上げた。

「H A H A H A!悪いがそうはさせねえぜ!」

「何だ!？」

突然響いた声に一同が驚いて顔を上げると、プールサイドでこちらを向いたソニックが勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「ソニック、何してんだ？」

「だから言っただろ？ プール掃除なんてさせねえよ！」

「何でまたそんな……。」

「あ、そういえばソニック君で泳げなかったもんね。アハハハ。」

ビシャアッ!!

「へぶっ!？」

笑いながら言ったロイの顔に、突然水がかけられた。

一同がソニックの方を向くと、彼は先から水を滴らせたホースをこちらに向けている。

「うっ!! 何するんだよ!？」

「Youが余計なこと言うからだよ!……とにかく俺がこのホースを持っている限り、このプールの水は全て俺が握っているようなものだ! Hey, guys! 掃除がしたきゃ俺からホースを奪ってみな！」

『えええ〜!？』

ソニックの無茶な発言に一同は不満の声を上げる。

「掃除終わんねえと俺、マスターに殺されるんだよ!!あとかき氷食べねえ!!」

「あのクレイジーがかき氷後回しにした……そんなにマスター恐いんだね……。」

「ペポ……僕かき氷食べたい。」

「ウキヤキヤ!」

「ピチュピチュ!」

かき氷食べたさにちみつこ達もブーブーとブーイングを起こす。

「ソニックさん、皆も困ってますし、ホースから手を離してくれませんか?」

トレーナーが優しく言おうにも、ソニックはプイとそっぽを向いてしまった。

「Ha!お断りだぜ!」

「ソニックさん……。」

「とにかくこうしても埒があかない、バケツに水汲んでこよう。」

ネスとリュカ、ピットの3人はバケツを持ち、プールから出ようと歩き出す。

だがそんな彼らをソニックは見逃すはずもなく、彼らに向かってバシャアッ!と水をかけた。

「うわ……っ!?!」

「ひゃあっ!?!」

「冷たっ!?!……あゝんゼルダさ〜ん!!濡れちゃいました!」

泣きついてきたピットの濡れた頭をゼルダはタオルで優しく拭いてやる。

「リュカ……ソニックさん!やりすぎなんじゃないですか!?!」

「Shut up!」

ビシャリ!とトレーナーにも水がかけられ、彼も頭から下までずぶ濡れになってしまった。

「ピカ!?……ピカーッ!!」

トレーナーが水をかけられたことに怒ったピカチュウはソニックに向かって10万ボルトをしようと頬から少量の電気を出す。

「Oh……そうはさせるかよ!!」

それに気付いたソニックはホースを構えて蛇口を捻り、一同に向かって大量の水を放射した。

「うわあっ!!」

「キャア……!!」

「冷たい!!」

「うわ……何すんだこの野郎!!」

その結果、一同は全身ビショ濡れになってしまった。だがシークだけは水を避けたようでどこも濡れていない。

「ピカ……!!?」

「残念だったなピカチュウ……これでお前が放電なんかしたら、足元の水を伝って全員が感電することになっちまうもんな!」

「ピ……ピイカ……!!」

「(……ソニックさんかなりヒーイル役になってる……絶対プール入りたくないんだな……。)」

そう思いながらトレーナーはワシワシとリュカの頭をタオルで拭いている。

「また水被っちゃった……。」

「あゝもうビショ濡れ!!最悪!!」

キッ!!と怒り狂うマルスの隣では、アイクが無言でタオルで頭を拭いていた。

一方。

「濡れてしまいました……………」

「ゼルダ、大丈夫……………」

彼女を心配して近付いたリンクは、今の彼女の姿に気付く顔を真っ赤に染めた。

体操着の上は生地の薄い半袖シャツで、それが濡れたためゼルダのブラジャーの色や形がに透けてくつきりと見え、とても艶かしいものであった。

「ブハアッ！！」とリンクは鼻血を出して倒れた。

「キヤア！リンク、大丈夫ですか……………！？」

ゼルダが駆け寄り助け起こすも、更に間近に見えるその光景にリンクはだくだくと鼻血を流し続ける。

その横でダークとクレイジーは『眼福、眼福』とニヤニヤした顔で彼女を見ていた。

「H A H A H A！全員ビショ濡れだぜ！」

ソニックがケラケラと笑ったその時、パシッと手からホースが何者かに奪われた。

「What!？」

ソニックが驚いて顔を上げると、呆れた顔のシークがホースを持って目の前にいた。

「ソニック君、そろそろいい加減にしなよ。皆本当に困ってるんだから。」

「Quiet！プール掃除なんてやったらプールが始まるだろ！？それだけは嫌なんだよ！！」

「おらっ……………」

バツとシークの手からホースをひったくり、彼めがけて水を噴射する。

しかしシークはそれを難なくかわした。

「ぐっ……Ha! Ya!!」

ソニックは立て続けに水を噴射するも、ギリギリの所でシークにかわされてしまう。

「畜生おおっ!!」

悔し紛れに水を放ったその時、バシャッ!と水が何かに当たった音がした。

「Yeah! やった……ぜ……」

シークに当たったと確信したソニックは前を見た直後、言葉を失った。

目の前には平然とした顔のシークが、そして彼の隣には、様子を見に来たマスターがポタポタと水を滴らせながら笑顔でこちらを見ていた。

「Oh……マスター……」

「ソニック君、いきなり水をかけるとは大したご挨拶ですね。」

顔は笑顔。しかし、その背後には金剛力士像の憤怒の顔がオーラとなって見える。

ジリジリと近付いてくるマスターに、ソニックは後ろに下がっている。

「覚悟は……出来てますね?」

「いや、Sorry、sorry!!……ひ……!!」

Nooooooooo!!」

暑い夏の今日、すま村学校のプールにソニックの悲鳴が響き渡った。

おまけ。

「ん〜！かき氷おいし〜！」

「ポヨ〜！おかわり〜！」

「夏はやっぱこれだよね〜」

一同がかき氷を味わうなか、ソニックは頭に大きなたんこぶをつくってふてくされていた。

そんな彼の肩を、ポン。とアイクが優しく叩いた。

「…泳ぎなら、教えてやる……。」

「……Thanks、アイク。」

終わり。

掃除は皆で楽しくやろう（後書き）

ソニックは泳げないということを知ったので書いてみました（笑）

彼を書く場合、和英辞書無しでは無理です（――；

）

強盗にあつたらまず手を上げるのが基本

土曜日、午後のすま村学校。

休日であるはずのこの日、教室には制服姿のアイク・マルス・ロイの3人がいた。

マルスは自分の席の引き出しをあさり、ロイは黒板にチョークで落書きをし、アイクは適当な席の椅子に座って欠伸をしている。

「…マルス、見つからないのか…？」

「確かここに……あつた！」

マルスが引き出しから手を出すと、一本の青いシャーペンが握られていた。

「あつ、見つかったの？」

「うん、これでようやく宿題出来るよ！」

「…ペンなど、何を使つても同じだろ？」

「僕はこのシャーペンじゃないと勉強出来ないの！」

シャーペンをポケットにしまい、マルスはロイの隣に行くと『僕もやる』と言つてチョークを持ち、落書きをやり始める。

ロイはプリンの絵（かなり下手）を描き上げると、くると黒板に背を向けた。

「しっかし休みなのに学校に鍵かかってないだなんて不用心にも程があるよね。」

「だよね、泥棒とか強盗が入ったらどうするんだつての。」

「…この村は呆れる程平和だ、泥棒や強盗などいるわけないだろう…。」

「ま、そうかも。じゃあそろそろ帰ろうか。」

マルスは黒板消しで落書きを消すと、パンパンと手をはたいた。

「そうだね、とつとと帰っちゃおう。」
そう言つて3人は扉へと向かつていく。
扉を開けようとアイクが手を伸ばした。
その時、

ガラッ！

「…ん？」
「あれ？」
「おりよ？」

まだ手をかけていないのに、勝手に扉が開いた。
3人が不思議に思ったその瞬間、

バシヤアッ！

『うわ……っ！！』

突然、3人は正面から水のような液体をかけられた。

それと同時に、『動くな!!』と男の怒鳴り声が聞こえた。

扉が開いた入り口には、バイクのヘルメットを被り顔を隠した男が、片手に蓋の開いたポリタンクを持って立っている。

ポリタンクと鼻につくこの臭いから、彼らはガソリンをかけられたのだということに気付いた。

男は空になったポリタンクを捨て、ズカズカと教室に入ってくる。そして3人にライターを向けた。

「動くなよ!!俺は警察に追われてるんだ……だからお前らを人質にこの学校に立てこもることにしたのさ!分かんと思うが、お前らにかけたのはガソリンだ!!大人しくしてねえと、このライターで火をつけるぜ!!」

『……………。』

3人は男の言葉に反論もせず、ポタポタと髪からガソリンを滴らせて俯き黙っている。

「ハッ!恐いか!?そりゃあ怖いよな!!なんせお前らは人質にな
つ
」

バキッツツツ!!

その瞬間、男の言葉は不意のアイクのパンチで途切れた。

「ぬあああつー!!」

ザザザ~~~~ゴーン!!

その衝撃で男の体は吹っ飛び、教室を滑った後教卓に勢いよく後頭部をぶつけた。

「痛てて……てめえ何しやが…… ひいつー!!」
顔を上げた男は怯えたように声を上げる。

彼の目の前には、不動明王より恐ろしい形相をした3兄弟が背後から禍々しい怒りのオーラを発し、ポキポキと拳を鳴らしてこちらを睨んでいた。

「あ……ええと……。」

「…何すんだこの野郎ー!!」

バキッ!!と、ロイの拳が男のみぞおちにヒットする。

「ぐはあつー!!」

「ガソリンなんかかけやがってー!!髪も制服もガソリン臭くなっちゃったじゃないか!!」

「このマルス様にガソリンをかけるなんて、何て無礼だよ！！今すぐひざまずいて謝りな！！」

ガスッ！！ドゴッ！！と音を立て、マルスとロイの蹴りの嵐が男に降り注ぐ。

「痛だっ！！ちょ、痛いんですけど　ぐはあっ！！」

しばらくするとようやく二人が蹴るのをやめ、男の上から離れた。

「（や……やつと終わ　　）」

「仕上げだ。アイク、やつちまえ。」

ホッとしたのもつかの間。無表情で拳を鳴らすアイクが目に入った途端、男の恐怖心は最高頂に達した。

「い、嫌ああああ~~~~~~~~っ！！」

突き出された拳がヒットするまでの短い間、男は涙を流して絶叫した。

一方、校舎の外では警察と野次馬の村人、そしてマスターとクレイジー、用務員のデデデ大王が集まっていた。

クレイジーの頭には大きなたんこぶがあり、マスターはそんな彼を呆れた表情で見ている。

「全く、貴方が鍵を閉め忘れなければこんなことにはならなかったんですよ？」

「だからゴメンって言うてるじゃねえかよ……。」

「まさか学校に強盗が入るとは………思いもしなかったデ。」

その時、すま家ファミリーがバタバタと駆け付けてきた。

「マスター！クレイジー！」

「おや、すま家の皆さん。一家で野次馬ですか？」

「違うわよ！ウチの息子達、もしかして学校の中にいるかもしれないの！！」

「息子達、とは？」

「アイクとマルス、それにロイの3人よ……！」

「あいつら、『学校に忘れ物を取りに行く』と言って出ていったんだ！！」

ファルコンとサムスは心配そうな顔で校舎を見る。

『おい！』

続いてマリオ家、スネーク家、ガノン家、メタナイト家、プクリン姉妹にソニックがそろそろと集まってきた。

「マスター、学校に強盗だつて！？」

「ええ。しかも生徒が3名、校舎の中にいるそうです。」

「3名とは……？」

「……ウチの、3兄弟です。」

サムスの静かな言葉に一同の顔は青ざめ、特にプリンはアイクが校舎内にいることにショックを受け失神してしまった。

「……トレーナーさん！！」

不安に堪えられなくなったリュカは、泣きながらトレーナーに抱きついた。そんな彼の頭をトレーナーは優しく撫でる。

「リンク……マルス達は大丈夫でしょうか……？」

ゼルダが不安そうに問い掛ける。

「大丈夫……であつてほしいね……。」

「ペポ！僕マルス達をお助けしてくる！」

そう言つて駆け出したカービィの手を、ガシッとメタナイトがつかんで引き止めた。

「ポヨ？メタナイト……？」

「カービィ、今迂濶に校舎に入るのは危険だ。もし万が一彼らが人質になつていて傷つけられでもしたら……それに、お前自身も何を

されるか分からないんだぞ……だから、今はどうするべきか考えるんだ……。」

「……ポヨ……。」

カービィはシュン、と落ち込み、不安そうな表情で校舎を見た。

教室内。

ガソリンまみれになった3人は、ひとまず学校に置いてあった体操着に着替えていた。

男はと言うと、椅子に座った状態で頭から下を縄跳びでぐるぐる巻きに縛られている。

「う……パンツまでグショ濡れ……ロイ、君のパンツ無事なんだろ？ 僕によこしなよ。」

「なっ！？ 嫌だよ何言ってるの！？」

「だってノーパンじゃスースーして落ち着かない……。」

「だからって僕の借りることないだろ！……そうだ、アイクのは？」

「アイクのサイズ大きくてブカブカだよ。」

「……どっちにしろ、俺は貸さないぞ……。」

「という訳だから、さっさと脱いで」

「やだっつての！ 僕がノーパンになるじゃん！」

「いいから脱げこの野郎……！」

「キャ……やめてケダモノ……！！」

マルスがロイのズボンを脱がそうとし、ロイが必死に抵抗してる最中、着替え終わったアイクは男にトコトコと近寄る。

「へっ……何だよ……？」

「……………」

アイクは何も言わず男のヘルメットを両手でつかみ、スポツと持ち上げた。

そこから現れた顔は、以前彼らがよく目にしたものだった。

「お前は……………」

「あゝ！プリムだ！」

「……チツ、顔を見られちまったか……………」

「何で亜空軍だったお前がいるんだよ？てか何で強盗やってるわけ？」

マルスにずらされたズボンとパンツ（何とか守りきった）を直しながらロイが質問すると、男もといプリムは『よくぞ聞いてくれた！』と声を張り上げた。

「教えてやるよ、俺が強盗なんてやってる理由をよ……………あの亜空事件以来、俺ら亜空軍は亜空間と共に消えた…………俺も消えるはずだった…………なのに、なぜか俺だけ生き残っちまったんだ！…………仲間もいない、この世界で一人ぼっちの俺は生活にも困り、仕方なくドルピクタウンで銀行強盗をしようとしたら失敗して警察に追われて、そんで辿り着いたこの村の学校に忍び込み、お前らを人質にしようとしたが…………このザマだ。なあ、俺の人生って何なんだろうな……………つて、あれ？」

語り終えたプリムが顔を上げると、マルス達の姿は教室に無かった。するとガラリと扉が開けられ、『あゝサツパリした』と髪をタオルで拭いた3人が戻ってきた。

「やつとガソリンの臭い落ちたよ。」

「……やっぱパンツ無いと落ち着かない……………う……………」

「誰もいないと職員室と保健室の水道、自由に使えていいね。ついでに置いてあった先生達のお菓子持ってきた。」

「……冷蔵庫に入ってた飲み物も持ってきた……………」

「…………あれ…………？プリム君、そんなに恐い顔してどうしたの？」

「……お前らな……散々俺に話させといて、聞いてねえってどういふことだよ……!!」

すま村学校立てこもり事件。

外の警察や野次馬達は、中で起こっていることを何も知らない。
。

次に続く。

強盗にあつたらまず手を上げるのが基本（後書き）

ガソリンかけられても怯むことなくキレるのがF E 3兄弟らしいかな、と思いながら書いていました。強盗を誰にしようか思案した結果、プリムを出してみようと思いました。プリムは性格分らないですが、何かXでもいっぱいいいたので一体一体性格がいろんなのいいてもいいよな……とか考えてあんなキャラになりました（^- - ^- ;

立てこもりには忍耐が必要

『犯人に告ぐ！無駄な抵抗はやめて人質を解放し、校舎から出てこい！』

ドラマなどでよくある台詞を、クレイジーは拡張機を使い校舎に向かって叫ぶ。

「聞こえたかなあ……？」

「クレイジー！ウチの子供達は大丈夫なの……！？」

「まだ何とも言えねえな……ウイスピーウッズに様子を聞こうにも、俺が校舎に近付いたことが中にいる強盗にバレたら、それこそ人質のあいつらが危ねえ……。」

「そんな……！！」

「くそ！！子供が人質に捕われてるつてのに、俺達はただ何もせずここで眺めてるつてことか……！？」

ギリ、とファルコンは悔しそうに歯をくいしばる。

「とにかく、中にいる強盗と話がしたいですね……そうだ！」

マスターはパトカーに近付き、『お借りします！』と車に備え付けである電話を手取る。

それに気付いた警官はマスターの行動を止めようとした。

「ちょ、ちよつと困りますよ先生　ぐはあっ！？」

後ろから『邪魔だ！！』とクッパに撥ね飛ばされ、警官はしばらく宙を舞うとドサツと地面に落ちた。

電話の内容が気になる各ファミリーはゾロゾロとマスターの周りに集まってくる。

「おいマスター、どこにかけるんだよ？」

「職員室の電話です、何とか犯人と連絡をとってみようと思いまし

てね……。」

「外が騒がしくなってきたね。」

マルスはトツ　を口にくわえ、窓から外の様子を覗きこむ。

「僕達が学校に来て人質になってから2時間も経ってるんだね。」

ファ　タを飲みながら、ロイは時計を見て言う。

その隣でアイクはじゃ　りこ（焼肉味　あるのかな？）を3本いつ
ぺんに食べている。

「……いい加減、帰りたくなってきたな……。」

「そうだね、そろそろ帰りたいかも……。」

「……お前らなあ……自分が人質だってこと忘れてねえか……！？」
彼らのその様子を見ていたプリムは、前回から縛られた状態のまま
額に青筋を浮かべ、3人を睨みつけていた。

その時、

トゥルルル……

トゥルルル……

突然、電話の呼び出し音が彼らの耳に入った。
「ん？電話？」

「職員室の電話だね……僕出てくる。」

そう言つて立ち上がったロイを『ちよつと待て!』とプリムが呼び止めた。

「何だよ?」

「今は俺がお前らを入質にとつてんだぞ、入質がピンピンした元気な状態で電話に出たらおかしいだろ!」?

「グルグル巻きにされてる分際で何言つてんのさ。てゆーかそろそろ僕ら帰りたいんだけど?」

「……ううゝ頼むよゝここまで事が大きくなつた以上あつさり自首したくねえんだよゝ!!ね!?本当に頼むからもう少しだけ入質になつてくれゝ俺に強盗やらせてくれよゝ!!」

号泣しながら懇願するプリムに見かねたマルスは『仕方ないなあ……』と呟くと、隣に座つてビーフジャーキーをかじっているアイクを『ほら立つて』と強引に立たせ、自分も立ち上がった。

「じゃあまず電話出ないとね、行くよプリム君。」

「おゝい……行きたいのはやまやまだけどよ、このままだと俺、動けないから……。」

「あ、そつか。二人とも、縄跳びほどこから手伝つてゝ。」

マルスを始めアイクとロイも3人がかりでプリムを縛っている縄跳びをほどこにかかる。

「……つたく、世話の焼ける……。」

「誰が縛つたと思つてんだコラア!!」

そうこうしているうちに縄跳びは外れ、ようやくプリムは自由の身になった。

「あゝ座りっぱなしはキツイぜ。」

「変な真似するなよ?」

「しねえよ、またお前らにボコられたらたまんねえからな。」

「さ、早く電話に出なきや。」

鳴り続ける呼び出し音の中、4人は急いで職員室へと向かった。

10歩程歩いた所にある職員室の戸を開けると、マスターの机にあ

る電話がけたたましく鳴っていた。

「俺が出るから、お前から動くんじゃないぞ？」

「ハイハイ分かったよ。」

プリムは電話に近付き、受話器を取り耳元（傍から見たらどこにあるか分からないが）に当てる。

「おう、誰だ？」

「もしもし、貴方は強盗の方ですか？」

「ああそうだ。」

「私は貴方が今立てこもっている学校の校長のマスターハンドと申します。」

「ほう、校長ねえ……で、何の用だよ？」

「はい、貴方に人質の解放を要求してお電話差し上げました。」

「人質の解放だと？……ちなみに、そっちは今いくら用意してる？」

「ええと……3億円程用意していますが。」

「よし、それを全部よこせ、あと車を一台だ。さっさと準備しねえと……分かってるよな？」

「……分かりました あっ！ちょっと！！！」

突然マスターの声から切り替わり、焦ったような女性の声に変わった。

「ちょっとアンタ！！ウチの子達に何もしてないでしょうね！？」

「ん？誰だお前？」

「アンタが人質にとってる子供の母親よ！皆無事なんでしょうね！？」

「（さっきはむしろ俺が被害者だったけどよ……）
ああ、何もしてねえよ。」

「そう……良かった……ねえ、子供と話がしたいの。一人だけでもいいから話をさせてちょうだい？」

「……フン、まあいいだろ。代わるぜ。」

プリムは受話器を一旦机の上に置く。

「お前らの母親が話してえって言ってる。誰でもいいから一人だけ代表を決めろ。」

するとマルスが『ハイ』と手を挙げた。

「二人共、いいでしょ？」

「…構わん…。」

「別にいいよ。」

「よし、お前で決定だ。いいか？お前の立場は『人質』なんだからよ、もつとこう、怖がってるような怯えた感じに話せよ？あと、話したいことが終わったらすぐに電話を切る！」

小声で言ったプリムの言葉に渋々頷き、マルスは受話器を持つとそれを耳に当てた。

「…もしもし、母さん。」

『マルス！！無事なの！？』

「うん、大丈夫。」

『本当に何もされてない？殴られたとか……。』

「今は大丈夫だって。」

『もう少ししたら、あなた達を助けられるの……。それまで頑張れる？』

「うん、頑張ってみる……。。」

会話を続けるマルスの脳裏に、ふとあることが浮かんだ。

「（そろそろ帰りたいな……。でも絶対プリムの奴自首してくれないみたいだし、このまま黙っててもいつまでも学校から出られないしな。……。そうだ！）」

『マルス、アイクとロイの様子は？あの子達も何もされてない？』

「うん、二人共大丈夫」

あ…っ！？や、何…！？」

『！？』

突然、声色と喋り方が一変したマルスにプリムとアイク、ロイは驚いた。もちろん3人で誰もマルスに触れたものはいない。電話の向こうのサムスと二人の会話を聞いていた各ファミリ―達も目を丸くしている。

『マルス！？どうしたの！？』

「母さ　やだっ！！放してよ……いやぁ！！……抵抗しないから犯さないでください……！！えっ　そんな……ダメエ！！嫌、イヤアアアッ！！」

ガシャン！！

勢いよく受話器を置いて電話を切った後、やりとげた顔をしたマルスは笑顔で一言。

「…これでよし！」

「『よし！』じゃねえよ！！何も良くねえだろぅが！！」

そんな彼に素早く突っ込んだのは当然プリムだった。

「何だよ今の！？まるで俺がお前に何か変なことしたみてえじゃね

えか!!」

「あゝ結構楽しかったよ」

「ねえマルス、急にどしたの？」

「…何のつもりでやったんだ…？」

さすがに驚いたロイとアイクもマルスに質問をする。

「いやあ僕的にはね、学校の中で人質の僕らに大変なことが起こったら、ウチのファミリーズや他の村の人達もいてもたってもいられなくなつて警察の指示なんか聞かないでここに突っ込んで来るんじゃないかと思つてね。」

「へえゝ成程。そう言えばこの村つてそういう人達多いもんね。」

「それに、早く帰りたいし」

「…俺も同感だ…飽きてきたしな…。」

ブチッ

その時、プリムの堪忍袋の緒が切れた。

「……………てめえら、人をおちよくりやがつて……………特に力チューシャのお前!!絶対許さねえ!!」

「え?何?……………もしかして、本気で怒っちゃった？」

タラー…とマルスの額を冷や汗が伝う。

「……本当に犯してやろうかああっ!!」

プリムはどこから隠し持っていたナイフを取り出し、3人……特にマルスに向かって襲ってきた。

さすがの彼らもこれはヤバイと感じ、急いで廊下へと出る。

「剣! 僕ら剣どこに置いたっけ!？」

「……確か教室だな……!!」

3人が武器を取りにいくとしたその時、『させるかあ!』とプリムが教室の入り口に立ちはだかった。

「くっ……道を塞がれたか……!!」

「何でこんな時に限ってコイツ強くなってるのさ……!？」

「どうしよ……プリムごときに追い詰められるなんて……!!」

言いたい放題に言いまくるマルスとロイに対し、ピキ、ピキとプリムの額にいくつもの青筋が浮かぶ。

「お前ら……自分の立場が分かってねえようだなあ……今からたっぷりと教えてやるぜえ!!」

プリムはナイフの刃をこちらに向け、ジリジリと迫ってくる。

アイクは自分の背にマルスとロイを匿い、プリムを睨みつけていた。

「覚悟しなあ……!!」

アイクの首にナイフの先端が当てられた。

その時、

「ファルコン・パンチ!!」

ドオオオンッ!!

「ぐあああつ!?!」

不意の横からの強い衝撃に、プリムは勢いよく横にすっ飛んでいった。

驚いたアイク達の前に、煙のたった拳を突き出したファルコンがいた。

「大丈夫かお前達!?!父さん達が助けに来たぞ!?!」

「…父さん…」

「あんた達!」

ファルコンに続き駆け付けてきたサムスはガバツと3人をまとめて抱き締める。

「良かった、3人共無事で……マルス、変なことされて恐かったでしょう!?!」

「いや、あれは」

「この野郎!!ウチの子に手を出しやがって!!ただで済むと思うなよ!?!」

怒ったファルコンはプリムの胸倉をつかみ、ゴンツ!!と頭突きをお見舞いした。

「んぎゃあああつ!?!」

「あの…父さ」

『おい!』

その時、すま家ファミリーの残りがやってきた。

「皆さん、大丈夫でしたか?」

「え…うん、まあ……」

「このバカ!僕がどれだけ心配したと思ってんだ!」

ピットはポカポカとロイを叩きながら悪態をつく。

「ポヨッ!皆無事だ!」

嬉しさのためピヨンツと跳ねたカービィはマルスの腕の中にスポッ

と収まった。

「アイク様あああつー!!」

物凄い勢いで廊下を走ってきたプリンはタツクルするかの如くアイクに抱きつく。

「ぐはあ……っ!!……痛いぞ……。」

「アイク様……!!プリン、心配で心配で死にそうだったんでしゅよ……!!」

泣きわめくプリンの頭を、アイクはよしよしと優しく撫でた。

「……さてと、じゃあこれからこの強盗・プリムを血祭りにあげようか。」

シークの言葉に一家（アイク達除く）は頷き、プリムを取り囲んだ。

「え……マジかよ……?」

ポキポキと笑顔で拳を鳴らし、ある者は武器を構え、プリムの目には彼らが皆鬼に見えた。

「え……ええと……。」

『覚悟しろやあああつー!!』

「ぎゃあああああ……!!」

その日、プリムの断末魔の悲鳴は村中に響き渡りました。

結論：すま家の人は怒ると皆恐い。

おまけ。

「マルス君、私が職員室に置いてあったお菓子と飲み物知りませんか？」

「ああ、それならプリムが全部食べて飲んでたよ。」
「そうですか……。 (黒い微笑み)」

その後、マスターは拳を鳴らしながらどこかへ行ってしまうした。

終わり。

立てこもりには忍耐が必要（後書き）

3兄弟の暴走（特にマルス）が書いてて楽しかったです。そして、プリムが可哀想な扱いになってしまいました……（汗）プリム嫌いじゃないんですけどね、もっと悪どそうな奴を使えばよかったかな……（――；）

誰だって譲れないものはある

今日も穏やかなすま村。

だが、すま家のリビングではマルスとロイが対立を起こしていた。両者共睨みあい、テーブルではポポとナナ、カービィがクツキーを食べながらその様子を見ている。

「ロイ……本当に譲る気はないの？」

「当たり前、こればかりは譲れないね！」

バチバチと火花が散る中、洗濯物を畳み終えたダークがリビングに入ってきた。

「お？お前らケンカしてんのか？」

「あつ聞いてよダーク！」

彼の存在に気付いたマルスはこちらを向いて喋り始める。

「僕がさ、5時から始まるドラマ『牡丹と椿』が見たいのに、ロイったら『絶対可憐プリンちゃん』が見たいってゆーんだよー！」

「だってプリンちゃんが主人公なんだよ！？毎週見てるのに一話でも見逃すだなんて嫌だね！」

『………………。』

あまりにも下らないケンカの原因に、ダークは呆氣にとられていた。『お前らよお……そんなに見たかったらどっちかビデオに録画すりゃあいいじゃねえか？』

「バカ、忘れたの？この間父さんが見事に転倒して、ビデオデッキ

にお茶こぼして故障しちゃったじゃん。」

「あ、そうか。」

ダークはチラリと時計を見ると、時刻はあと5分で5時になるうと
していた。

「とにかく！ロイは今日くらい僕に譲るべきだね！だいたいプリン
ちゃんなら学校行けば会えるじゃん！？」

「お生憎様！プリンちゃんはアイドルの仕事で明日から1週間、学
校はおるか村にもいないんだよ！だからテレビで見納めとくの！」

「そんなのプリンちゃんの写真でも見てハアハア言ってるやいいだ
ろ！」

「僕はそんな変態じゃない！！！」

ギヤーギヤーと二人が言い合っていたその時、『あつ』とダークが
声を上げた。

「どうしたの？」

「いっけね！俺も5時から『IQサプリメント』見てえんだった！」

ギロツ！！

その途端、マルスとロイが物凄い目でダークを睨みつけた。

「うおっ！……な、何だよ……？」

「くっ……また新たな敵が増えた……！」

「かくなる上は……とおっ！！！」

隙をついたロイはテーブルに置いてあったリモコンを素早くつかん
だ。

「ああっ！」

「ハッハッハ！これで僕の勝ち

」

「させるかぁ！！とおっ！」

ゴスツとマルスのチョップがロイの頭にヒットする。

「いったゝい！」

思わず頭をおさえるロイの手から、マルスはリモコンを奪い取った。

「あっ、しまった……！」

「へっへっ！最後に笑うのは、この僕

」

「やらせねえ！おらっ！」

マルスの背後に回ったダークは、彼の両脇をガシッとつかむ。

「ひゃっ…何すんのさ！？」

「こうするんだよ オラオラオラッ！」

コチヨコチヨコチヨ

「いやゝ！！アハハハ！！やめてよ！アハハハッ！！くすぐった

アハッ！アハハハハハ！！！」

脇をくすぐられ力の抜けたその拍子に、ダークはマルスの手からリモコンを奪い取った。

「ああっ！ちよっと！！！」

「あゝリモコンがゝ！」

「へへん！悔しかったら取ってみろゝ！」

ダークが悔しがるマルスとロイを挑発していたその時、

ヒヨイ

突然、ダークの手からリモコンが消えたかと思うと、パッとテレビがついた。

『ん？』

突然のことに3人は首を傾げる。

テレビで始まったのは、『ママンといっしょ』という子供向け番組。

『……………まさか……………』

3人は恐る恐る下を見ると、先程までクッキーを食べていたちみっこ3人がテレビを見ていた。しかも、カービィの手にはリモコンが……………。

「…え、何？…もしかして、君達も見たいテレビあったの…………？」

「うん！見たかったの〜！」

「……………僕達に、譲る気は……………？」

「ナナ達、これ見たいの〜。」

「……………リモコンよこせピンク玉あああっ…！」

ダークがカービィに飛びかかったその時、

「ポヨ……………？（ぱくっ）」

カービィはリモコンを口の中へしまった。

『あ……………っ…！…！』

3人は思わず声を揃えて上げた。

「ど……どうしょ……！！」

ふとロイが時計を見た。

すると、時刻は5時を2分も過ぎている。

「このままじゃまずいよ……！！」

「ああ……もうOPかな……！？」

「畜生……どうしても見てえ……！！」

『（……かくなる上は……！！）』

意思を固めた3人は急いで玄関へと走っていった。

「マルス兄ちゃん達、どこに行くのかな？」

「お隣さん家のテレビで見せてもらうんじゃないかな？」

「ペポ……そっか」

勝者の栄光を手に入れたちみっこの3人は、心行くまでテレビを堪能した。

終わり。

誰だって譲れないものはある（後書き）

番組名を考えるのが楽しかった作品です。マルスとロイ、ダークは結構似た者同士なのです。なのでよく衝突します。

素直になれるその勇気が大切

午後のすま家。

「アイクの馬鹿あああああっ!!」

泣きながらそう叫んだロイがリビングを出ていき、そのまま玄関に向かうと勢いよく戸を開け、家を出ていった。

何事かと驚いたマルスとリンクが階段を降り、走り去るロイの背中を見た後、リビングを覗く。

そこではテーブルの近くに座り、頭から湯気を噴いて珍しく怒っているアイクがいた。

「アイクが怒ってる…珍しい……。」

「アイク、どうしたの？ロイとケンカでもした？」

リンクが尋ねると、アイクは不機嫌な顔のまま呟いた。

「…あいつが悪い……。」

それだけ言うと、アイクはプイとそっぽを向いてしまう。

「……………」

どうしたものかとマルスとリンクは顔を見合わせた。

「ふえ……ひつく……アイクのバカ……!!」

ぐずぐずと子供の様に泣きじゃくりながら、ロイは道を一人トボトボと歩いていた。

「（確かに僕が悪かったよ……でも、あんなに怒ることないじゃない

いか……！！でも……アイク、恐かったな……。」「

普段滅多に怒らないアイクが怒鳴った時の顔を思い出し、ロイの目にはジワリと再び涙が浮かぶ。

それを袖で拭っていたその時、『ロイ君？』と前から声をかけられた。

ロイが顔を上げると、そこには両手にスーパの袋を持ったオリマーと数匹のピクミン達がこちらを見ていた。

「どうしたんですか泣いたりして？誰かにいじめられたんですか？」

「……うオリマーさ……んっ！！」

ブワツと涙を溢れさせ、ロイはしゃがんでオリマーを抱き締めた。不意のことにオリマーは驚き、ピクミン達も『ミーミー！』と慌てふためいている。

「あわわ……どうしたんですロイ君？お腹痛いんですか？」

「ひっく……うえ……オリマーさん……！」

泣きじゃくるロイ困り果てつつも、オリマーは彼の頭を優しく撫でていた。

ロイが大分落ち着いたのを確認すると、オリマーは自宅に彼を招いた。

パン屋・『ピクミンの森』は今日は休みで、二人が家に入ると、オリマーと同居しているMr・G&Wがリビングのテーブルをふきんで掃除していた。

「ウオッチさん、ただいま帰りました。」

「邪魔します……。」

「アッ、才帰りオリマー。ロイ君、イラッシャイ。今才茶ヲ煎レテキマス。」

G&Wはそう言うと、台所の方へ歩いていく。

「じゃあロイ君、その辺りに座ってください。」

「はい、失礼します……。」

ロイがテーブルの付近に座ると、オリマーの所にいた赤ピクミンがトコトコとこちらに近付いてきた。

「ミ〜。」

「ん？どうしたの？」

すると赤ピクミンは彼の背中によじ登り、肩に座り込む。

「え〜と……。」

「あらら、どうやらロイ君のことを、髪の色のせいで仲間だと思い込んでいるみたいですね〜。」

オリマーがそう言うと、『ミー』と赤ピクミンは返事をするように鳴いた。

「そうかそうか、僕は君の仲間か。」

ロイが指で優しく頭を撫でると、赤ピクミンは『ミ〜……』と気持よさそうな声で鳴く。

「へへ、可愛い……。」

その時、『才茶デスヨ〜』とG&Wが盆に湯飲みと茶菓子を持って戻ってきた。

「ハイ、ロイ君。」

「あ、ありがとうございます」

「わあ……!」

湯飲みと一緒に出された茶菓子を見た途端、ロイは目を輝かせた。

白い皿の上に乗って香ばしい甘い香りを漂わせるそれは、彼の大好きなシュークリームであった。

「このシュークリームは、ウォッチさんが焼いたんですよ。」

「オ菓子作りハ、ナカナカ難シイケド、楽シイデス。自信ハ無イデスケド、ドウゾ召シ上ガレ。」

「はい！いただきます！」

ロイは早速シュークリームに被りつく。

口の中にシューの香ばしさとカスタードクリームの甘さが広がっていく。

「……美味しい！」

「本当デスカ？ 嬉シイデス。」

真っ黒なため表情は分からないが、おそらく彼は微笑んでいるのだろう。

「ミー。」

「ん？ お前も食べたいか？」

「ミ〜！」

「よしよし、ちょっと待てよ……ハイ。」

ロイはシュークリームを少し千切り、赤ピクミンに渡す。

赤ピクミンは『ミ〜』とお礼と言わんばかりに鳴き、モシヤモシヤとシュークリームを食べ始めた。

ロイも残りのシュークリームを口に入れ、茶を一口飲むと『ふうっ……』と満足気に息を吐く。

「ウォッチさん、ごちそうさまでした。」

「イエイエ、才粗末様デシタ……トコロデ、ロイ君今日ハドウシタ
ンデスカ？」

「え……………」

「そうだ、さっきはどうして泣いてたんですか？」

「……………」

するとロイは顔を曇らせ、俯いてしまった。

『ミ…………』と赤ピクミンは心配そうに鳴く。

「……………実は、さっきアイクとケンカしちゃったんです……………原因は
僕の方にあつて、本当に小さいことなんですけど……………でも、お互い
つまらない意地張り合っちゃって……………しまいには家飛び出しちゃっ
て……………このまま仲直りできなかつたら、どうしよう……………」

段々と声が震えていき、ロイは今にも泣き出しそうだった。

『ミ…………ミ…………』

「……………仲直り出来ないなんてこと、ありませんよ。ケンカなんて、
いつの間にか終わっちゃうんです。」

オリマーの穏やかな物言いに、ロイは目につつすらて涙を滲ませた
まま顔を上げる。

「そうなんですか……………」

「そうです。僕だってウォッチさんとケンカした時、今の君みたい

になっちゃうんですよ?」

「オリマーさんも、ケンカなんてするんですか…?」

「ええ、たまに互いの意見がぶつかって、大ゲンカになったこともあるんです。」

「デモ、最後二八仲直リシマス。段々ト時間ガ経ツニツレ、怒ッテイタコトガ馬鹿馬鹿シクナルンデス。」

「そうなのかな……?」

「……ロイ君は今、アイク君のこと怒ってますか?」

オリマーの質問にロイは首を横に振る。

「そうですか。だったらアイク君も、もう怒ってないかもしれませんよ?」

「……でも……アイクと顔会わせにくい……。」

「それがいけないんです、ロイ君。」

「え?」

「ケンカというのは、時間が経つにつれ顔を会わせにくくなるものなんです。そんな状態がいつまでも続くのは嫌でしょう?その相手だって、自分と同じ気持ちなんです。」

「……………」

「嫌な思いをしたくない、仲直りがしたい。そう思ったら、相手が謝ってくるのを待っていても仕方ありません。本当に大事なのですね……………」

素直に、自分から謝ることなんですよ。」

「オリマーさん……。」

ふと、G & a m p ; Wがおもむろに立ち上がり、窓の外を眺める。

「……………噂ヲスレバ何トヤラ、デスネ。」

「え？」

するとG & a m p ; Wはこちらに手招きをし、ロイは立ち上がってその場所に移動する。

「あ……………！」

そこから見えたのは、何かを探すようにキョロキョロと辺りを見回すアイクの姿であった。

「……………ね？彼、もう怒ってなんかいなかったでしょう？」

「……………アイク……！」

ロイは『お邪魔しました！』と二人に言うのと咄嗟に玄関へと走り、靴を履いて外に出る。そしてアイクのいるその場所へ駆け出した。

「アイク……！！」

彼の名前を大声で叫ぶと、アイクはこちらを向きロイの存在に気付く。

「……ロイ……？」

「アイク……………」

ロイは足を止め、しばらくモゴモゴとしていたが、意を決したように口を開いた。

「アイク……！」

「ごめんなさい……！」

「……………」

突然頭を下げられアイクはしばらく呆然としていたが、スッと手を伸ばし、彼の頭をワシヤワシヤと撫でた。

「……………アイク？」

「……………あれだけのことで怒るなんて、俺もどうかしてた……………怒鳴って、すまない……………」

「……………アイクウツ……………！！！」

泣きそうだった表情がパアツと明るくなり、嬉しさのあまりロイはアイクに抱きついた。彼の肩にいる赤ピクミンも『ミ〜ミ〜！』と嬉しそうに鳴いている。

「良かったですね、ロイ君。」

「仲直り、良カッタデス。」

ふと前を見ると、G & a m p ; Wと茶色い紙袋を持ったオリマーがこちらに歩いてきた。

「はい！オリマーさんにウォッチさん、本当にありがとうございましたー！」

「イエイエ、ソナ。」

「はい、これお土産です。皆で食べてくださいね。」

そう言つてオリマーが差し出した紙袋を受け取り中身を見ると、先程自分が食べたものと同じシュークリームが沢山入っていた。

「わあ……！ありがとうございます！」

「……すみません、いろいろと……。」

「そんなことはないですよ。今度は皆で遊びにきてください……ピクミン、帰りますよ。」

「ミ……！」

赤ピクミンは首を横に振り、ロイの肩にしがみつく。

「ありやりや………すっかりロイ君に懐いてますね……。」

「ピクミン、また遊びに行くから、それまでは我慢してくれないかな？」

「ミ………。」

赤ピクミンは名残惜しそうにスルスルとロイから降り、オリマーの頭に飛び乗った。

「じゃあ二人共、さようなら。」

「サヨウナラー。」

手を振りながら家に戻っていくオリマーとG & amp; Wを、ロイとアイクも手を振り返した。

「……俺達も、帰るか……。」

「……うん！」

満点の笑顔で頷いた弟と手を繋ぎ、アイクは二人で夕焼けの道を歩き始めた。

おまけ。

ロイ・アイク・マルスの、家に帰ってからの会話。

「ねえ、結局ケンカの原因って何？」

「……こいつが、俺のショートケーキの苺を食ったんだ……。」

「はあ！？苺！？」

「だって残してたからさ、てっきりいらないのかと思って……。」

「…俺はショートケーキの苺は最後に食べる派なんだ……！」

「だから本当にゴメンって……ほら、ウオツチさんが焼いたシュークリーム食べなよ、すっごく美味しいよ！」

「…そうか……。」

「……………」

（呆れて何も言えない）

終わり。

素直になれるその勇気が大切（後書き）

仲の良いすま家兄弟も、たまにはケンカするのです。オリマーは書いてて楽しかったです。G & a m p ; Wは、いちいちカタカナに交換するのが面倒でした……でも私の中では、彼はこんな喋り方なのです（^ - ^）；

鼻から水が入ると物凄く痛いよね

真夏のすま村。

外ではセミ達が大会唱し、太陽はいつもよりジリジリと日差しを増している。

そんな中、メタナイト家はクーラーメタナイト・ルカリオ・ミュウツーの効いたリビングで寝転がりながらくつろいでいた。

「クーラーというものは本当にありがたいな……………」

「全くだ、文明の利器は本当に素晴らしい……………」

「……………フン。」

ピンポン

「ん？誰だ？」

「私が行ってこよう。」

メタナイトはソファから降り、玄関に歩いていく。
ガチャリとドアを開けると、そこにはソニックと浮輪を持ったカービーがいた。

「Hello！」

「こんにちはー！」

「やあ二人共、今日はどうしたんだ？」

「ペポー！メタナイト、プール行こー！」

「プール？学校のか？」

「Yes、カービイが俺の泳ぎの特訓に付き合ってくれてくれるって言うんでな。本当はアイクに教えてもらうつもりだったんだが、生憎彼はプリンちゃんとdateだよ。（正確にはプリンに無理矢理連れていかれた）」

「プールか……（悪くないな……しかし、クーラーの効いたこの家からあまり出たくない……。）」

メタナイトがどうするべきか悩んでいると、『ポヨッ！』とカービイが彼の手をつかんだ。

「カービイ？」

「ペポッ！メタナイトもプールで泳ぐのッ！バシャバシャするのッ！」

「……仕方ない。二人共、準備をするから少し待っててくれ。」

「ポヨッ！」

「OK、分かったぜ。」

メタナイトは一旦リビングに戻り、床に寝転がっているルカリオを見下ろしながら言う。

「ルカリオ、私はカービイ達とプールに行ってくる。後で差し入れに冷たいスイカでも持ってきてくれ。」

「あ……分かった……。」

それだけ言うとルカリオは自室に向かい、しばらくすると鞆と麦わら帽子を持って玄関に向かい、ボタンとドアの閉める音がした。

「……………」

静かになった家の中には、クーラーの音だけが聞こえる。

ルカリオが寝転がったままミュウツーの方を見ると、彼はソファアの上で横になり、寝息を立てていた。

ルカリオは視線を戻し、天井を見つめながら何もせず、ただボツツとしていた。

「（……あと1時間後くらいしたら行こう……。）」

すま村学校、プール。

見るからに冷たそうな水の中で太陽の光が反射し、キラキラと光っている。

「やはり外は日差しが強いな……。」

麦わら帽子を被ったメタナイトは持っていた団扇であおぐ。

「よっしゃあ！早速特訓だぜ！」

「ペッポ〜イ！」

「あっ！こらお前達」

メタナイトが引き止めるも遅く、バシャアンツ！と、二人はプールに勢いよく飛び込んだ。

が、

「ブハッ！！やべっ足釣った！！Help！！Help me！！」

「わ〜〜っ！！ソニック〜！！」

ソニックが溺れているのに気付いたメタナイトが慌ててプールに飛び込む傍らで、カービィはプカプカと浮輪で浮かんでいた。

「いいか？プールで泳ぐ前はしっかり体操しないと足を釣ったりするんだ。だから体操は大事なんだぞ。」

メタナイトは二人に叱責しながら三人で体操を行っていた。

「Ah…準備体操ってこんなに大事だったんだな、知らなかったぜ……。」

「ポヨポヨ〜 手と足ぐるぐる〜」

最後に深呼吸をし、三人は体操を終えた。

「よし！今度こそ溺れねえぜ！」

「ペポペポ〜！」

「あつ！また〜」

二人は再度バシャアンツ！！とプールに飛び込んだ。

が、やはり

「ガボツ！！足つかねっ！！沈む〜！！Help me please！！」

「わ〜〜またか〜〜！！！」

メタナイトが慌ててプールに飛び込む傍らで、カービィはビート板に乗ってプカプカ浮かんでいた。

「よし、まずは基礎から始めよう。」

ビート板を持って浮かぶソニックに、メタナイトはプールサイドから指導をしていた。

「まずはバタ足だ。ビート板を使ってバタ足をしながら顔を水につけ、息継ぎの練習もするんだぞ。よし、ではやってみよう。」

「Yes！コーチ！」

ソニックは早速ビート板を使い、バシャバシャと水に顔をつけてバタ足を始める。

メタナイトがその様子を見てみると、パシャパシャと浮輪に代えたカービイがこちらに近付いてきた。

「どうした？カービイ。」

「ポヨ……メタナイトは泳がないの？」

「私か？私はこうしてお前達の監視をやっているからいい。」

「ぶうふう～ダメ！メタナイトも泳ぐの～！」

カービイはガシツとメタナイトの手をつかむと、グイグイと引っ張った。

「わっ！！こらカービイ……………！！！」

「ダメエエエツ！お～よ～ぐ～のおお～！！！」

えいつ！

「わあっ！！！」

ドッポーン！！

「……プハッ！！不覚、足を釣ってしまった！！助けてくれえええ

くくっ!!」

「ハッ!!……コーチ、今助けるぜ!!」

メタナイトが溺れていることに気付いたソニックは急いで彼の元へと向かう。

「コーチくくく!!………フガッ!鼻から水が入った!!痛えっ痛　ガボゴボゴボッ!!」

「ソニックくく!!ガボッ………カービィ、助け　」

「ポヨ!!　ふう?」

ふと、カービィの動きが止まった。

「カービィ!?」

「………スイカの匂いがするぽくく!!」

カービィはプールから上がり、その匂いのする方へ走っていった。

「カービィく!!ガバゴボ………!!」

「Help!!………ガボッ!!」

「スイカくくく!!」

カービィが向かったのは、プールの入り口にバスケットを持って立っているルカリオとミュウツーの元だった。二人共麦わら帽子を被っている。

「やあカービィ、差し入れのスイカ持ってきたぞ。」

「………こんな暑い中、外には出たくないと言うのに………」

「でもスイカは食べたいだろ?」

「………フン。」

「スイカくスイカく」

「アハハ、ちょっと待てな………」ところでカービィ、メタナイトと

ソニックはどこへ行った？」

「ペポ〜二人なら、あそこ〜！」

そう言ってカービィが指差したその先には

力つきたメタナイトとソニックが、プカ〜……と浮かんでいた。

「ギャアアアアアッ！！水死体iiiiiiiっ！！！」

その後、二人は慌てて救出され、ソニックにいたってはますます水を怖がるようになりました。

終わり。

鼻から水が入ると物凄く痛いよね（後書き）

ソニックは前回も書いた通り、性格がつかめなくて難しいキャラです。もっとニヒルになればいいのかな……（……）

得体の知れないものは食べちゃダメ（前書き）

今回の話には、キャラが女の子になるという設定があります。

内容は健全のギャグですが、どうしても受け付けない・

苦手という方はどうぞお戻りください。

得体の知れないものは食べちゃダメ

朝のすま家。

一同は食卓に集まり、朝食をとっている。

「…おはよう……。」

と、そこに眠たげに目を擦りながらアイクが入ってきた。

「おはようアイク！」

「おっは〜。」

「アイク兄ちゃんおはよ〜。」

「あら、おはよう……あとこれで来てないのはマルスだけね。」

「…マルスの奴、まだ起きてないのか？」

「そう。あなたより遅いなんて、珍しいわよね……。」

サムスが心配そうに言ったその時、「おはよ〜……」と声が聞こえた。

「……………ん？」

その聞き慣れない声に一同は首を傾げる。

やがて入り口から、眠たげに目を擦ったマルスが現れた。

だが、いつもとどこか違う。

体も背も縮み服はブカブカで、何よりも男では有り得ないはずの、胸が膨らんでいた。極めつけは『どうしたの？』と言ったその声は

いつもより甲高いものになっていた。

「マルス……あなた、縮んだ……？」

「ん……何か起きたらこうなってた。」

「……いつもより声、高くないですか……？」

「風邪引いたかな……？」

「てかマルス、お前何胸に入れてんだよ？結構リアルじゃね？」

ダークは席から立ち上がるとマルスに近付き、からかうように言う。

「え……僕何も入れてないけど……。」

「んなワケねーだろ。どれ、ちよつと触らして。」

「あつ」

マルスの返答も聞かず、ダークは彼の胸をガシツとつかんだ。

むに。

「……………え？」

その柔らかさに本物だと気付いたダークの額に、ツ……と冷や汗が流れる。

「……マジ……だった……？」

「…………何さらすんじゃこの野郎!!」

バシンッ!!とパンチに近いビンタがダークの頬にヒットし、
ぐほうっ!!』と声を上げて彼は吹っ飛んだ。

朝食後、家族全員がリビングに集まった。

マルスは呑気に茶をすすり、隣のロイは女になったマルスをまじまじと見つめ、また隣のアイクは相変わらずの仏頂面である。

「ハッハッハッ。参ったなあ、娘が増えてしまったよ。」

「あなた、呑気なこと言ってる場合じゃないの。」

サムスがファルコンの頭をこつく一方、リンクは隣のダークが殴られた左頬をおさえ、自分の手の平を無言で見つめていることに気付いた。

「ダーク、どうした？」

「いや……俺さ、生まれて初めて女の胸触っちゃったんだな〜と思つてよ……柔らかかった〜……。」

「…あ、そう……。」

「女の胸つて、皆あんな感触なのか?……ゼルダ〜お前のもちよつと触らして〜」

目を光らせ怪しい手つきでゼルダに迫っていくダークの前に、リンクは彼女をかばうようにして出た。

「で、マルス、あなた一体どうしたのよ？」

「ん〜…僕もよく分かんない。朝起きたらこうなってたもん。」

「…昨日、何か変なものでも食ったか……？」

「え〜…昨日ご飯以外に食べたものといえば、冷蔵庫に入ってたシュークリームくらい……。」

「僕のとっておきのシュークリーム食ったのお前かああっ!!」
頭から煙を噴き上げて怒るロイを無視し、マルスは話を続ける。

「あとは……そうだ。乱闘の帰り道で、何かピンク色のサクランボみたいな実がなってる木を見つけて、お腹も減ってたしその実を食べたよ。」

「……もしかして、そのせいじゃない？」

「あはは〜得体の知れない物なんて、食べるもんじゃないね〜。」

「後でマリ…Dr. マリオのところに行つて診てもらいなさい。」

「お母様、それなら私が先程電話でこちらに来るようお願いしました。」

「あら、ありがとうゼルダ。それとマルス、治るまで大人しくしてなさいよ。この家には思春期の男子が5人もいるんだから。」

「そうだよね〜狼が5人もだなんて、襲われちゃったらどうしょ？」

「アハハ〜大丈夫、女の子になったからって元から女みたいな顔してたし、それに中身は性格悪いマルスのまま」

バキッ!!

「ぐほえっ!!」

ロイの頬にマルスのパンチに近いビンタがヒットし、バタンツと彼はその場に倒れた。

「一言多いんだっつの!!」

その時、ピンポンと玄関のインターホンが鳴った。

「あ、来たみたいね。」

サムスが玄関に向かい戸を開けると、そこにはナース帽を被ったピーチが医療器具の入った鞆と大きな紙袋を持っていた。

「ハアイ、サムス。お電話頂いて来たわよ。」

「ありがとうピーチ……あら？Dr・マリオは？」

「マリオには今日お休みしてもらったわ。患者さんが女の子の時は私が担当なのよ。」

「マルスが女になったこと、ゼルダが言ってたの？」

「そうよ、じゃあお邪魔します。」

玄関で靴を脱ぎ、サムスに案内されピーチはリビングに顔を出す。

「ゼルダ、来たわよ。」

「ピーチ、ありがとうございます。」

『こんにちは』と挨拶をするちみつこ達に手を振っていると、ピーチの目にマルスの姿が映った。

「あらあら、本当に女の子になったのねえ。」

「なっちゃったんです。」

「あらら、声まで……じゃあ早速診断するから、隣の部屋貸してくださる？」

「どうぞ、自由に使って。」

「それと手伝ってくれる人も必要ね……サムスとゼルダ、あとシークもお願いできるかしら？」

「分かったわ。」

「頑張ります。」

「（何で僕も……？）分かったよ。」

「よし！それと皆さん、今から隣は男子禁制ですからね！」

「え、何だよそれ！」

ブライングするダークの頭をリンクが『何を期待してるんだよ』とこつく。

「ナナは『だんし』じゃないよ。」

「じゃあナナちゃんもいらつしゃい。」

「ん？ちよつと待ってピーチ、僕は男だけど」

シークが意見しようとしたその時、ガシッとピーチに両肩をつかまれ物凄い剣幕で迫ってきた。

「な…何……？」

「ウフフ…あなたはいいのよシーク……それに、これからすることはあなた無しじゃあ困るのよねえ……。」

「…わ…分かったよ……。」

「ウフフ、さあ行きましょう」

ほぼ強引にシークの腕を引き、ピーチはマルス、サムス、ナナ、ゼルダと共に隣の部屋に入ると、ピシヤリと戸を閉める。

残された男達とちみつこ達は、中で何が行われるのだろうといぶかしげな目で閉められた戸を見ていた。

「……やっぱり原因は昨日あなたが食べた木の実ね。明日には治るから安心しなさい。」

診療を終えたピーチはカルテを書き込んだ後、それらを鞆にしまう。

「良かったゝ治るんだゝ……ところでピーチ、さつきからきになってただけど……その紙袋、何？」

マルスが質問したその時、『よくぞ聞いてくれたわ！』とピーチは顔を輝かせ、紙袋から何かを取り出すとそれを広げてみせる。

見るとそれは水色のワンピースと黒のキャミソールだった。ワン

ピースは首元が開いているため、首の後ろで結ぶタイプのそのキヤミソールと合わせて着るものと言うことが分かる。

「わあ〜！可愛いお洋服〜！」

「さあシーク！仕事よ！」

ピーチはそれらと部屋にあつた裁縫箱をシークに渡した。

「……へ？」

「この服をマルスのサイズに合わせてちょうだい！」

「…そのただけに僕をここに連れてきたの……？」

「そうよ、手先が器用なあなたならこんなの3分で出来るでしょ？」

「……………」

言い返す言葉が見つからず、シークはとりあえず裁縫箱からメジャーを取り出した。

「あの〜…ピーチ……？」

シークがマルスのウエストをメジャーで測っているとき、ゼルダとサムスがピーチの方を見ると、彼女はとても楽しそうな表情をしていた。

「だつてせっかく女の子になつたんだし、私のお古だけど来てみてほしいのよ〜！絶対似合うはずよ！」

『……………』

二人も言い返す言葉が見つからず、ただ茫然としていた。

やがて服はシークによってみるみるうちに手直しされていき、『出来た』の言葉と共に服はマルスのサイズとぴったりのものに仕上がっていた。

「2分45秒……さすがシークね、早いじゃない。」

「何計つてんの。さ、着てみてマルス。」

「う…うん……。」

言われるままに、マルスはそれらを着始めた。

「あゝ中で何やってんだあいつら〜！」

一方、リビングでは隣の部屋の戸の前でダークがウロウロと落ち着きなく歩き回っている。

「もう、うっとおしいな！少しはジツとしろよ！」

「ハッハッハッ！ダーク、男は何事にも我慢してないと駄目だぞ！」

「うう〜！……でも、ちょっとくらい覗いてもバレないよな……。」

ススス……とダークが戸に顔を近付けていったその時、突然ガラツと戸が開いた。

「うおおおおっ！！……って、マルス……その格好……。」

「へっへ〜、似合う？」

水色のワンピースに身を包んだマルスであるはずの少女に、一同は『ほあ〜……』と感嘆の声を漏らした。

「マルス兄ちゃんが姉ちゃんになった〜！」

「ハッハッハッ！本当に娘が増えたみたいだな！」

「あつれ〜？ロイ何赤くなってるんだよ〜？」

「な……っ！！赤くなんてなってるないよ……！」

「ふ〜ん……どうよ？こんな『お姉様』」

「なっ！？ななななな！？」

真っ赤になって慌てふためくロイを見て、マルスはクスクスと楽しそうに笑う。

「さあマルス！実は私の家にまだ服がたくさんあるの！まだまだ着てほしいから家に来てちょうだい！」

「えっ！？まだ着るの！？」

マルスが嫌そうな顔をするにも関わらず、ピーチは彼の腕と自室に戻ろうとするシークの腕をグワシとつかむ。

「何で僕まで……？」

「あなたの存在は服のサイズ変えに必須だからよ！さあ二人共、行くわよ！」

そう言うところ、ピーチは物凄い勢いで玄関に向かっていき、残された一同は呆然としていた。

「ピーチさんて……スゴい人だね……。」

「ピーチは一度暴走したら、誰にも止められないんです……。」

夜、10時頃。

マルスはアイクの部屋に遊びに来ていた。パジャマ姿でベッドに寝転がり、隣で腰かけているアイクに他愛もない話をしている。

「それでさーピーチさん家から帰る途中ガノンドロフに会って、女装した僕を見て『結婚してくれ！』だってさー！顔も髪も変わらないのにどうして分からないかなー！？」

「…相変わらず馬鹿な奴だ……。」

「だよねーハハハ……あゝあ。」

ふと、楽しそうに話していたマルスが溜め息をついた。

「…どうした？」

「明日になったらこの体、もう終わりなんだよねー。もっと楽しめばよかったな……。」

「…充分楽しんだら……。」

「うっ……ねえ、アイクは僕がこんな感じになった時、どう思った？」

「……どうも思わなかった……。」

「えゝ何でゝ！？弟が妹になったんだよ！？『お兄様』とか呼んで欲しくなかった！？」

「…俺、元の世界に妹いるし……。」

「ちえゝ！偽者じゃあ可愛くないってか！」

ふてくされたマルスは近くにあった枕を引っ張り、ボフンツとそれに顔を埋める。

「…弟だろうが妹だろうが、偽者だろうが関係ない……お前は俺の、兄弟だ……。」

「…………ふゝんだ。」

それだけ言ったマルスは枕から顔を上げなかったが、その表情は満点の笑みを浮かべていた。

「…さあ、そろそろ部屋に戻れ……。」

「zzzz…………（爆睡）」

「……おい……！また俺が床で寝る羽目になるだろうが……！！起きろ……！！」

結局マルスは目覚めず、アイクはまた床で寝ることになりましたとさ。

おまけ。

ピットとシークの次の日の会話。

「シークさん、マルスの奴元に戻ったみたいですよ！」

「そう、良かった………ところでピット、その手に持っているピンク色の木の実は何？」

「はい、これはマルスが食べて女になったあの木の実です。」

「………何で僕に差し出してるの？」

「一つどうぞ。」

「嫌だよ、僕が女になっちゃいけないか。」

「………それでいいんですよ………シークさん、僕の『お姉様』になってください………！！！」

ジリ、ジリ……

「……ピット？何で迫ってくるの？………それに君、目が危ないよ………」

「シークさあん………覚悟してください………！！！」

その後、シークは何とかピットの怪しい企みから逃れられました。

終わり。

得体の知れないものは食べちゃダメ（後書き）

マルスが女の子になる話……そのようなクエストをいただき書いた作品です。女の子になっても中身は変わりませんが、やはりいつもと違うので物凄く大変だったです。

それでも読んでいただいた方が楽しんでくださったなら、私は嬉しいです（^-

^）

兄弟思いは度が過ぎるとブラコンになる

午後のすま村。

学校で残って勉強をしていたリンクとゼルダ、ダークは帰り道を歩いていた。

「ゼルダ、宿題手伝ってくれてありがとう。本当助かったよ。」

「いえ、あんな指導でも喜んでいただけ嬉しいです。」

「いやいやさすがゼルダ、俺の女だぜ！」

「……ダーク、それは聞き捨てならないな……。」

「ああ？俺は真実を言っただけだぜ。」

バチバチと二人の間に火花が散り、この場で今にも血戦が起こりそうである。

「お二人共、ケンカはいけません……！！」

ゼルダが止めに入ろうとしたその時、

「うええーん……ふええー……………」

「……あら……？」

「ん？どうしたゼルダ？」

「……誰か、小さい子の泣き声が聞こえます……。」

「泣き声？」

3人は顔を上げ、正面を見る。すると、自分達がいる道の先で、小

さな子供のポケモンが泣いていた。

「どうしたの？」

3人が駆け寄ると、そのポケモンは泣きはらした顔を上げ、こちらを向いた。

背は自分達の膝丈ほどで、背中にリュックサックを背負った青い小さなポケモンだった。しかもよく見ると、どこことなくルカリオに似ている。

「（何かこの子、ルカリオさんに似てる……。）」

ねえ君、どうして泣いてるの？」

リンクが問いかけると、そのポケモンは嗚咽混じりの声で答えた。

「ひつく……道に迷っちゃって……ふえ……お腹も空いたよお……」

「！！」

「まあ、可哀想に……そうだ、今からウチに来ませんか？」

ゼルダの優しい言葉にポケモンはピタリと泣くのをやめた。

「お姉ちゃん達の、お家……？」

「ええ。リンク、家に帰ればちょうどおやつの時間になりますし、一人分増えてはいけないでしょうか？」

「いや、別に構わないよ。君、ケーキ好き？」

リンクが質問するとポケモンは『好きい！』と目を輝かせて答える。

「よし、決まりだな！」

ダークはヒョイとポケモンを抱き上げ、肩車をした。

「そういえば君、村の子じゃないよね？今日はどうしたの？」

「んとね、兄ちゃんに会いにきたの。僕の兄ちゃんこの村にいるんだ。」

「兄ちゃんつてもしかして……ルカリオさん？」

「そう！お兄ちゃん達、ルカリオ兄ちゃんとお友達なの？」

「そつだよ。で、君は何て言う名前なの？」

「あのね、僕は」

「リオル~~~~~!!どこだ~~~~~!？」

一方、リンク達がいる所から大分離れた場所。

ルカリオは必死の形相で弟の名を叫んでいた。

ルカリオと共に彼の弟を探しにきたメタナイトとミュウツーは、目が血走っているルカリオの様子に少し怯む。

「あんなに必死なルカリオ、初めて見るな……。」

「たかだか弟一人にああなるとは……あいつはブラコンなのかもしれないな。」

「まさか、ルカリオはそんな」

「くおらお前らあ!!何ボサツとしてる!!！」

普段滅多に怒らないルカリオに怒鳴られ、二人はビクリ!と跳ね上がった。

「ああ、こんなことなら事前に集合場所とか決めとくべきだった……」

……リオルは可愛くて純真無垢かつ正直でとても素直な子だから、疑うつてことを知らない……リオルにもしものことがあったら私は……!!リオルウウツ!!！」

元々青い顔がさらに青ざめ、ルカリオは二人のことなど構わず走っていった。

「……………。」

残された二人はルカリオの極度のブラコンっぷりに、ただ呆然としていた。

「ごちそうさまでした！」

チヨコレートケーキを食べ終え、リオルは手を合わせる。

「はい、お粗末様でした。」

それを見たリンクはニツコリと微笑んだ。

「へールカリオさんの弟か。」

「可愛いー！ね、抱っこしてもいい？いいよね？」

『う？』と首を傾げるリオルの答えも聞かずに、マルスは彼を抱き上げると、ギュツと抱き締めた。

「はうー！ぬいぐるみみたい！」

「マルス、次僕！次僕だからね！」

リオルに頬擦りするマルスの後ろには、次の順番ということでロイが並んでいる。そして彼の後ろには、ちゃっかりとゼルダも並んでいた。

「ゼルダ……何してるの？」

「わ、私も、抱っこしたいですから……。」「

苦笑いをするリンクに、ゼルダは少し頬を染めながら言う。

「（ゼルダ……可愛いなあ……。）」

その時『ただいま』と玄関からサムスの声が聞こえた。

「あ、母さんが帰ってきた。」

「マルス、そろそろ代わってよー！」

「えーしょうがないな……。」「

マルスが渋々ロイにリオルを渡していると、サムスが入り口から顔を出した。

「おかえり母さん。」

「ただいま……あら可愛い、お客さんかしら？」

「こんにちは！お邪魔してます、リオルです！」

「ルカリオさんの弟なんだって。」

「へえ、ルカリオさんの……あ！そういえば。」

ふと、サムスは何かを思い出したように声を上げた。

「どうしたの母さん？」

「さっき買い物してた時にね、ルカリオさんが凄い顔して何かを叫びながら村中走り回ってたの見たわよ。」

「まあ……もしかして、リオルちゃんを探しているのでしょうか？ゼルダがロイからリオルを受け取りながら（この時の彼女の表情は物凄く嬉しそうであった）言うのと、『そうかもしれないね』とリンクが言葉を返す。」

「ルカリオ兄ちゃん、僕のこと探してるの？」

「うん、そうみたい。多分もう少してウチの近くを通るかも……。」

ピンポーン

その時、インターホンが鳴り響いた。

「もしかして……。」

「僕行ってくる。」

ロイは立ち上がって玄関へ向かい、ガチャリとドアを開けると、そこにはゼエゼエと息の荒いメタナイトとミュウツーが立っていた。

「わっ！二人共どしたの？」

「やあ……ロイ……殿……。」

「ハア、ハア……ルカリオに……散々……村中……走らされたからな……。」

「アハハ、そうなんだ……あれ？」

ふとロイは二人の後ろにある、干からびた青い物体に気付いた。よ

く見ると、周りに火の玉も飛んでいる。

「ねえ、それ何？」

「ああ、これか……力と気力を使い果たした、ルカリオの成れの果てだ……。」

そう言つてミュウツーがそれをつかみ持ち上げてみせる。すっかり干からびたルカリオのその姿はまさに干物のようであった。

「……お湯かけたら戻るかな……？」

「今のルカリオには、弟に会わせる以外何も効果はなさそうだ……そうだロイ殿、ルカリオによく似た小さなポケモンを見なかったか？ その子が彼の弟なのだが……。」

「ああ、それなら今うちに」

その時、『どうしたんです？』と様子を見にきたゼルダがリオルを抱いたまま廊下に出てきた。

『あ。』

そいつだ、と言わんばかりにメタナイトとミュウツーはリオルを指差す。

「ゼルダお姉ちゃん、あの干物なあに？」

「まあ何でしょう？ 大きな干物ですね。」

「えと……お二人さん、これ干物じゃなくて……。」

ピク。

と、不意に干物状態だったルカリオが微かに反応したかと思うと、突然カツ！と目を開いた。

「うお！？ 何だ急に……！！！」

「……リオルの波導がする……！！！」

その途端、ルカリオは水を吸ったスポンジの如く膨らみ、元の姿に戻った。

そして顔を上げたその先にいたのは

「あつ！干物がルカリオ兄ちゃんになった！」

「リオルウウウウツッ！！」

ダツとルカリオは土足のまま家の中に上がり（いつもは足を拭いてから上がる）、リオルはゼルダから降りると『兄ちゃ〜ん！』と無邪気に兄の元へ駆け寄った。

そしてリオルは勢いよくルカリオに抱きつき、ルカリオも彼をしつかりと抱きかえす。

「リオル〜！会いたかったぞ〜！」

「わ〜い兄ちゃんだ〜！」

「そ〜ら、高い高い！」

「キャハハ！兄ちゃんの高い高い久しぶりだ〜！」

キャッキャッとはしゃぐリオルに高い高いをしながらくると回

るルカリオの表情は、今にも逝ってしまいうくらい幸せそうである。

その様子をリビングから見ていたマルス達は、普段見たこともないルカリオの姿に啞然としていた。

「ルカリオさんってさ……もしかしてブラコ」

「ロイ！その先は言っちゃダメよ！！ルカリオさんはちょっと兄弟を思う心が過剰なだけなんだから……！」

「……母さん、それをブラコンって言うんだよ。」

「そうか、道に迷っていた所を……私からも礼を言う、本当にありがとう。」

そう言っ頭を下げたルカリオは、すっかりいつもの状態に戻っていた。彼の膝の上では、リオルが出された麦茶を飲んでいる。

「いえ、そんな大したことでませんよ。」

「いやいや……実はな、リオルをしばらく私の元に置いておこうと思っ呼んだんだ。」

「置くってことは……ルカリオさん家に住ませるってことですか？」

「ああ、もちろんマスターからも了解を得たし、メタナイトとミュウツーも承諾してくれた。」

「フン……子供は苦手だが、ルカリオが『OK出さないと家事をやらん』と言い張るのでな……。」

ミュウツーはいつものしかめっ面でプイとそっぽを向く。

「え！？僕兄ちゃんと暮らせるの？」

会話を聞いていたリオルはパアツと目を輝かせた。

「ああ、学校にも行くんだぞ。リオルはこの村が気に入ったか？」

「うん！あつそうだ、学校ってリンクお兄ちゃんとかゼルダお姉ちゃんいる？」

「うん、俺達も通ってるからね。」

「マルスお兄ちゃんもいるよ。」

「リアル君と同じくらいの子供達も通ってますよ。」

「本当！？お友達いっぱい出来るかな？」

嬉しそうにはしゃぐリアルを見て、ルカリオはまたあの恍惚の表情を浮かべている。

それに気付いたメタナイトとミュウツーは呆れた表情を浮かべた。

『（やっぱりコイツ、本物のブラコンだ……。）』

すま村のメタナイト家に、また新たな家族が増えました。

終わり。

兄弟思いは度が過ぎるとブラコンになる（後書き）

オリキャラ2人目です。　リオルは可愛くて気に入っているので前から出そうと決めていました。人懐っこい甘えん坊だけどしっかりしてる子、という性格です。兄馬鹿ルカリオも書いて楽しんでました。

宿題は溜めとくと大変だから早く済ませちゃいなさい

太陽がジリジリと照りつけ、今日も暑いすま村。

ミーンミーンとセミ達が合唱する中、すま家のリビングでは子供達が夏休みの宿題に取り組んでいた。

ネスとリユカ、ピットが真面目に取り組んでる一方、3兄弟とダークは『もうウンザリ』という表情で床に寝そべっていた。

ソファーでは宿題をとくに終わらせたシークとゼルダ（手伝い）がコースターに刺繍をしている。

「あ、まだダウンしてる。」

おやつを作り終えたリンク（彼も宿題を終えた）が台所から戻り、床に寝そべる彼らを見るなり呆れたように言う。

「うゝダメ……全然終わんない……。」

「やつてもやつても終わらないよゝ……。」

「……解答を見てもいいか……？」

「ダメだよ！それじゃ自分のためにならないだろ？」

「そうだ！お前ら終わってんなら写さしてくれよ！」

「それもダメ！ちゃんと自分の力でやりなさい！皆が粗方宿題片付けるまで、おやつはお預けだからね！」

リンクが強くとマルス達は『えゝ！？』と不満そうに声を上げた。

「そんな殺生なゝ！！！」

「おやつ抜きなんてあんまりだよゝ！！！」

泣き叫ぶ彼らにシークは縫い物をしながら『食べたかったらさつさとやりなよ』と冷たく言い放つ。

その一方、ネスは隣のリユカが時計を見ながら何やらソワソワして

いることに気付く。

「リュカ、どうしたの？」

「あつ、いえ……そろそろ来るかなって思ってた……。」

『誰が？』と尋ねようとしたその時、

ピンポーン

「ん？誰かな？」

リンクが玄関に行こうと体の向きを変えようとする前に、リュカは待ってしたと言わんばかりに席を立ち、ドタドタと玄関に走っていた。

リュカが戸を開けると、そこには鞆を肩に掛けたトレーナーがゼニガメを抱いて立っていた。

「こんにちは、リュカ。」

「ゼニ〜！」

「こんにちはトレーナーさん！わざわざ暑い中ごめんなさい。」

「ううん、君から『勉強教えて』って電話をもらったからには行かなきゃ、ゼニガメも一緒にね。」

「ゼニゼニ〜！」

「こんにちはゼニガメ……あれ？他のポケモン達はどうしたんですか？」

「それがリザードンとフシギソウが夏バテしちゃってね、二匹共家でダウンしてるよ。」

「あら、大変ですね……まあどうぞ、上がってください。」

リュカが促すとトレーナーは『お邪魔します』と靴を揃えて家に入った。

「でもリュカ、僕なんて呼ばなくても、学校で成績トップのシークさんとかもう宿題終わってるんじゃないか？」

「はい、シークさんの他にリンクさんとゼルダさんも宿題全部終わらせてますよ。」

「だったら成績平凡の僕なんかより彼らに聞いたほうがいいんじゃない……。」

「いえ、それがシークさんいわく『教えるんだっいたら裁縫の方がいい』らしいんです。リンクさんとゼルダさんは『自信無い』って言うてて……。」

「アハハ、シークさんらしいね。」

「それに、トレーナーさんは成績いい方ですよ。前のテストの結果でシークさんに続いて2位だったじゃないですか。」

「2位なんて大したものじゃないよ、やっぱシークさんには敵わないや。」

そんなことを話しながら二人（+1匹）がリビングに入ると、リンクの『いらつしやい』の後、やる気0だったマルス達はトレーナーを見るなり顔をパアツと輝かせた。

「トレーナー君！よく来たね！」

「今のお前がスッゲエ輝いて見えるぜ！！」

「あつぜニガメもいる！可愛い！だっこさせて！！」

「お願い助けて！シークとかリンクとか全然教えてくれないんだよ……！！」

「……まあ、適当な所に座れ。」

アイクに促され、トレーナーは言われるままに彼らの向かいに座る。「さあトレーナー君！！僕達を助けると思って宿題を教えてください！！」

「え……でも僕、リュカのを宿題最初に手伝おうと思ったんですけど……。」

「あ、それなら心配しないでくださいトレーナーさん。今はマルスさん達の方が遅れてるので、そちらを先にしてください。」

「そう？……分かった。」

トレーナーはゼニガメを降ろすと、鞆から課題になっていた問題集

を取り出す。

「え〜と……じゃあ分からない所がある人は挙手してください。」
すると『ハイ!』と早速ロイが手を挙げた。

「はい、ロイ君。」

「35ページのアイテムの問題で、『ステージ・頂上に出現する野菜のうち10%回復する野菜』って何だっけ……?」

「……それ、俺も分からん……。」

「ええと……この問題は5月頃に習いましたよね、教科書の14ページを見ると早いですよ。」

ロイとアイクは言われるままに教科書を開く。

そこにはステージ・頂上の説明が書いてあり、回復アイテムの欄には野菜のデータがついていた。

「……あつた。」

「10%はとうもろこしか……成程、ありがとうトレーナー君。」

「この手の問題は教科書を見ると大体載ってるんです。僕もそれを見ながらやって終わらせました。」

「終わらせましたってことは……君も宿題全部終わったの?」

トレーナーの前に麦茶を置いたリンクが尋ねると、彼は『ハイ』と頷く。

「僕の家では他にフォックスとピカチュウが終わってます。ファルコとウルフは全然ですけどね。」

「あ……それにしても、何で僕達子供だけ乱闘の勉強しなきゃならないのかなあ?」

勉強する手を止め、ゼニガメをだっこしながらマルスは口を尖らせて言う。

「……何を今さら。」

「入学式の時マスター言ってたじゃん、『乱闘について知識がまだ不完全な貴方達は学習する必要があるのです』ってさ。」

「……言ってたっけ?」

「……さては寝てたな?僕だって頑張ってたのに、この野

郎くらえ！」

コツンと軽く頭を叩かれ、マルスは『あうっ』と小さく声を上げた。

「アハハ……じゃあ次、分からない所がある人は？」

「はい次俺！27ページの所全部分かんねえ！」

「ええっ！？ダークさん……このステージに出現するポケモンは……」

「……」

「トレーナー君！ここ分かんない！」

「あつハイ、『大乱闘』のチーム戦の色の種類は……」

「あの、トレーナーさん……この公式教えてほしいです。」

「ん？ここはね、こう並べ替えて……」

「ごめん、トレーナー君。ここだけ教えてくれないかな？」

「いいよ、ネス君。ステージ・『メイド イン ワリオ』のミニゲ

ームは全部で……」

「トレーナー君、忙しい所悪いんだけど……」

「ピット君も？分かった。『くす玉』から出てくるアイテムは……」

「……」

2時間後。

すま家チルドレン達はトレーナーの熱心な教えのおかげで宿題のほとんどもを終わらせ、おやつの水羊羹にありつくことが出来た。

「ん〜！夏はやっぱ冷たいお菓子に限るね！」

「あ〜ようやく糖分摂取できたぜ。」

「これもトレーナー君のおかげだね、感謝感謝」

「いえ、そんな大したことでませんよ……」

そう言うてはにかむトレーナーの後ろにリュカが回り、彼の肩を両

手で叩き始めた。

「リュカ？」

「トレーナーさん、お疲れ様です！細やかですが肩叩きます！」

「リュカ……………ありがとう、お願いするよ。」

ニコリと笑ったトレーナーに、リュカは『エヘヘ』と頬を赤く染めて嬉しそうに微笑み返した。

「へ……………じゃあ僕も細やかだけど、腕のマッサージでもしようかな。」

「え？」

「僕は足の裏を。」

「……………リュカの次に肩をやつてやる……………」

「俺の腰マッサージは効くぜえ……………」

「え？ええ？」

トレーナーが狼狽する間もなく、マルス・ロイ・アイク・ダークの4人は一斉にトレーナーに飛びかかる。

「ひゃああゝ！そんないっぺんに、やめてくださ……………うひゃあ！どこ触ってるんですかダークさん！！うわつくすぐった……………アハ、アハハハハ！」

「わああゝトレーナーさん！！！」

マルス達がじゃれるそんな光景を、リンク達は茶を飲みながら遠巻きに見ていた。

「あらら、トレーナー君が大変だね……………」

「もう、あいつら本当に子供なんだから！」

呆れるネスとピットの隣では、リンクとゼルダがくすくすと笑っていた。

「でもトレーナー君、何だか楽しそう……。」

「そうですね…貴方もそう思いませんか？シーク。」

「……………そうだね。」

その言葉を返したシークは仕上げて余った刺繍糸を、チヨキンとハサミで切った。

いつも騒がしくてやかましい。
でも、それがウチの家族。

終わり。

宿題は溜めとくと大変だから早く済ませちゃいなさい（後書き）

すま村学校では国語や数学などは教えず、乱闘のしかたやアイテムの正しい使い方などを教えます。その方がスマブラ世界の学校らしいかな？と思ひまして。因みに学年関係なく学ぶことは皆一緒です。

家庭訪問って先生が親に何言うか不安

すま村にある大きな屋敷。

ここには、この世界の神でありすま村の村長であるマスターとクレイジーの二人が住んでいる。

「家庭訪問？」

マスターと共にコーヒを飲んでいたクレイジーが聞き返すと、マスターはいつもの笑顔で『はい』と頷いた。

「何も夏休みにやるこたあねえだろ。」

「いい機会ではありませんか。いずれにしろ、保護者の方に子供達の成績や授業態度などを話しておかないといけませんし。」

「もしかして俺も行かなきゃなんねえ？」

「勿論ですよ。」

「えー！！メンドイからマスター1人で行ってこいよ　　っ痛
だだだだ！！」

やる気の無いクレイジーの頬を、マスターは笑顔のままギリギリと爪を立ててつねる。

「誰に向かって生意気を言っているのですかクレイジー？」

「あゝゴメンナサイごめんなさいゝ！！俺も行きますからゝ！！」
クレイジーが謝ると『よろしい』とマスターは手を離し、クレイジーはヒリヒリと痛む頬をさすった。

「じゃあ、行きましようか。」

「今からかよ……おゝ痛てゝ。」

マスターは鞆にファイルを数冊詰めると椅子から立ち上がり、クレイジーを連れて玄関へと向かっていった。

一軒目・すま家。

マスターとクレイジーはリビングに案内され、テーブルの前に座っていた。

「二人共、暑い中ご苦労様ね。」

そう言いながらサムスは二人の前に冷たい麦茶を置く。

「全くだ、先生というのは大変だな。」

「いえいえ、これも教師としての仕事なので。」

ファルコンに対していつもの笑顔で言葉を返すマスターの隣で、クレイジーは麦茶を飲み干し『あゝ生き返った』と呟いた。

「で、今日は家庭訪問ということだけれども、具体的に何をするのかしら？」

「そうですね。することと言えば、この夏休みの間お子さん達に何か変わりはないかなど……あとは一学期のお子さん達の成績を教えたりすることですね。」

「ハッハッハッ、ウチの子供達は変わらず元気だぞ！」

「成績ねえ……確かシークは学校トップだと話は聞いてるけど……。」

「はい、シーク君は普段の授業態度も良く、仕事もしっかりやり遂げるとてもいい子です。お宅のお子さんではリンク君とゼルダさん、ネス君とリユカ君とピット君、ポポ君とナナちゃんにカービィ君も

彼と同様、授業態度・生活態度面々良好ですね。」

「…あの、それ以外の子達は……？」

「彼らですか……まずダーク君はハッキリ言って成績ドベです。授業態度も悪いですし……あとの3人は成績に問題ありませんが、マルス君は授業中にも関わらず近辺のクラスメートと話してばかり、ロイ君はノートに落書き、アイク君は爆睡と、彼らも授業態度に問題が多々見られますね。」

「……………あの子達は……っ！！帰ったらうんとお説教しなきゃね……………！！」

マスターの話を聞いて怒りに燃えるサムスの隣で、ファルコンはいつものように『ハッハッハッ』と笑っていた。

二軒目・スネーク家。

マスターとクレイジーは座敷に案内され、テーブルのスネークの向かい側に座っていた。

「はい先生、ささやかですがどうぞ。」

そう言っただけでトレーナーが二人の前に出したのは、冷えた麦茶ときな粉と黒蜜のかかった冷たい葛もちだった。

「うは〜うまそ〜！」

「これはこれは……ありがとうございます、トレーナー君。」

「トレーナーの手作りですからな！旨いですよ〜！」

「そうですね、手作りとはすごいですね。」

スネークに対しいつもの笑顔で言葉を返すマスターの隣で、クレイ

ジーは葛もちを一口食べ、『んゝうめえゝ!』と幸せそうに声を上げる。

「じゃあ、後はごゆつくり。」

トレーナーはマスター達にペコリと頭を下げると、座敷から立ち去った。

「……よく出来た息子さんですね。」

「そうでしょう? 自慢の息子です。」

「そんな自慢の息子さんですが、学校では生活態度も良く成績も2位と、かなり優秀です。」

「本当ですか!? 大したものだ、さすが俺の息子……。」

「ピカチュウ君とピチュー君も一生懸命真面目に勉強してますよ。」

「そうですか……ところで、ウチの反抗期3人組はどうですか……?」

何となく不安げにスネークはおずおずと問いかける。

「ええ、フォックス君は根が真面目ですから成績も悪くありません。ファルコ君は、提出物を出さない時がしょっちゅうありますね……」

「ウルフ君は入学時、無断欠席が多かったですが、最近はクラスに馴染めてそのようなことはしていません。」

「そうですか……!」

スネークは安堵したような表情を浮かべたが、息子達の汚点を聞いたせいで少し顔色が悪い。

「お疲れですね……。」

「息子達の反抗期に困りはてまして……どうしたらいいんでしょうね……?」

「反抗期は一番面倒臭え年頃だからな。」

「そうなんですよ……聞いてください先生、この間ウルフなんか俺に向かってね」

二人はそのまま、スネークの愚痴に2時間程付き合わされた。

三軒目・ドンキーさん家。(ジャングルガーデン)

マスターとクレイジーは小屋の中に案内され、ドンキーの向かい側に座っていた。

「ウホッ、ウホホ。」

「こんにちはドンキー、忙しい中すみません。」

ドンキーに対しいつもの笑顔で言葉を返すマスターの隣で、クレイジーは出されたバナナを食べながら『バナナ食い放題だな』と呟いた。

「ウホホ、ウツホホ？」

「はい、ディディー君はいつも活発で元気な子ですよ。」

「ウホ、ウホホ？」

「そうですね。問題といえば、遊びに夢中になりすぎて勉強を怠ってしまっ点がある所ですね。」

「ウホ、ウホウホ！」

「ええ、貴方から言っておくようお願いします。」

「(……マスター、何でコイツの言ってること分かるんだ……！
?)」

会話を聞いていたクレイジーは驚愕の表情でマスターを見ていた。

四軒目・メタナイト家。

マスターとクレイジーはクーラーのきいたリビングに案内され、ルカリオの向かい側に座っていた。

「先生、飲み物どうぞ。」

トコトコとリオルが盆にアイスコーヒーを乗せてこちらに歩き、二人の前に置く。

「ありがとうございます、リオル君。」

笑顔を返すマスターの隣で、クレイジーはアイスコーヒーを一口飲み「あゝ夏はやっぱコレだわ」と呟いた。

「先生、転校してすぐ夏休みに入りましたが、リオルはどうでしょうか？」

「はい、すぐに皆と馴染めたようです。」

「お友達もできたんだよ！ピカチュウと、ピチューと……いっぱい！」

目をキラキラと輝かせて両手を広げるリオルを、ルカリオはホワーンと効果音がしそうな程の笑顔で見ていた。

「（噂通りのブラコンだな……。）」

「それにしても、リオル君は本当にいい子ですね。」

「（あつバカ、マスター！その話をしたら……。）」

「そうだろう！この子は卵から孵った時からもう可愛くてな、ちよっと成長したら頭のいい気のきく素晴らしい子になってそりゃ

もう

「

二人はそのまま、ルカリオの弟自慢に3時間程付き合わされた。

「あゝやつと終わった……。」

家に帰ったクレイジーは、ボスツ勢いよくソファーにダイブした。向かいの椅子ではマスターが平然とした様子で紅茶を飲んでいる。

「どこの親も個性的な方々が多かったですね。」

「個性的過ぎんだろ……もう家庭訪問なんてこりこりだぜ……。」

「貴方は散々食べて飲んでただけでしょう？」

「まあな。」

「それに、私は楽しかったですよ。」

「……アンタ、相当の変わり者だよな……。」

「フフツ、どういたしまして。」

マスターはニコリと微笑むと、紅茶を一口飲んだ。

終わり。

家庭訪問って先生が親に何言うか不安（後書き）

最近夏バテで更新遅くてごめんなさい……（……）それに加えサ
イトのキリ番も溜ってるので大変です……。

恐い話は苦手だけど聞きたくなる

それは、ある暑い日の夜のことだった。

「あゝゝ無いゝゝっ!!」

冷蔵庫を開けたロイの上げた声に、一同は何事かと台所に集まる。

「ロイ兄ちゃん、どうしたの？」

「何こんな遅くにデカイ声出してんだよ？近所迷惑だぞ！」

「ねえ皆！誰か僕のシュークリーム（夏限定・トロピカルフルーツ入）知らない！？ここに閉まっといたはずなのに……!!」

「シュークリーム？知らないわよ。」

「……自分で食べておいて、忘れたんじゃないのか？」

「そんなことないよ！確かにここに入れておいた………ん？」

ふとロイの視界に、自分から目をそらしているマルスが入った。よく見てみると、彼の右頬に白いものが付いている。

「……マルス、もしかして君食べた？」

「なっ!!何言ってるんだよ！勝手に人を犯人扱いしないでほしいな!!」

「……頬にクリーム付いてるよ、マルス。」

呆れ顔のシュークに指摘され、マルスは『ハッ!!』と気付く。

「チッ、バレたか。」

「『バレたか』って何だよ!!？あれ高かったんだよ！楽しみにしてたのに!!」

ロイが半泣き顔になっていると、『しょうがないな』とファルコンはポケットから財布を取り出し、3Gのコインを5枚出すとそれをマルスに差し出した。

「ほらマルス、まだスーパーやってると思うから、これで食べたのと同じシュークリームを買ってこい。」

「え、僕が？」

「あなたが食べちゃったから当然でしょ。」

「うゝゝ分かった。」

マルスが渋々言いながらお金を受け取っていると、『僕も行っていない？』とネスがサムスに言った。

「あら、いいけど何で？」

「何だか炭酸のジュース飲みなくなっちゃって、一緒に行って選びたいんだ。」

「そう、分かったわ。」

「ハイ、ジュース代だぞ。」

ファルコンがネスに1G渡すと、彼は『ありがとう』と礼を言いお金をポケットにしまう。

「じゃあ行ってくるね。」

「すぐ戻るから。」

「外暗いんだから、気を付けなさいよ。」

『はい。』

サムスに返事を返し、二人は玄関で靴を履くとガチャリと戸を開け外に出た。

「うわゝ真っ暗だ！」

スーパーを出て歩きだした二人の目に入ったのは、すっかり日が沈み真っ黒になった世界だった。

「来たときはまだ少し明るかったのに……。」

「夏とはいえ、さすがに8時を過ぎると暗いんだよね。」

「うっ……何か怖い……。ネス、早く帰ろう。」

「そうだね、あまり遅いと父さん達心配するだろうし。」

ひた……

「……ん？」

ふと、ネスの耳に微かな足音が聞こえた。

「（気のせいかな……？）」

ひた…… ひた……

「……！」

またも聞こえたその足音に気のせいではないことを察したネスは、立ち止まり振り返る。

だが、自分達が歩いてきた道は真っ暗で何も見えない。

「ネ、ネス……どしたの……？」

「……マルス、今足音聞こえなかった？」

「足音？何それ、聞こえなかったけど……。」

ひた、ひた……

「っひ！！何……！？」

「ね……聞こえただろ……？」

「誰……？前も後ろも、人なんていないし……。」

「……そういえば聞いたことあるな、こんな話……。」

「な、何さその話って？」

「……日が暮れて外が真っ暗になった頃、帰り道を歩いていると……
……ひた、ひた……って、足音がするんだ……振り返ってもそこには誰もいない……
……やがて足音はひたひたとこちらに近付き、目の前まで来た途端……」

「うわあああっ！！何それ恐っ！！誰から聞いたんだよ！？」
「買物の帰りに、村の大人達が噂してたの聞いたんだよ……………まさか本当だとわね……………」

ひたひた、ひたひた……

「うわ…………っ！！本当に近付いてきた……………！！」
恐怖で顔が青ざめたマルスは咄嗟にネスをギュウウツと抱き締める。
「うわっちょ苦し……………！！」

かなり力がこもっているため、ネスの顔も別の意味で青くなる。

「どうしよネス……………近付いてくるよ……………！！」

「だったらこのまま逃げれば……………！？」

「……………足すくんで動かなくなっちゃった……………」

「ええっ！？じゃあせめて弟の僕だけでも逃がしてくれない……………？」

「死なばもろともだよ！！」

「道連れかああっ！！」

ひたひた、ひたひた

「ふえ……………来た……………！！」

「ムガッ！！ちょ……………力入れないでマルス……………！！余計苦し……………」

「!!」

ひたひた、ひたひた

「（うわあぁ〜んっ!!滅茶苦茶怖いよぉ〜!!）」

「（ぐ……もう、息が……マルスに絞め殺される……!!）」

ぴたっ

「アレ？マルス君トネス君ジャアリマセンカ。」

「……………ん？」

聞き慣れた声に二人は顔を上げる。しかし、その姿はどこにもない。

「え……どこ……？」

「アナタガタノ目ノ前デス……ッテ言ッテモ、僕ハ真ッ黒ダカラ分カリニクイデスネ。」

「この声もしかして……………ウォッチさん？」

その姿は分らないが、ウォッチさんことMr・G&Wは暗闇の中『ソウデス』と答えた。

「こんな夜遅くにどうしたんですか？」

「夜ノオ散歩デス。今日八川辺ニ蛍ヲ見ニ行コウカト思ッテマス。」

「蛍！？いいなあ、僕も見たい！」

先程の怯えていた様子が嘘のように、蛍と聞いたマルスは目を輝かせた。

「（この人、感情の起伏激しいな……………」

「良カッタラ、君達モ来マスカ？」

「本当ですか！？行こうよネス！」

「えっ、ちょ……………」

ネスの答えも聞かず、マルスは彼の手を引いてG&Wの後についていった。

「蛍は本でしか見たことないから、本物見るの初めて……………」

「写真ナンカデ見ルヨリ、ズット綺麗デスヨ。」

「へえ、楽しみだなあ……………」

一方、マルスに手を引かれているネスは、満面の笑顔の彼に苦笑いを浮かべた。

「（…人生楽しんでるなあ、この人……………」

終わり。

恐い話は苦手だけど聞きたくなる（後書き）

夏らしくちょっと怪談チックにした結果見事にギャグに変わったこの作品（――）近いうち肝試しでも書こうかなと考えています。

たまには形式を変えてみた

「こんにちは、リンクです　　って、あれ？」

「どしたのリンク？」

「あっシーク、何か今日はいつもと形式違うなと思ってね。」

「リクエストで『俺達3人の会話』ってのがあったからだよ。」

「あれ？ダークいたんだ。素で気付かなかった。」

「ケンカ売ってんのかてめえは……！！さっきも言った通り、今回は俺ら3人しか出ねえんだぜ。」

「へーそうなんだ。」

「……でも僕ら3人がいた所で、何をすればいいか分からないね。」

「それもそうだな……ん……。」

「お！そうだ！」

「何か思いついたの？ダーク。」

「この際だからよ、男同士でしか話せねえことでも話し合ってみるか？」

「男同士でしか話せないこと……？」

「面白そうだね。で、お題は何？」

「そうだなあ……じゃあ、『初対面の女と会った時まず始めに見る所』！」

「何それ？」

「また変わったお題だな。お前の頭ん中どうなってんだよダーク。」

「いーからいーから！で、どうなんだよ？」

「んー最初に見る所か……俺はやっぱり顔かな。シークは？」

「僕も顔だね、特に表情に重点を置いて見るよ。」

「表情？」

「表情でその人の印象が決まるだろ？可愛いとか格好いいとかの以前に、僕はその相手がどんな人物なのかを知りたいね。」

「へ……さすがシーク、考えてることが一味違うね。ダークは？」

「んふふー俺はなあ……やっぱココだ！」

ダーク、親指で自分の胸を指差す。

「……………心を見るってこと？」

「へえ、たまにはいいこと言っじゃないか。」

「はあ？何言ってんだお前ら。」

『へ？』

「俺が言ったのは心なんかじゃなくて、胸だよ胸！やっぱ女は胸が何カッブかが大事だろ？俺的にはCかDだな」

「…………ハハ…ダークらしいな…………。」

「そんなしょーもないこと…………。」

「しょーもなくねえだろ！？いいかリンク、もしゼルダが貧乳だったらどう思うよ？」

「なっ！？何言ってんだよバカ！！このスケベ！！」

「スケベで結構。男ってのはな、皆スケベなんだからよ。」

「バカは認めないんだ。」

「で、どう思うっ？」

「だからそついう質問は…………」

「どうせここには俺ら3人しかいないんだ、恥ずかしがらねえで正直に答えるよ……。」

「……貧乳は、やだ……。」

「よし、よく言った。やっぱりお前も男だな!」

「ううう……。」

「（リンク、また一歩成長したな……。」）

終わり。

たまには形式を変えてみた（後書き）

台詞だけの小説をよく見るのでトライしたら見事に玉砕……（
| - ;） 書ける人が羨ましいです。ところで話変わりますが、ウ
チのダークは女子にも男子にもセクハラします。カッコいい彼を求
めている方、ごめんなさい>（| - ;）<

お風呂は皆で入った方が楽しい

すま村にある温泉『キノピオの湯』。

今日、すま家は家族揃ってここに来ていた。

「わ〜いお風呂屋さんだ〜！」

「温泉なんて久し振りだな〜。」

「これも母さんがスーパ―の福引で、入浴タダ券当てたおかげだね。」

「そうよ、私に感謝しなさい！」

そんなことを言いながら入り口の暖簾をくぐると、自動販売機のあ
るロビーにスネーク家とガノン家、マリオ家にメタナイト家、プク
リン姉妹の姿があった。

「あれ……？何で皆がいるの？」

「はっ！！アイク様ああっ！！！」

アイクの存在に気付いたプリンは弾丸の如き速さで彼に飛び付き、
『ぐは…っ！』とアイクは小さく呻き声を上げる。（その様子を見
たロイは悔し涙を流していた）

「あっ……シークさん……。」

シークと目が合ったプクリンは頬を赤く染め恥ずかしそうに目をそ
らした。

それに気付いたフォックスは憎たらしそうにシークを睨みつけたが、
彼は特に反応もせずいつものように冷めた目で彼を見返す。

「やあファルコンにサムス、家族総出だな！」

「お前の所もな、スネーク！」

「こんばんは、今日はずいぶんと人が多いわね。」

親同士が挨拶を交しているその横で、トレーナーを見つけたリユカ

が彼の元へ駆け寄っていた。

「ハアイ、ゼルダ。こんばんは。」

「こんばんはピーチ、今日は皆さんお揃いなんですね。」

「スーパールの福引で入浴タダ券当てたからね。早速入りに来たのよ。」

「……当たりやすい福引だな……。」

「せっかくお風呂を優雅に堪能しようと思ったのに……。」

ぶすうつと頬を膨らませて不満を漏らすマルスに『まあいいじゃん』とロイがなだめるように言う。

「ホッハウ！じゃあ早速温泉に入ろうか！」

一同はゾロゾロ番台のキノピオにタダ券を渡し、それぞれ男湯と女湯の暖簾をくぐっていった。

「あゝ俺もアッチ（女湯）行きてゝ！！」

ワシャワシャと頭を洗いながら、ダークは不満気に言う。

「しょうがないだろ、ピチューはまだ小さいんだから。君みたいに嫌らしいこととかは考えてないしね。」

「くそ……ところでシーク。お前つてさ、水かけたら女になったりする？」

「どこのネタ引つ張ってきてんの？なるわけないだろ。」

「あゝツマンネー！俺は今までお前の胸に巻いてるサラシを見て、『ひよつとしてコイツは女かもしれねえ』と密かな希望を持ち続けてきたのによー！！」

「ハイハイ、残念だったね。」

「よし！俺の夢を壊した罰として今すぐ女になれ！！」

「無理言うなバカ。」

「ちくしょーこうなったらものは試しだ！水かけてやる！」

「ちよっ……やめて！冷たい」

「シークさんにセクハラするなこのアホ野郎！！」

スパコーン！とピットに桶で後頭部を殴られ、ダークは『ぐはあっ！』と短く悲鳴を上げると手前の鏡に額をぶつけた。

「……………はあゝあ。」

三兄弟が洗髪やら各自行っていると、体を洗っていたロイが不意に溜め息をついた。

「どしたのロイ？」

「ちよつとね……ってマルス、どっち向いてんの？僕こっちだよ！」

「えゝ待ってゝ、今日開けたらシャンプーの泡が目に入っちゃう……」

……」

「流しなよ！」

「うゝ仕方ないなゝ……」

マルスはシャワーで泡を洗い流すと、タオルで顔を拭きロイの方を向く。

「で、どしたの？」

「……何かさ、こうやって二人を改めて見ると、羨ましいなゝって思うんだ……」

「羨ましい……？」

「何が？服を脱いでも輝かしい僕の美貌が？」

「違うよ、お馬鹿。」

「あゝ馬鹿って言ったゝ！！……てか何？さっきから裸の僕らを観察してたの？君ってそういう趣味だったわけ？」

「話を進めさせろおっ!!……僕が言いたいのは、アイクの体格の良さとマルスの身長が羨ましいって言ってんの!僕なんか、二人と並んだらチビで貧弱だし……。」

そう言くと、ロイはシュンと落ち込んでしまった。

「仕方ないよ!ロイは僕達より年下なんだからさ、成長してけば身長も伸びるよ。」

「……体格も、段々と変わってくるぞ……。」

「そうかな……?」

不安そうなロイの背中を、マルスは「大丈夫だって!」と笑顔でバシバシと叩いた。

一方、ガノンドロフ・ワリオ・クッパは岩を積み重ねて作られた壁に手につき、顔を近付けていた。それは端から見ても覗きであることが分かる。

「ゼルダは細い割になかなか胸があるな……。」

「やはり我輩の見込んだ通り、ピーチは良い身体をしている……グフフフ。」

「おお!サムスのナイスバディは生で見るにかぎるぜ!」

「……何してる?」

不意に彼らの背後からドスのきいた声が聞こえ、ビクツ!と驚いた3人が振り返ると、そこにはリンク・マリオ・ファルコン・ピカチュウが鬼のような形相で立っていた。

「あ……え〜と、これはだな……。」

「ゼルダの裸見やがって……！！」

「覗き自体許せないけど、ましてやピーチの入浴シーンを覗くなんて……！！」

「俺のサムスに覗きをするなど、そんなに死にたいらしいな……」

「！！」

「ピカ……！！」

『あわわわわ……！！』

その直後、男湯に彼らの悲鳴が響き渡った。

「ふう……やはり温泉というものは良いな……」

こちらではメタナイト・ルカリオ・ミュウツーが頭にタオルを乗せ湯船につかり、まったりとしていた。当然、メタナイトはいつもの仮面を外している。

「こう気持ちが良くと、嫌なことは皆忘れそうだ……」

「全くだ……家事の疲れが徐々に消えていくのが分かる……」

「フン……」

バシャアッ！

「ぶわっ！？」

突然湯が顔にかかり、メタナイトが頭のタオルで顔を拭いていると、

『ゴメーン！』とカービィの声が聞こえた。

「全く……カービィ、温泉は静かに入るものだぞ。」

「ポヨッゴメンね……それにしても、メタナイトって仮面取る

と、何か可愛いよね。」

「なっ！何を言っ」

「あゝ！メタナイトさん可愛い〜！」

「普段とずいぶん印象変わるんですね。」

「……お前達！！私が気にしていることを〜っ！！」

ポポとヨッシーまでもに言われ、ついにキレたメタナイトは少し涙目になりながらバシャバシャと飛沫をあげて逃げる彼らを追い掛けた。

二人が呆然としてしていると、遊んでいたリオルがルカリオの元へ近寄ってきた。

「ルカリオ兄ちゃん、遊ぼう。」

「いいぞ〜 何して遊ぼうか？」

「んとね〜……もぐりっこ！」

「よし！兄ちゃん負けないぞ〜……せーの！」

掛け声と共にルカリオとリオルはバシャンと湯の中へ潜る。

「……………」

隣で時々水面に浮かんでくる空気の泡を、ミュウツーは無言で眺めていた。

「うわ〜！お外のお風呂だ〜！」

丸い岩に囲まれた広い温泉を目の当たりにし、ちみっこ達は感嘆の声を上げる。

ポポとカービーがドボンツと飛び込むと、『静かに入らんといかんぞ』とファルコンが注意した。

「ふい〜…体の芯まで暖まるぜ。」

「ファルコ、あんまりつかり過ぎると体からダシが出てくるぞ。鶏

ガラの。」

「ナメとんのかこの野郎おっ!!」

からかうウルフに対しファルコが怒鳴ると、ガラツと女湯の出入り口が開き、女子達が（一部タオルを巻いて）入ってきた。

「あなたゝ来たわよ。」

「おお、サムス！」

「マリオ、さつき男湯から悲鳴みたいなのが聞こえたけど、何かあったの？」

「何もないよ、ピーチ」

「ポポだゝ！」

「ナナだゝ！」

「イヤン！アイク様ったら、そんなにプリンの裸ジロジロ見ないでくたしやいでしゅゝ!!」

「（……いつも裸のようなものだろ……？）」

「あの、シークさん……お隣よろしくて……？」

「ん？別にいいよ。」

「（……あの野郎ゝ!!露天風呂でタオル一枚のプクリンさんと、あんな近くにいいっ!!）」

「（……あれ？ゼルダがいらない……？）」

不審に思ったリンクがキョロキョロと辺りを見回していると、ガラリと女湯側の戸が開き、タオルを巻いたゼルダが髪を後ろにまとめて入ってきた。

「（ゼ……ゼルダのタオル一丁姿……!!）」

リンクは顔を赤く染めると、ゼルダから目をそらした。その様子をダークとシークはクスクスと楽しそうに笑っている。

「あらゼルダ、もう湯あたり平気なの？」

「ええ、もうすっかり大丈夫です。」

「え？どういうこと？」

「ゼルダったらね、さっきお湯に入りすぎたのぼせちゃったのよ。」

「本当にご迷惑をおかけしました……。」

「そうか……ま、体調が直ったんならいいや、ゼルダ、俺の隣来いよ！」

ダークが彼女を呼ぶと（隣のリンクは『えっ』というような顔をしていた）、ゼルダは静々と湯船に歩いていく。

その時、『あっ』とナナが声を上げた。

「どうかした？」

「ナナ、あっちのお風呂にアヒルさんのオモチャ忘れてきた！」

ナナはザバリと風呂から上がり、岩のタイルをダツと走り出した。

「こらナナ！お風呂場は走っちゃダメ」

サムスが注意したその時、

ツルツ

「うわあ……っ！」

濡れたタイルに滑ったナナは、思わず近くにいたゼルダのタオルをガシツとつかむ。

「え？」

ズルリとタオルは転倒するナナに従い、下へと落ちていく。

ハラリ。

その場の空気が、一瞬にして氷ついた。

啞然とする大人達。

頭の上に『？』マークをつけるちみつこ達。

真っ赤になる子供達。

いつもの無表情のアイク。

両手で目を覆うロイ。

口端をひきつらせるマルス。

額に手を当て『あちゃゝ……』と呟くシーク。

満面の笑みでグッ！！と親指を立てるダーク。

そして

「キャアアアアッ！！」

ゼルダが悲鳴を上げたのと、リンクが鼻血を噴き出したタイミングは、ほぼ同時だった。

「先輩、鼻血止まりました？」

ロビーのソファーに寝かされたリンクを見下ろし、ロイが尋ねる。
虚ろな目をした彼の頬は林檎のように赤く、二つの鼻の穴にはティ
ッシュが詰められている。

「う……。」

リンクが弱々しく返事をする、鼻のティッシュにまた血が滲む。

「うわっ、このままじゃティッシュ足んないよ……僕貰ってきま
すね。」

そう言うロイは受付のキノピオの元へ走っていった。

「（……ゼルダの裸、見ちゃったな……。）」

先程の光景が甦り、また血が勢いよく出そうになる。

リンクが慌てて鼻を押さえると、シークがタオルで髪を拭きながら
自分を見下ろした。

「リンク、調子どう？」

「あ……シーク……。血が止まらないよ……。」

「全く情けないね、君の片割れのダークはあの後ずっと笑顔だった
よ？」

「あいつはスケベだから……。」

「スケベとかそんなじゃなくて、君も少しは耐性つけなきゃ……

……

将来もしかして、もう一度見ることになるかもしれないだろ？」

「んな……っ！！」

その言葉にボツ！とリンクの顔は燃え上がる程赤くなり、今にも湯気が出そうな程であった。

彼のそんな様子を、シークはいつものようにただクスクス笑っていた。

その後、リンクとゼルダは恥ずかしさと気まずさのため、お互い3日程まともに顔が見れなかったという。

終わり。

お風呂は皆で入った方が楽しい（後書き）

物凄くはっちゃけた作品になりました（- -;）話の内容でもありませんが、私はサブキャラをすま村のいろんな店などに配置するのが好きなのです。ってか、単にスマブラにはいないキャラを出すのが好きなだけなんですけどね（^ - ^；

肝試しの組決めとかドキドキする

午後8時。

日はとうに沈み、空には星と月が輝いている。

そんな中、ルイージマンションの扉の前にすま家を含む各ファミリ―達が集まっていた。

「今日は父さん達が脅かし役なんだよね？」

「そうだぞ、腰が抜ける程怖いから覚悟しておけよー！」

「あわわわ……どうしよう兄さん……僕怖いよおお……！！！」

「しっかりしろルイージ、ここのステージは昔お前が活躍した所だろ？」

一方、彼らの近くに建っているテントではマスターとクレイジーが腰掛け、隣にはロボットが3体待機している。

「ねーマスター先生ー！」

「早く始めようよー！」

ポポとナナが急かすように言うと、マスターは『そうですね』と言い、椅子から立ち上がると皆の方を向き、口を開いた。

「では皆さんお集まりいただいたところで、これより肝試し大会を始めたいと思います。ルールはいたって簡単、クジで決まった二人組のペアでこのルイージマンションを一周し、そのタイムを競いあいます。タイムが最も短かったペアには一人ずつこの賞品を差し上げます……クレイジー、見せてください。」

クレイジーは『あいよー』と返事をするとう立ち上がり、後ろにあったテーブルから何やら持ってくるとうそれを一同に見せた。

「はっ！！そ、それは……！！！」

それは今スマブラワールドで大人気であるがため、現在入手がとて
も困難になっている『どせいさんぬいぐるみ』であった。

『わああゝ……！』

ちみつこ達と子供達、大人達までもが目を輝かせ、ぬいぐるみを見
ている。

「ポヨゝ！どせいさんのぬいぐるみだゝ！」

「凄い！！本物のどせいさんぬいぐるみだ！！よく入手したね！？」

「あつたり前、俺らを誰だと思つてんだよ？」

「前、わざわざドルピックタウンまで買いに行つたけど売り切れで
……それが今ここにあるなんて……この勝負、絶対に負けられない
ね！！！」

「まあ、可愛らしいぬいぐるみですわ……。」「

「（ハッ！！プクリンさんがあのぬいぐるみを欲しがってる……
よし！絶対優勝してやるぜ！！）」

それぞれがやる気に燃えていると、待機していたロボットの1体が
大きな穴の開いた箱を持って彼らの前にウィーンと機械音をたてて
進んで来た。

「これからペア決めのクジを行います。書いてある番号が同じ人と
ペアになります。取り替えるなどズルはしないでくださいね？」
マスターが言うとき子供達は『ハーイ』と返事をした。

「では一列に並んで、ロボットの持っている箱から紙を取り出して
ください。」

「脅かし役の奴らは、もう中に入ってスタンバっててくれ。」

子供達が並ぶのと同時に、ファルコン達大人はそろそろとルイージ
マニシヨンの中に入っていく。

「（僕、プリンちゃんとがいいな……お願い神様！！）」

「（プリ！アイク様とがいいでしゅー！）」

「（……誰でもいい……眠い……）」

「（あわよくば、プクリンさんとがいいぜ……）」

「（確率は低いと思いますが……出来ればシークさんと……）」

「（退屈しなければ誰とでもいい……それより、リンクはゼルダと
ペアになってほしいな……）」

「（私、怖いのが苦手ですから……どなたかサポートしてくださる方
がいいです……）」

「（ゼルダと組みてえな、何せ暗い屋敷の中で二人つきり……ヘッ
ヘッへ）」

「（ゼルダは怖いのが苦手だから……よければ俺がついていてやり
たいけど……）」

それぞれの思いを胸に、彼らはクジを引いていった。

結果。

- 1 デイディー・ファルコ
- 2 ネス・ソニツク
- 3 ポポ・ナナ
- 4 リユカ・トレーナー
- 5 ダーク・リオル
- 6 アイク・プリン
- 7 ロイ・ピット
- 8 フォックス・ピカチュウ
- 9 シーク・プクリン
- 10 ウルフ・ピチュー
- 11 マルス・カービィ
- 12 リンク・ゼルダ

「わゝいポポとだゝ！」
「わゝいナナとだゝ！」

「何で僕がコイツとなんだよ！！ああ〜プリンちゃん！！」
「こっちだって願ひ下げだ！！僕はお前みたいなアンポンタンじゃなくてシークさんと良かったのに〜！！」

「プリ〜！！アイク様、やっぱりプリン達運命の赤い糸で繋がって

るんでしゅねー！」

「…そうなのか……？」

「くっそお……何で……何でアイツがプクリンさんと……！？」

「ピッ……ピカチュ……」

「シ、シークさん……私、トロくて足手まといになるかもしれないけど……よろしくお願いしますわー！」

「うん、よろしくね。」

一方、リンクとゼルダはお互いペアになれたことに驚きつつも、どこか嬉しさを隠せずにいる様子である。

「まさかゼルダとペアになれるなんて……。」

「私もびつくりです……リンク、よろしくお願いしますね。」

「う、うん！任せなよ！」

そう言うリンクは照れたように笑った。

そんな二人を見ながら、ダークはぶうと頬を膨らませている。

「畜生、俺がゼルダと組むはずだったのによ……。」

「ダーク兄ちゃん、ゼルダお姉ちゃんとペアになりたかったの？」
無邪気に問いかけるリオルを、ダークはヒョイと抱き上げた。

「そうなんだよ、兄ちゃんはゼルダ姉ちゃんとペアになつてあんなことやこんな事をしたかったんだけど……よし！いいこと思いついた。」

ニヤリと不敵に微笑んだダークに、リオルは『う？』と首を傾げた。

「リンクとゼルダがペアになったか……偶然にしてはラッキーだよな、あいつら。」

「偶然などではありませんよ、クレイジー。」

「へ？……まさかアンタ、クジ仕組んだな？」

「ええ、その二人以外のペアにも。」

「……マスター、今回は何考えてんだ？」

「さあ、どうでしょうね？」

ニコリと微笑んだマスターの笑顔の下に潜む企みに、クレイジーは呆れた表情を浮かべた。

次に続く。

肝試しの組決めとかドキドキする（後書き）

書きたかった話をようやくUPすることができました。まだ続きます。

人間、恐怖に陥ると本性出る

「……さて、どうやら中も準備が整ったようですし、それでは1番ペア・ファルコ君とディディー君から、どうぞ。」

「おう、こんなの楽勝だぜ。」

「ウキヤキヤ〜!」

ファルコはスタッフのロボットから懐中電灯を受け取り、ディディーと共に館の中に入ってしまった。

「結構本格的だな……。」

暗い廊下を懐中電灯で照らし、歩く度にギィギィと鳴る古びた床やクモの巣を見ながらファルコは呟く。

「ウキ〜……。」「

ん? 怖いのか?」

「ウキヤ、ウキ〜……。」「

「大丈夫だろ。どうせ脅かし役は親父達だし、対して怖くも何ともな」

ピトッ

その時、ファルコの顔に何か冷たいものが当たった。

「ぶへっ！何だよコレ……………」。

その正体を見た途端、彼は言葉を失った。

それは、ブヨブヨとした触感の……………血にまみれた、人間の手。

「っぎゃあああゝっ！！」

その瞬間、館中にファルコの悲鳴が響き渡った。

「ハゝイー番ペア、リタイアにより失格」。

ズリズリと気絶したファルコを引きずりながら出てくるデイディーにクレイジーが言い放つ。

「あのファルコがこうなるなんて……………そんなに怖えのかよ……………？」
「サー……………」と顔が青ざめる一同に、マスターはただニコリと微笑む。

「さあ、次は2番ペアお願いします。」

2番ペア・ネスとソニックは『うん…………』と弱々しく頷き、懐中電灯を受け取って二人で館の中へと向かっていった。

その後。

「23分28秒……結構いい感じじゃね？」

ゼエゼエと青い顔で息をつく二人に、クレイジーはストップウォッチを見ながら言う。

「ねえ二人共……どんな感じだった？」

「ハア……もう怖いなんてものじゃないよ！！心臓止まるかと思った……。」

「Oh……今日あたり夢に出てきそうだな……！！」

「（……そんなに怖かったのかな……想像したくない……。）」

「次ポポとナナだよ！」

「頑張るよ！」

「はい、頑張ってきてくださいね。」

『うん！』

それから数分後。

『うええええ……！』

「ほらほら、もう大丈夫ですよ。」

ヨツシーの背中に乗せられ、ポポとナナは泣きながら出てきた。

「ええええ！怖かったよ！」

「うええええ！りたいあ！しちゃったよ！」

「途中リタイアで失格……でもよく頑張ったな、お前ら！」

クレイジーはそう言うと、二人の頭をワシワシと撫でる。

「うっ……でもポポ、どせいさんのぬいぐるみ欲しかった……。」

「ナナも……。」

「そうだな、ぬいぐるみはやれねえけど……。ほれ、頑張ったで賞にコレやるよ！」

クレイジーはポケットをあさり飴玉を2つ取り出して差し出すと、

二人はパアツと顔を輝かせそれを受け取った。

『ありがとう先生！』

「なあに、来年も参加してくれよ？」

『うん！』

「いよいよ次ですね！トレーナーさん……。トレーナーさん？」

ふとリュカは、隣にいるトレーナーの顔色が良くないことに気付く。

「トレーナーさん……。どこか具合でも悪いんですか？」

「えっ！？ううん、そんなことはないよ！さ、行こう。」

口で否定しつつもやはりどこか様子のおかしいトレーナーにリュカは首を傾げた。

暗い館の中、懐中電灯の微かな光を頼りに二人は手を繋ぎながら階段を上っていく。

「うう……。今にも何かでそうです……。」

「そう、だね……。アハハ……。」

「……トレーナーさん、やっぱり何だか様子が変わですよ？どうしたんですか？」

「な、何でもないよ！！本当に……。あ！もっ少しで階段を上りきるよ！」

トレーナーは焦ったようにリュカの手を引き、階段を上る。
あと一段で上りきろうとした、その時

バン！

「うらあああああゝ！！！」

と、突然近くにあった部屋のドアが開き、やけに太ったミイラ男が
彼らの目の前に現れた。

「うわあああゝ！！！」

驚いたリュカは反射的に目をつむった。

が、次の瞬間

「うわあああああゝっ！！！」

バキィッ！！

「ぐふおうえっ……!!」

バタンッ

「……………え？」

次々と耳に入る不可解な音にリュカは恐る恐る目を開けると、そこにはミイラ男……否、ミイラ男の格好をしたワリオが口から泡を吹いて倒れており、隣をみると、突き出した拳から微かに煙が上がっているトレーナーの姿が目に入った。

「ト……トレーナーさん……これは一体……？」

するとトレーナーはリュカの方を向き、涙目で彼に抱きついた。

「うあああゝん!! 怖かったよ!!」

「トレーナーさん……もしかして、怖いのが苦手なんですか……？」

「……うん、ここに来るまで我慢してたけど、やっぱり怖いや……。」

「そうなんですか……それなら無理に続けることないですよ、リタイアしましょうか？」

「いや!ここまでできたんだもの、今さらリタイアはしたくないよ。」

「でも……………」

「僕ちゃんと頑張るから、ね？」

「……………ハイ、分かりました!」

リュカとトレーナーは手を繋ぎ直すと、再び歩き始めた。

その場に、ノビたワリオを置いて……………。

「22分13秒……2番ペアの記録を更新しましたね。」

「やったあ！やりましたね、トレーナーさん！」

「うん、あれだけ怖い思いした甲斐があつたよ。」

「ただ、今しがた館の方から、オバケ役の者が数人何者かによって気絶させられた。との情報が来ていますが……貴方達、何か知りませんか？」

『（ギクツ！！）いえ……何も………。』

（それって僕だ……！！）

（トレーナーさんだ……）

自分から目をそらす二人に、マスターは『？』と首を傾げる。

「よし！次は俺らだな！」

「ダーク兄ちゃん、一番になろうね！」

「おうよ！行くぜリオル！」

ダークはリオルをヒョイと抱き上げ肩車をする、懐中電灯を持って駆け出した。

「……ってな感じで出たのはいいものの……何かオバケ全然いねえなあ。」

辺りを懐中電灯で照らしながらダークはつまらなそうに言う。

「真っ黒くろすけ出ておいで〜 でないと目玉をほじくるぞ〜」

「お？トトロのやつか。」

「うん！昨日兄ちゃん達とビデオ見たの〜！真っ黒くろすけ出てこ

ないかな？」

リオルはキラキラと目を輝かせ、ダークの肩の上からキョロキョロと辺りを見回す。

「んゝ…でもこれだとよ、真っ黒くろすけどどこるか他のオバケも出てこねえと思うぜ…脅かし役の奴ら、何やってやがんだ？」

一方、こちらダーク達のいる2階B地点付近。

もうすぐで彼らが近付いてくると言うのに、その場担当のガノンドロフとデデデは動く様子もない。

「参ったデ…これじゃ動きようがなくて仕方ないデ。」

「仕方ないだろう…俺達は先程、物凄い剣幕のルカリオに『弟を泣かせたら命はないと思え』と言われたのだからな…。」

「今あいつらの前に出たら確実にリオルは泣くだろうな…俺様達、本当にルカリオに殺されると思うか…？」

「ああ…あ奴の目は本気だったからな…。」

「19分27秒、記録更新の現在トップです。」

「よっしゃ！…でもなあ、全然怖くなかったしよ、何か物足りねえ気分だぜ。」

「真っ黒くろすけ出てこなかったゝ！ぶうゝ！」

「まあ、運が悪かったのかもしれませんが…では、次のペアお願いします。」不満を漏らす二人を流し、マスターは次のペアに懐中電灯を渡していた。

「プリッ！アイク様、いよいよプリン達の番でしゅね！頑張るでしゅー！」

「…そうだな……。」

アイクが無愛想に返答する一方、ロイはハンカチを引き裂かんばかりに噛んで悔しがつている。

「ぢぐじょー！！プリンちゃんと暗い中二人きりだなんて……羨ましいいいっ！！」

「ま、これも宿命ってやつだよロイ。」

隣にいたマルスが気休めを言うと、ロイは彼に抱きついて『うわあぁーん！！』と声を上げて泣きだし、マルスはよしよしと彼の頭を撫でた。

そんな彼らをよそに、アイクはプリンを肩に乗せて館に入っていた。

暗い館の廊下に、アイクの足音とプリンのはしゃぐ声が響く。

ガタンッ！！

「キヤアアッ！アイク様、怖いでしゅー！」

「……………」

ゴトッ

「キャアアア〜！！アイク様、今何か動いたでしゅ〜！」
「……………」

バアンッ！！

「キャアアア〜！助けてくだしいアイク様〜！」

「……………なあ、プリン……………」

「（ハッ！！ア、アイク様が……………プリンを呼び捨てしてくれたでしゅ……………！！）
な……………何でしゅか？アイク様……………」

「……………そんなにはしゃいで……………お前は肝試しが好きなのか……………？」
「プリ！別にプリンは肝試しが大好きって訳じゃないでしゅ。」
「……………じゃあ何故……………？」

するとプリンはアイクの肩に乗ったまま、ポツと顔を赤く染めしお

らしくなった。

「それはでしゅね……………プリンはいく様と居られたら、どこだつて楽しいんでしゅー！アイク様と二人きりなら、例え地獄だつて樂園でしゅ……………（うつとり）」

「（……………こんな時、俺は何と言えがいいんだ…？）」

己の肩の上で『きゃー！』と顔を覆つて恥ずかしがるプリンをまづ放っておき、アイクは首を捻りながら館内を歩いていった。

「6番ペア、結果20分36秒、更新ならずですね……………おや？この小説をご覧になつてゐる貴方、今回のお話は楽しんでいただけでしゅうか……………？残念ですが、肝試し大会は後半へと続きます。お楽しみにしていってくださいね……………あつ、そうそう。次のお話で何が起きるか、貴方の想像にお任せしますよ……………フッフ……………」。

満月がルイージマンションを不気味に照らす中、肝試し大会は後半へ続く……。

次
に
続
く。

人間、恐怖に陥ると本性出る（後書き）

次回はちよつとミステリーテイストに仕上げたいと考えています。
ご期待ください……（ー）

怖いものは怖いでいいんだよ

7番ペア・ロイとピットは互いにそっぽを向きながら、暗い館内を歩いている。

「……ったく、何で僕がロイなんかと……。」

「僕だつてプリンちゃんとかよかったよ！……あゝあ、何でこんな小生意気な奴とペアじゃなきゃいけないんだ！？」

「何を……！その言葉そっくりそのまま返してやる……！」
バチバチと火花を散らして睨みあっていたその時、

ガタツ……！

『……！』

突然付近でした物音にロイとピットは驚き、思わず互いの手をギュッと握る。

「な……何手え握ってんだよ……？」

「お前こそ……あ、もしかして怖いんだろ……？」

「んな訳ないだろ……！お前だつて怖いんじゃない」

と、その時近くのドアがバァンツ！と開き、『ばあ！』とテレサが勢いよく飛び出した。

『きゃあああ……っ……！』

突然のことに二人はビクウツ……！と驚き、ロイはピットに、ピット

はロイにと、向かい同士に抱きつく。

「も……もう、この際君に何言われてもいいや………だからしばらくこうさせて………!!」

「し……仕方ないな………本当怖がりだな、お前………ちょうど僕も同じ気持ちだ………絶対離れるなよ………!!」

涙目でガタガタ震えながら、二人は同時に叫んだ。

『うわあああゝん!!怖いよおおゝつ!!』

「29分43秒………現在におけるの最低記録です。」

「えゝ!そんなゝ………あれだけ怖い思いして頑張ったのに………」

シユンと落ち込むロイの側に、不意にプリンがてくてくと歩いてきた。

「?………プリンちゃん?」

「プリ!落ち込まないでください、ロイしゃんはとっても頑張ったでしゅ!」

「プリンちゃん………!!ありがとうございます………!!(プリンちゃんが慰めてくれた!………はうゝ夢みたい!!)」

一気にテンションが上がったロイの一方、ピットは泣きながらシユクに抱きついている。

「うえゝん!ビリになっちゃいましたゝ!」

「ほら泣かないの、ピットは一生懸命頑張ったよ。」

そう言いながら彼がヨシヨシとピットの頭を撫でる様に、プクリン

は少しだけ嫉妬したとか。

「さてと、次はお前らか。」

「おう！さっさとクリアして優勝してやるぜ！（んでもって、賞品のヌイグルミをプクリンさんに……………）」

「ピ〜カ、ピカチュウ！」

「自信満々ですね、それではいつてらっしゃい。」

脅かしにも動じず、仕掛けにも動じず、フォックスはピカチュウを肩に乗せたまま3階の廊下を歩いていた。

「よし、このペースなら楽勝だな。」

「ピッカー！」

「一枚〜…二枚……………」

その時、通りかかった地点にある井戸（なぜか室内にある）から、何やら声が聞こえてきた。

「ピ……………？」

「どうした？ピカチュウ おいつ！」

途端ピカチュウはフォックスの肩から降り、勢いよくその井戸に向

かつて走り出す。

そしてピカチュウはジャンプし、その井戸の中に飛び込んだ。

「三枚……四枚　キャッ！」

すると井戸の中から小さく悲鳴が聞こえ、女の幽霊………もとい、幽霊の格好をしたサムスがピカチュウを抱いて現れた。

「もうピカチュウったら、驚いてくれなきゃダメじゃない。」

「ピ、チャア！」

「あれ？サムスさん？」

「あらフォックス君、どう？楽しんでる？」

「え、まあ……脅かし役も大変っスね。」

「そうなのよ、ここ暗い上にホコリっぽくてね。髪痛んじやうわ。」

「ハハハ……じゃあ俺達そろそろ行くので。行くぞピカチュウ。」

フォックスはピカチュウにそう言うが、当の本人は『ピカ！』と嫌そうに首を振る。どうやらまだサムスと一緒にいたいらしい。

「あらあら、困ったわねえ。」

「こらピカチュウ！時間なくなるっての、早く放れろよ！」

サムスから放れないピカチュウを強引に引っ張るが、ピカチュウは放れまいとサムスにしっかりしがみついている。

「お……い！！ピカチュウ……！！！」

「27分35秒、記録更新ならず残念でしたね。」

「クソ……！ヌイグルミが……！プリンさん……！」

本気で悔しがるフォックスの傍らでは、ピカチュウが『ピカピ……』と申し訳なさそうに頭を垂れている。

「いよいよ私達の番ですわね…シークさん…」

「そうだね。まあ、僕達は優勝とかそういうのにはこだわらず、自分達のペースで行こうよ。」

「は…はい！分かりましたわ！」

ニコリとプクリンがシークに笑顔を向ける様子を、フォックスは悔し紛れにギリギリと歯ぎしりをしながら睨みつけていた。

9番ペア・シークとプクリンは各スポットを難なく通過していき、出口へと歩いていった。

「結構スムーズに進むものだね。」

「はい、怖がりの私がここまで来られたのも、シークさんのおかげですわ…本当にありがとうございますわ。」

「いや、僕は別に何も」

その時、突然二人の目の前に天井からガイコツがブラーンと現れた。
「きゃああつ！！」

驚いたプクリンは思わずその場に腰を抜かす。

「大丈夫？」

「ごめんなさい…私、何だか立てませんわ……。」

「ありや……じゃあプクリンちゃん、僕の背中に乗りなよ。」

「えっ！？いけませんわ、私重いですし……！！」

「プクリンちゃんは重くなってるじゃないよ、さ、乗って。」

「あ……はい……」

躊躇いつつも、プクリンは顔を赤らめながらシークの背中に乗り、彼は立ち上がるとプクリンをおぶった状態で歩きだした。

くすくす……

「……………ん？」

微かに聞こえた笑い声にシークはプクリンを見るが、彼女は『？』と首を傾げていた。

「プクリンちゃん、今何か聞こえた？」

「いえ、何も……………」

「（……………気のせいかな……………？）」

「１９分３７秒、惜しいな〜！」

「ありゃ、ちよつと悔しいかもね。」

「ええ、それでも構いませんわ。（それよりも私は……………シークさんにおぶってもらっただけで幸せです……………。）」

「（シークの野郎……………プクリンさんをおぶって現れるとは……………！！）

「
フォックスの嫉妬の念に満ちた視線を無視し、シークは控えの場に戻る。」

「さて、次は１０番ペアお願いし……………」

「悪い、俺らリタイアするわ。」

『ええ〜っ！？』

ウルフの突然リタイア宣言に、フォックスとファルコ（気絶から復

活)、トレーナーは驚きの声を上げる。

「ど……どうしたんだよウルフ!？」

「まさかデメエに限って怖じ気づいたワケじゃねえだろうな……!」

「どうしたのウルフ?どこか具合悪いとか?」

「……あゝもうデメエ等少し落ち着け!俺がリタイアする理由は……コイツのせいだよ。」

そう言うウルフは自分の腕に抱いているものを見せた。

『あ………っ!』

そこにいたのは、スヤスヤと気持よさそうに寝息を立てて眠る、ピチューであった。

「……日中沢山遊んだから疲れたんだろ、今動かすと起きちまっちゃうよ……。」

「へえ……ウルフも優しいところあるんだね。」

「仕方ありませんね……では次のペア、お願いします。」

「ペポ……僕達だよ!」

「よし!頑張ろうねカービィ!」

「気合い入ってんな、よし行ってこい。」

『はい!』

カービィを頭に乗せ、マルスは懐中電灯で暗い道を照らしながら歩いていく。

「しっかしよく出来てるよね、本当に今にも出てきそうな感じ……。」

「

「ポヨ、オバケってどんな味がするのかな？」

「カービィ、食べる気なの……？ お腹壊しても知らないよ？」

「大丈夫！ 僕のお腹結構丈夫だから」

カービィが自信満々に言ったその時、近くの部屋のドアがバァンッ！と開き、白いヒラヒラとしたオバケが姿を現した。

「うわっ！ ビックリした！」

「ポヨ、オバケ！ いただきま〜す！」

するとカービィはマルスの頭から降り、大きく口を開けると目の前のオバケを吸い込み始める。

ヒュゴオオオオッ！！

「わっ！！ ちよつと待て……カービィ！！」

オバケが吸い込まれないよう必死に踏ん張っていると、被っていた白い布が力に負けて引っ張られ、ついにはスポンツと脱げてしまった。

その下から現れたのは……

「全く、いつもの如く食い意地の張った奴だな……。」

「あゝ！ メタナイトだ！」

「ペポ〜？オバケじゃなかったの〜？」

「そうだ、いいかカービィ。私は以前むやみやたらにものを吸い込むなど注意したばかりだろう？」

「ポヨ〜…ごめんなさ〜い……。」

「……ん、まあ、次からは気を付ける。分かったな？」

「ペポ……は〜い！」

「（……メタナイトって、本当カービィに甘いよねえ……）じゃあメタナイト、僕らそろそろ行くから。」

「ん？おお、頑張れよ。」

「バイバ〜イ！メタナイト〜！」

再びカービィを頭に乗せ、マルスはメタナイトに手を振りながらその場を後にした。

次に行く。

怖いものは怖いでいいんだよ（後書き）

本来は1本に収めるはずが長くなり次話に延長……次で肝試し編ラストです。

人生有り得ないことだって起こる

「18分28秒、5番ペアの記録更新でトップだぜ！」

「やった〜！優勝確定かもね〜」

「頑張りましたね……さて、いよいよ最後、貴方達のペアですね。」
マスターは懐中電灯をリンクに渡しながらにこやかに言う。

「俺達で最後か……。」

「頑張りましょう、リンク。」

「うん、じゃあ行こうか！」

リンクはゼルダと共に館の中へと入っていく。

と、ここで二人が入り口の戸を閉めたのを確認したダークは、『全員集合〜！』と一同に呼び掛ける。

何事かと皆がダークの周りに集まると、彼はゴニョゴニョと小さな声で何やら説明をし始めた。

「なあ……あの二人に内緒でよ、コッソリ館に入って脅かしに行かねえか？」

「あ〜面白そ〜！」

「ダーク、もしかしてリンクとゼルダがいい感じになるのを邪魔したいんだろ？」

「あつたり前だ！俺のゼルダをリンクなんぞになびかせてたまるかよ！……で、どうすんだ？」

「俺は暇だから行くぜ。」

「僕も行こうかな？」

「あ〜俺行きて〜！なあマスター、いいだろ？」

「仕方ありませんね……では、私がここに残ってるので行ってきてもよろしいですよ。」

「いよつしゃあ〜！」

「よし決定！行く奴はコッソリ中に入るぞ！」

『お〜！』

一同はダークを先頭に、ゾロゾロと館へ向かっていった。

20分後。

外組が館内に侵入したことに気付かないリンクとゼルダは、大人達＋子供軍団の脅かしに肝を冷やしていた。

「ハア、ハア……何なんだよ、この怖さは……！？」

「皆さん、今までこんな怖さの中をクリアしてきたのですね……凄いです……。」

「そうだよな……でも、もうすぐで出口だよ、頑張ろう。」

「はい。」

リンクはゼルダの手を引き、懐中電灯で照らしながら廊下を歩く。

「……あれ？おかしいな。」

と、ここでふとリンクが首を傾げる。

「どうしました？」

「ほら、教えられた通りでは出口はもうすぐのはずなのに……なかなか着かないんだ。」

「そういえば、何だか廊下が入り組んでいるような……。」

その時、フツと懐中電灯の明かりが消えた。

「きゃっ！明かりが……。」

「あれ？電池切れかな……しっかりしてくれよマスター……。」

窓から差し込む満月の光が廊下を青白く照らす。

「何だか、いつも綺麗と思ってる月も、この状況だと少し不気味だな……。」

「リンク……私、怖いです……！」

ギュッ、とゼルダはリンクと繋いでいた手を強く握った。

「……ゼルダ？」

震えているのが伝わってくる。

『本気で怖いんだな』

そう思ったのと同時に、リンクはゼルダを抱き締めていた。

「……リンク……？」

「ゼルダ……大丈夫だよ、俺がついてるからね？」

「……はい……。」

二人は抱き合いながら互いの体温に安堵し、不気味だったはずの月明かりが二人を優しく照らしていた。

ガシッ

その時、突然リンクは暗闇から伸びた手に、後ろから肩をつかまれた。

「っっわああああっ!!」

驚いたリンクは悲鳴を上げ、それに驚いたゼルダはリンクから離れる。

「……誰だよいきなり!!……って、あれ？」

リンクが振り返ると、そこにはキョトンとした表情のシークが立っていた。

「シーク……！何だビックリさせるなよ。」

「ゴメン、別に驚かそうと思ったわけじゃなかったんだけど……。」

「シーク、どうしたんですか？貴方はもう終わったはずでは？」

「そうそう。実は君達がまだ戻ってこないから、僕が迎えに行くよと言われたんだ。それで来たんだけど……何だかお楽しみの所、邪魔してゴメンね。」

「んな……っ！」

先程のことを思いだし、ボツ！と真っ赤になるリンクを、シークはクスクスと笑っている。

「さ、外でもう皆待ってるよ、早く行こう。」

そう言っているとシークは、リンクとゼルダの手を片方ずつつかみ、そのまま手を引いて歩き出した。

「（……あれ？何だか……シークの手、すごく冷たい……）」

「（外は思ったよりも寒かったのでしょうか……？）」

何だか違和感を感じつつも、二人は大人しく手を引かれているうちに、出口の戸の前に辿り着いた。

シークが戸を開けようと押すが、なかなか開かない。

「あれ？……ゴメン、リンク。開けてくれないかな？」

「分かったよ、ちょっとどいてて。」

シークを後ろに下げ、リンクは戸を押してみる。すると、ギギイと渋い音をたて、戸はあっさりと開いた。

「あれ？何だ、押しても開くじゃないかシーク………シーク？」

リンクは振り返ったその場所に、シークがいないことに気付いた。
「あら？どこに行ってしまったんでしょう？」
「ん……そのうち来るだろ、俺達は先に出ていよう。」
「ええ、そうですね。」
リンクとゼルダは出口から外に出ると、皆のいる場所へと歩いていった。

『くすくす……』

「おーやつと来たかお二人さん！」
リンクとゼルダが着くと、大人達を含む一同は一斉に彼らの方を向く。

「１２番、４５分２４秒……よって、優勝は１１番ペアとさせていただきます！」

『わ~~~~~!!』

パチパチと拍手が鳴り響き、クレイジーから１１番ペアのマルスとカービィにどせいさんぬいぐるみが手渡される。

「ペポー！どせいさんポポヨ柔らかーい」

「はうー！この感じがたまらないよー可愛いー」

その一方、リンクとゼルダはダークが大人達に混じって自分達を脅かしていた事実を本人の口から知った。

「全く…… やけに怖いと思ったら、皆で脅かしてたのか！」

「そうだが、面白かったろ？」

「面白かったのは脅かしてた貴方達の方でしょう？」

「へへっ、まあな。」

「反省の色無しだな…… あ、そうだ。シーク！」

リンクが名前を呼ぶと、それに気付いたシークはこちらに歩み寄る。

「何だい？」

「なあ、あの後君さ、いつの間に外に出たんだよ？ここに来たらちやっかり皆に混じってるし、気付かなかった。」

「あの後……？なにそれ？」

「貴方が私達を出口まで連れてきてくれた時ですよ？覚えていませんか？」

「いや、覚えてるも何も……」

僕は、ずっとここにいたよ。」

『……………え?』

あまりのことにリンクとゼルダは呆気にとられる。

「そんなワケないだろ……………だって君、中に迎えにきたじゃないか……………」

「?……………だから僕はずっとここにいたって、館の中には一切入っていないよ?」

「そうだぜ。コイツ俺らが脅かしに行くときも、他の連中と一緒に残ってたからよ。」

「……………それじゃあ……………私達が館の中で出会ったシークは……………。」

『くすくす……………』

それは、ある暑い夏の夜のことでした。

おまけ。

「……ん？マスター、そのビデオなんだよ？」

「これですか？この間の肝試し大会のものです。楽しいですよ、一緒に見ますか？」

「……いつの間に撮ってたんだよ？」

「最初から最後まで、全部です。」

「……まさかペア決めのクジに細工したのも、このためか？」

「ええ、楽しく撮れそうな二人組をペアにしたのですが、なかなか面白いですよ。」

「（…この大会も、所詮はコイツの暇潰しに過ぎないってことが…
…。）」

「そうですよ、あと『コイツ』とは何ですか？クレイジー……（
黒笑）」

「うわっ！！俺の心読んでんじゃねえよ！！……ところでさ、リンクとゼルダが幽霊見たらしいけど。」

「え？何ですかそれは？」

「あれ？……マスターが仕組んだんじゃねえの……？」

「？……私はそんなもの知りませんよ。」

「え……じゃあ、あいつらが見たのって……！？」

『くすくす……また皆で肝試し、やろうね……。』

終わり。

人生有り得ないことだって起こる（後書き）

ちよっぴりホラー要素を加えてみました。ちなみに、シークの姿をしたオバケはマスターの仕業ではありません……。

しつこい男は嫌われる

ある晴れた日のこと。

すま家ではリンクとダークがギャーギャーと口喧嘩をしていた。

ゼルダは困り果てた様子だが、シークは動ずることなく縫い物に専念している。

「ダーク……今日という今日は絶対許さないぞ!!」

「ああ?何をだよ?」

「とぼけるな!!さっきお前、ゼルダの頬に…キ……キスしたろ!」

「んあ?それがどうしたってんだ?」

「お前なあ……セクハラも大概にしるおおつ!!」

「バカ言ってるじゃねえ、頬にキスすんのは立派な挨拶だぜ」

「だ……だからって……何も俺の前ですることないだろ!!?」

もはや涙目のリンクをケラケラと笑いながらからかうダーク。

「二人共……シーク、どうしましょう?」

「さあね、気の済むまでケンカさせておきなよ。僕はこっちで忙しいから。」

「そんな……。」

ゼルダが困り果てていると、突然ダークがずいといと顔を近付けてきた。

「キャ……!どうしました?」

「なあゼルダ、リンクのアホなんかよりもさ、断然俺の方がいいよな?」

「え?」

「なっ!?!何やってんだよお前!!」

「ん、この際だからよ、直接本人に聞いてハッキリさせてもらおう
と思つてな。で、どっちなんだ？」

「え……ええと……。」

「ゼルダ、こんな質問答えなくていいよ。」

「ほ、お……じゃあお前は気にならねえのか？ゼルダがどっちのこ
とが好きなのか……。」

「んな……っ！だからそういう下らない質問は」

「気にならねえんだな？」

黒い笑みを浮かべたダークに圧倒され、リンクはモゴモゴと口を開
いた。

「……気に、なる……。」

「よし正直だな……つてことで……。」

ダークとリンクは目を光らせゼルダの方を向く。

「え……？」

「ゼルダ……こんなヘタレ野郎なんかより、断然俺の方がいいに決
まつてるよなあ……？」

「え……あの……。」

「何言つてんだよ！お前みたいな変態よりだったら、まだ俺の方が
マシだ！」

「どうか？それはゼルダが決めることだぜ。」

「ぐぬぬう……さあ、どうなのゼルダ！？」

真剣な顔の二人に詰め寄られ、ゼルダはたじろぐ。

「あうう……。」

さりげなくシークにアイコンタクトで助けを求めるが、生憎本人は
コースター（ロイのズボンで作った）に刺繍をする作業に夢中であ
る。

「（神様……どうかお助けください……！！）」

その時、玄関の戸がガチャリと開く音と共に『ただいま……』と声が
聞こえた。

「（！……この声は……！！）」

その声の主に気付いたゼルダは、咄嗟に玄関へと走っていく。

「あっ！ちょ、ゼルダ！？」

「おい！どこ行くんだよ！？」

突然逃げ出した彼女を追い掛けた二人の目に入っただのは……………

「お願いです……しばらくこうさせてください…………。」

「？……どうしたんだ…………？」

買い物から帰ってきたアイクの背に隠れる、ゼルダの姿であった。

「……成程……アイク、テメエも参戦か！？」

「は…………？」

「いくらアイクといえど、ゼルダは渡さないからな……………！！」

「？……何の話だ？」

『……………覚悟しろやあゝ!!』

わけの分らないアイクを無視し、リンクとダークは獣の如き勢いでアイクに飛びかかっていた。

「キャアア……………！アイク、二人を止めてください！！」

「止めるといっても……………一体何なんだ……………！？」

玄関から怒声と悲鳴が聞こえるなか、刺繍を終えたシークは窓の外を眺め、ポツリと呟いた。

「今日も、平和だねえ……………」

終わり。

しつこい男は嫌われる（後書き）

久しぶりの更新です。今まで停滞させていてごめんなさい（-_-;）スランプとショックでしばらくスマブラ作品を書けなくなっていました……ああもう。

甘えたい時に甘えればいい

午後のすま村。

アイクとロイは今日の晩ご飯の買い出しにすま村市場に来ていた。

「ほらよ！新鮮な野菜を選んでおいたぜ！」

「ありがと、おっちゃん！母さんも喜ぶよ。」

「なぐに、サムスさんにはいつもウチの野菜を買ってもらって感謝してんだ！よろしく言っといてくれよう！」

「うん、それじゃ！行こうアイク！」

「……ああ。」

受け取った野菜を買い物がこに入れ、ロイはアイクの手を引いて歩き出した。

すま村公園の前を通ったとき、ふとアイクが足を止めた。

「？……どうしたの、アイク？」

「……………」

彼は何も言わずに、ただ公園の中のある一点を見つめている。

不思議に思ったロイはその視線の先を辿ってみた。

「行つくぞー！父さん！」
「よし、来い！」

公園の広場で、父親と息子がキャッチボールをしていた。
息子は中学生位だろうか、ボールを取り損ねて父親に笑われ、悔し紛れに投げ返す。それをキャッチした父親が『いい球だ』と笑顔で言うつと、息子は照れたように笑って父親からのボールをキャッチした。

ロイは視線をアイクに移す。

幸せそうなその親子を見る彼の表情は、どこか哀しげであった。

「アイク……？」

「あ……スマン、立ち止まったりして……。」

「いや、いいけど……どうかした？」

「……何でもない……早く帰ろう……。」

アイクは親子から顔をそらし、ロイの手をつかむと足早に歩き出す。
手を引かれている間にも、ロイはアイクの顔をもう一度見る。やはり先程と同じように悲しそうな表情をしていた。

「（アイク……どうしたんだろう……？）」

「アイクの元気がない？」

家に帰ったファルコンは、玄関先でロイが言った言葉を繰り返す。

「うん……帰ってからずっと元気ないんだ……。」

「珍しいな、ケンカでもしたのか？」

「してないよ……何か、帰りに公園で見たキャッチボールしてる親子を見てからずっと……。」

「親子？……ふうむ……。」

ファルコンは顎に手を当ててしばらく考え込んだ後、玄関に飾つてあるスタンド式のカレンダーを見てボソリと呟いた。

「……もう、そんな時期か……。」

「え？」

「ロイ、アイクのことは父さんに任せろ。お前は何も心配いらない。」

「でも……。」

不安そうなロイの頭に、ファルコンの大きな手がポンと乗った。

「大丈夫だ、俺はお前達の父さんなんだぞ？」

「……うん、分かった。」

ロイは渋々頷き、自室に戻るため階段を登っていく。

それを見届けたファルコンがリビングに入ると、いつもソファアで寝そべっているアイクが、今日はテーブルに突っ伏していた。

「ただいま、アイク。」

ファルコンが声をかけると、アイクは顔を上げこちらを見た。その顔はいつも無表情だが、どこか元気がないのが見て取れる。

ファルコンは彼の向かい側に移動し、ドカッと腰かけた。

「ロイから聞いたぞ、お前の元気がないって。」

「……気のせいだ……。」

「嘘をつくな！俺はお前の元気がない原因を知ってるいるんだぞ！

……

明後日だもんな、グレイルさんの命日。」

「……………!!」

アイクは驚いた顔でファルコンを見るが、またすぐに無表情に戻る。

「…父さんに話したもんな……………親父のこと……………」

「ああ、お前が俺のことを『父さん』と呼ぶ理由もな……………お前にとつての『親父』はグレイルさんだということも……………」

「……………。」

アイクの脳裏に、グレイルとの幼い頃の記憶が蘇る。

あの公園の親子のようにキャッチボールではなく、アイクはグレイルと剣の稽古をしていた。

妹のミストが見守るなか、アイクは練習用の剣を構え雄叫びを上げながらグレイルに突っ込んでいく。

だがその攻撃は軽く受け流され、勢い余ったアイクは転がりながら木にぶつかった。

痛さのあまり後頭部を押さえるアイクの元に心配そうな表情のミストが駆け寄り、その後にグレイルが笑いながら歩いてくる。

馬鹿にされたと思ったアイクが頬を膨らまして憤慨すると、大きな手にクシャリと頭を撫でられた。

キョトンとするアイクに、グレイルは先程の小馬鹿にしたような笑みではなく、優しい父親の笑顔を浮かべて言った。

『強くなれ。強くなって、いつか俺を超える男になれ。』

「アイク。」

「………何だ？」

ファルコンの声で我に返り、アイクは焦ったように顔を上げる。

「明後日の墓参り、俺も行っていいか？」

「え……いいけど……。」

「そりゃ良かった、一度挨拶したかったんだ……アイクの『父さん』です、つてな。」

「……父さん……。」

「……俺はお前の『親父』にはなれない。お前の『親父』はグレイルさんだけだから……でも、血の繋がりは全然ないが、『父さん』も頑張つて『親父』と同じくらい尊敬される大切な存在になりたいよ……ちょっと図々しいかな？」

頬を掻いて照れ笑いを浮かべると、アイクが俯いたままスツと立ち上がり、ファルコンの後ろに移動するとそこで膝立ちになった。

「……父さん、肩揉んでやる……」

「お、スマンな……じゃあ頼む。」

アイクの声が僅かに震えているのをあえて無視し、ファルコンは肩にかかる程よい指圧にその身を任せていた。

時折聞こえる鼻をすする音と右肩だけ数秒止まるマッサージに、ファルコンは何も言わず、ただ微笑んでいた。

強がらなくていい。

甘えたい時は甘えて来い。

『父さん』が、全部受け止めてやる。

終わり。

甘えたい時に甘えればいい（後書き）

FEよく分からないのですが、アイクのお父さんが亡くなっている
と聞いて、今回は『親子』について書いてみようかなと思った作品
です。こんな感じで良かったのかな……（- -;）

子供にとってお使いは冒険

スネーク家、玄関先。

「はい、じゃあこれをオリマーさんの家に届けてきてね。」

トレーナーから何やら甘い香りのする物が入った籠を受け取り、『ピッカア!』とピカチュウは了解の返事をする。

「でも大丈夫? ひっくり返しでもしたら……………」

「ピチュウー! ピチュピチュ!」

と、ピチュウーは平気だということを証明するためにピョンピョンと跳ねながらトレーナーにアピールをした。

「そこまで言うんだったら……………気を付けて行くんだよ?」

「ピカチュウ!」

「ピチュウ!」

トレーナーに手を振られて見送られ、二匹は早速出発した。

「ピッカ ピッカ」

「ピッチュ ピッチュ」

ピカチュウが籠を抱え、その後をピチュウがついていく。

ちょうど公園の前を通過しようとしたその時、『おーい!』と呼び止められた。

「ピカ?」

二匹が公園の方を向くと、ネスを始めとするすま家ちみつこ達に加え、デイディー・リオルがこちらに手を振っている。

「今から皆でサッカーやるんだけど、二人も一緒にやらない？」

「ピチュ〜！」

ピチューは頷いて駆け寄ろうとしたが、ピカチュウに腕をつかまれ阻止される。

「ピチュ？」

「ピカピ、ピッカ！」

「ピ〜……。」

お使いを頼まれているのを思い出し、ピチューはシヨボンと落ち込む。

「ピ〜カ、ピカチュ〜！」

「そっか、残念……じゃまた今度ね！」

ネス達に別れを告げ、ピカチュウとピチューはその場を離れた。

「ピッカ ピッカ」

「ピッチュ ピッチュ」

村の通りを二匹はてくてくと歩いている。

「ピ〜チュピチュ〜！」

「ピッカア、ピカチュ〜！」

「美味しそうな匂いがしますねえ……………」

『ピ……ッ!?』

不意に、殺気に似た気配を感じ、二匹が振り返るとそこには涎を垂らしたヨッシーが立っていた。

「やあピカチュウ君にピチュー君、お使いですか？」

「ピ……ピカチュ……。」

「それにしてもいい匂いです……その籠の中からしますねえ……。」

「

ヨッシーは籠に顔を近付け、クンクンと匂いをかぐ。

「ピ……ピイカ……。」

グウーとお腹のなる音が耳に入った時、ピカチュウは危機を察知した。

「ピカチュウ君……。」

一口でいいから、私に食べさせてくださあぁいっ!!」

「ピカ!!……ピカチュウ!!」

咄嗟にピカチュウは籠とピチューを抱え、高速移動でヨッシーから逃げ去った。

ポツンとその場に残されたヨッシーは、涎を垂らしたままポツリと一言。

「食べたかったですのに……。」

「ピッカ ピッカ」

「ピッチュ ピッチュ」 畑に囲まれた一本道を、二匹はトコトコと歩いていく。

すると、ようやくオリマーのパン屋が見えてきた。

「ピカ！」

「ピチュピチュ〜！」

はしゃいだピチューは一番に着こうと駆け出す。

ガツッ

「ピ……………ッ!？」

だが、足元にあった小石の存在に気付かず、ピチューは転んでしまった。

「ピッ!？ピッカア!!」

慌ててピカチュウが助け起こすと、ピチューの足が擦り剥いて血が流れている。

「ピイ……………ピチュ〜!!」

まだ幼いピチューは痛みあまり泣き出してしまった。

「ピッカ、ピカチュ〜……………」

本当はピチューをおぶっていきたいところだが、そうすると籠を置いていくことになってしまう。そうするとまたヨッシーやカービィに見つかりかねない。

しかし、だからといってピチューを置いていくわけにもいかない。

「ピカ〜……………」

困り果てていたその時、『どうした?』と低い声が降ってきた。

「ピ…………?」

ピカチュウが振り返って上を見ると、片手に袋を下げ自分達を見下ろしている、ガノンドロフが後ろに立っている。

「ピツカア、ピカチュウ……………」

「フム……………オリマーの所に行きたいんだな。俺も奴に用事がある、何だったら俺の肩に乗っていくか?」

「ピカ……………ピカチュウ!」

ピカチュウは頭を下げ、ガノンドロフの言葉に甘えて肩に乗せてもらった。

「ピイ……………ピチュウ!」

いつもより高く見える景色に、ピチュウは足の痛みも忘れキャッキヤツとはしゃぐ。

「ピイカ……………」

ピカチュウもまた、小さな体の自分では見られない地面から高い世界に感動していた。

ピンポーン

「は〜い……………あら、ガノンドロフさんにピカチュウ君達。一緒に緒なんて珍しいですね。」

「皆サン、イラッシャイ。」

「ちよつとそこで会つてな……………ほら、頼まれてた林檎持ってきて

やったぞ。」

ガノンドロフが持っていた袋を渡すと、『ありがとうございます』とオリマーは深く頭を下げる。

「それと、ピチューの奴が転んで怪我をしたらしい。手当てを頼む。」

「ピカチュ〜……。」

「あわわ、大変です。ささ、皆さん家の中に入ってください。」

「……ヨシ、コレデモウ大丈夫デス。」

仕上げて絆創膏が貼られ、『ピチュ〜!』とピチューはG & a m p ; Wに頭を下げる。

「さてと……ピカチュウ君、お使いありがとうございます。」

「ピツカア!」

「……ところでオリマー、その籠のには何が入っているんだ? いい匂いがするが……。」

「あつ、そうですね。皆さんいることですし、早速頂きましょう。」

オリマーはそう言つと籠の中に手を入れ、中身を取り出しテーブルに置く。

それを見た途端、ピカチュウとピチューは目を輝かせた。

「ピイカ〜……………!」

「ピチュ〜……………!」

香ばしい匂いと甘い香りを漂わせて姿を現したのは、手作りのかぼちゃパイ。

「トレーナー君に頼んで作ってもらったんです。以前食べた時本当に美味しかったので、もう一度食べたくなってしまいました……。」「オリマーはG & a m p ; Wが持ってきた包丁でパイを切り分け、皿に乗せて各自に渡す。

「……怪我をしてまで頑張った甲斐があったな。」「そう言つてガノンドロフがピチューの頭を撫でると、彼は『ピチュー！』と大きく頷いた。

トレーナー兄ちゃん。

僕達、お使い頑張ったよ。

終わり。

子供にとってお使いは冒険（後書き）

第2次スランプからようやく復活しました。これからは今まで書けなかった分書いていきたいと思ってます $p(\wedge - \wedge)q$

野菜は新鮮なうちが一番美味しい

山々が色付き始めてきた、ある日のすま村。

ピンポン

「はーい今出ます。」

サムスがガチャリとドアを開けると、マリオとルイージが立っていた。

「やあサムス、こんにちは。」

「あら、マリオにルイージじゃない。どうしたの？」

「いやあ実は、ウチの畑のサツマイモがそろそろ収穫時期なんだ。しかしあまりに沢山あるもんだから、畑系の僕とルイージだけじゃ掘り起こすのが大変なんだ。そこで、すま家の皆さんにお手伝いをお願いしたくてね。」

「まあ、それはいいわね。あの子達そういうイベント事大好きだから。今日は皆乱闘もないし、いいわよ。」

「本当かい！？やったね兄さん！」

「ああ、ありがとうサムス。じゃ、1時頃にウチに来てくれ。」

「分かった。私もファルコンや子供達に言っておく。きっと皆喜ぶわよ！」

予告通り、1時頃。

マリオ家の立派な畑の1つ・サツマイモ畑の前にはマリオとルイージ、そしてトレパン姿のすま家一同が集まっていた。

「ペポ〜！おイモ掘りおイモ掘り〜」

「家計のためよ！掘りまくるんだから！」

「よ〜し！掘って掘って掘って掘って掘って掘りまくるぞ〜！」

「いっぱい掘りましょうね、ネスさん。」

「そうだね、リュカ。」

「私、おイモ掘りは初めてです……。」

「ゼルダ、俺が教え」

「俺が手取り足取り教えてやるぜ、ゼルダ〜」

「んが……っ！！ダークー！！」

「シークさん、頑張りましょうね！」

「そうだね、ピット。」

皆がはしゃぐ中、ひとときわ燃える少年・マルスの姿があった。

「よ〜し！たつくさん掘るぞ〜！」

「マルス張り切ってるなあ………どうしたんだろ？」

「……おそらく、イモ食いたいがためのやる気だろう……。」

「成程ね〜…マルスらしいや……。」

ロイが呆れていたその時、『全員注目〜！』とマリオの声が響いた。一同が注目した所では、マリオがスコップとイモの蔓をそれぞれ片手に持っている。

「いいか？イモは基本スコップを使いながら掘り出すんだ。こうやって……イモを傷付けないように……ほら！」

マリオが引つ張り出した立派なサツマイモに、一同は『おお〜！』と歓声を上げる。

「じゃあ皆、頑張って掘ってくれ！」

『ハ〜イ!』

早速スコップを手に取り、それぞれがイモを掘り始めた。

「傷付けないようにか……結構難しいね。」

「慎重にいかないと……よいしょっ!」

ピットが力一杯蔓を引っ張ると、土の中からズボォッ!と良い形のサツマイモが姿を現した。

「取れた…… シークさん、取れました〜!」

「凄いねえピット、一番乗りに取れたんだ。この調子で頑張つて。」

「エヘヘ シークさんに褒められた」

「うんしょ、うんしょ。」

「よいしょ、よいしょ。」

こちらでは、ポポとナナが協力して蔓を引っ張っている。

『せえ〜の!』

ポコッ!

「やったあ!おイモだあ!」

「やったあ!掘れたあ!」

二人で一つの大きなサツマイモを掘り出し、ポポとナナは互いに手を合わせて喜びの声を上げた。

ズボツ

「ポヨッ！取れたあ！」

「わあ、やったねカービィ……………」

そう言っ
てネスが振り向いた、その時

ガリッ
ゴリッ

「ペポ……………土臭くてあんまり美味しくない……………」

「ちょ……………っ！！カービィ、そのまま食べちゃ駄目だよ！！不味いに決まっ
てんでしょが！！」

「ポヨ？そうなの？」

ズボツ

「わあ……………見てください、小さくて可愛いおもが取れました！」

「本当だ。初めてなのに上手いな、ゼルダ。」

「さすが俺の女だな」

「（ピキッ）……………ダーク、土に埋めるぞ……………？」

「ああ？やれるもんならやってみるよ……………」（ニヤリ）」

ゴゴゴゴゴゴ……

（リンクとダーク、スコップを片手に睨みあい）

「お、お二人共……こんなところに来てまでケンカなど……。」

「おイモ おイモ でっかいの掘るぞ」

「……気合い十分だな……。」

「普段は花壇の草むしりとか、『王子の僕が土いじりなんて出来るわけないじゃないか』とか言って絶対やらなくせに……。」

「それはそれ、これはこれ！………お？」

その時、サツマイモを掘り出した後の地面に、黒い蔓を見つけた。

「何だこれ？………もしかして、でっかいイモかも………ロイ、アイク、手伝って！」

マルスは二人を呼び、早速その蔓を引っ張る。

「ふんっ！………抜けないな。」

「そおれっ！………本当だ、こりゃ結構でかいかも。」

「よし、掛け声を合わせよう！そしたらもつと力が出るよ………わっしょおいつー！」

「『わっしょい』！？神輿がついでんじゃないんだからさ、ちょっと違くない！？」

「……『ちえすと』とか、良くないか……？」

「アイク……君の国は皆九州弁なの？」

「えゝ！？『ちえすと』よりだったら『わっしよい』の方がカッコイイじゃゝん！」

「全然格好よくなかないって……。」

「……『わっしよい』よりは遥かにマシだ……！」

「『わっしよい』だって！」

「『ちえすと』だ……！」

「ああもう埒があかない……ロイ、君はどっちがいいと思ってる！？」

「どっちでもいいよ……。」

面倒臭くなり適当に返事をしたロイの肩を、グワシッ！とアイクがつかんだ。

「うわあっ！何……！？」

「……決めてくれ、ロイ……！！」

「えゝ……んなこと言っても……。」

「ちなみに、ロイが決めてくれないと君専用の掛け声は強制的に『どすこい』になるから。」

「『どすこい』！？何で僕だけそんな格好悪いの！？相撲とつてるわけじゃないのに、どうせならもつと格好よくなきゃやだよ……！」

「嫌なら決めな、さあどっち……！」

「ううゝ……（このバカ兄貴二人は……どうしろってんだよ……。）」

ロイが頭を抱えていたその隙に、アイクは蔓をつかみ『ちえすとおっ……！』と叫びながら引つ張り始めた。

「ああっ……！こらアイク、『わっしよい』だってば……！」

すかさずマルスも蔓を取り、『わっしよおいつ……！』と叫び力を込めて引つ張る。

「ほら！ロイも手伝う……！」

「えっ！？あ、うん……！」

ロイも駆け寄って蔓をつかみ、『どすこおいつ……！』と叫びながら

力一杯引つ張った。

蔓はメキメキと音を立て、あとわずかで地面から抜け出しそうである。

「よしもうちよい！頑張るぞ！………わっしょい！！！」

「……ちえすとおおっ！！！」

「カッコ悪いけど、もうヤケだ………どすこいっ！！！」

メキメキメキメキ……

プチッ！！

『……………ん？』

何かが切れるような音と、引っこ抜けた先にはサツマイモ一つ生っていない光景に、三人は首を傾げる。

「イモが…無い……？」

「あれ？これ蔓じゃないや、何か先っぽから電気がパリパリ出てるし。」

「マルス……………一体僕ら何を引つ張ってたワケ？」

「とりあえず、イモじゃなかったてことは確かだね……………何だいこんなの！」

ポイ、とそれを投げ捨て、マルスは『あゝあ』と溜め息をつく。

「大きいのが掘れると思ったのに……………」

「まあいいじゃん、畑にはまだ沢山イモがあるんだし。」

「…地道に掘っていくしかないだろ……………」

「そうするしかないかあ……………よし、頑張ろ！」

スコップを構え直し、三人は再びイモを掘り始めた。

夕日が山々の間に沈んでいく頃、畑に生っていたサツマイモは全て収穫し終えていた。

「ひゃっほう！終わってたね兄さん！」

「ああ、これもすま家の皆さんのおかげだ。ありがとう！」

「こちらこそ、子供達にとってもいい体験になったよ！」

「そうね、大人の私達も楽しかったわ。」

「ポヨッ！またおイモ掘りやりた〜い！」

「そうかそうか。じゃあまた来年も頼むから、その時はよろしく！」

……………はい、これは今日のお礼だ。」

そう言つてマリオがファルコンに差し出したのは、籠いっぱいに入れたサツマイモ。

「おお！今年も立派なイモをくれたな！」

「皆がそれぞれ掘ってくれたおイモね……………ありがとう二人共、じやあ私達はこれで。」

「ああ……………今日は本当にありがとう！」

子供達の『さよなら』や『また明日』を耳に聞きながら、マリオとルイージは帰っていく家族が見えなくなるまで手を振り続けた。

おまけ。

翌日の三兄弟とリンクの会話。

「はあーう スイートポテト美味しー！」

「やつぱ採れたてのサツマイモで作ると違うよね。」

「…甘さが控えめで、食べやすいしな……………」

「皆に好評で良かったよ……………そういえばさ、昨日の夕方からマリオさん家の電気が止まったって知ってる？」

「電気？何でまた。」

「何でも、畑の地中深くに埋めておいた電気ケーブルが千切れてて、電気がストップしたらしいよ。」

『（ギクッ！！）』

（もしかして…………。）

（僕らがイモと勘違いしておもいつき引つ張った…………。）

（…………あの黒いヒモのことか…………。）『

「それでテレビも見れないし明かりもつかないものだから、スネークさん家からピカチュウを借りて何とか一晩過ごしたらしいよ…………あれ？皆顔色悪いけど、どうしたの？」

『いや…………何でも！！』

「？」

終わり。

野菜は新鮮なうちが一番美味しい（後書き）

秋ということで、何となくイモ掘りに。他には今後すま村学校の演劇発表会などを書こうかと考えています。

中身が分からないもの程怖いものはない

清々しい秋晴れのある日。

すま家に畑で採れた野菜をお裾分けしに来たマリオとルイージは、玄関に立っていた。

「あゝ、何だか甘いものが食べたいな。」

「そうだねゝ、帰ったらピーチに何か作ってもらおうよ。」

そんなことを話しながら、ルイージはインターホンを鳴らす。

ピンポーン

しばらくするとドアが開き、ロイが顔を覗かせた。

「あつマリオさんにルイージさん、こんにちは。」

「こんにちは、今日はウチの畑で採れた新鮮な野菜をお裾分けしに来たんだ。」

「わあゝありがとうございます……うげっ！人参はいらないのに……。」

「ロイ君、好き嫌いはいけないよ！ウチの人参は旨いから食べてごらん。」

「うえゝい……あ、そうだ！今ちようどおやつにするところなんで、よかつたら上がってきますか？」

「本當かい！？実は今しがた甘いものが食べたいなゝなんて思った

ところなんだ！」

「こらルイーダ、はしゃがない…………でもいいのかい？」

「はい！今日はリンクが頑張って沢山作っただです。ささ、どうぞ！」

ロイに連れられ二人がリビングに入ると、そこにはすま家の子供達が全員集合していた。

「あつ、マリオさんとルイーダさんだ！」

「いらつしゃい、まあ座ってください。」

ネスに促され用意された座布団の上に腰掛けたその時、『お待ちせよ』と台所からリンクの声が聞こえた。

マルスとダーク、シークと共に現れた彼が運んできたのは、大きな皿に山盛りに乗せられた大量のシュークリーム。

「わあ！シュークリームの山だ！」

「ひゃー！リンク君頑張ったねー！」

「結構大変でした…………よつと！」

それをテーブルに置き、リンクは額の汗を拭う。

「中身は僕らが詰めたんだ」

「げっ！！何入れたの…………？」

「それは食ってからのお楽しみだぜ」

「大丈夫、セーフのやつは普通にカスタードとか甘いもの入りだから。」

ニヤリと三人は不敵に笑い、リンクの隣に座る。

「ペポ！早く食べよ！」

「そうだね…………じゃあ皆、シュークリームを一つだけ選んで。」

リンクの言葉に応え、皆それぞれ慎重にシュークリームを選ぶ。

「兄さん……………もしかしてこれって……………」

「ああ、ロシアンルーレットだな。」

「どうしょー!? 僕運ないのに〜!」

「まあまあ。セーフはカスタードが入っている、大体重さで分かるだろう……………うん、これだな。」

マリオが一つ選んだのに倣い、ルイージも恐る恐るシュークリームを一つ手に取る。

「それじゃ、セーので一斉に食べるんだよ……………」

「セーの!」

パクッ

「んぎゃあああゝっ!」

けたたましい悲鳴を上げた最初の犠牲者は、ピット。

「ひゃ、ひゃらい（か、辛い）〜!〜! なんれワサビがこんなに〜!

？」

「アハハハ！僕が入れたの引っ掛かったね。ちなみに僕のは苺ジヤム入り、美味し。」

「よっしゃカスタードだ、セーフ！」

「俺のもカスタードだ……ゼルダは？」

「……唐揚げが入っていました、美味しいです。」

「……いいな、肉……。」

（大福が入っていた）

「ポポの、ケチャップ入ってた。」

「ナナの、マヨネーズ！」

「うげえ……納豆だ……。」

「ネスさん……僕のはキムチが入ってました……。」

「ポヨ、チーズ入ってた。」

「わーい普通のシュークリームだ！やっぱりシュークリームの神様は僕に味方してくれたよ。」

「ああ良かった、僕のはセーフみたいだ。お前はどうか？ルイージ……ルイージ？」

呼び掛けても応答がない。

不思議に思ったマリオがルイージの顔を見ると、彼はシュークリームを握り締めたまま青い顔で硬直しているではないか。

「ルイージ……どうした？」

ボタンッ

「！……おいルイージ、どうしたんだ！？一体何を食べ

」

ルイージのシュークリームの中身を見た瞬間、マリオは驚愕したまま硬直する。

「マ……マルス君！！これは一体何だい！？」

マリオはモザイクのかかったそのシュークリームを驚掴むと、マルスの前に突き出した。

「ああそれ？台所にあつたもの粗方ボールに入れて、ある調味料全部混ぜたんだ」

「あまりにも酷くてモザイクかかってるけど！？」

「ちなみにこれの他には、ボム兵とデクの实が入ってるやつ混ぜてるから、気を付けてね」

「え……！？」

マルスの一言が彼の天使の様な微笑みを悪魔に見せる。

マリオは青い顔のまま、まだ沢山あるシュークリームの山を見上げた。

「ただいま……あら？いい匂い。」

「お？本当だ、今日は何を作ったんだ？」

買い物から帰ったファルコンとサムスの鼻を、香ばしい匂いがかすめる。

「でもちよつと焦げ臭いわね……失敗したのかしら？」

そう言いながらサムスがリビングを覗くと、彼女に気付いた子供達がこちらを向き『おかえり〜!』と出迎える。

「ただいま、今日のおやつなんだったの?」

「シュークリームでロシアンルーレット!楽しかったよ」

「ロイの奴、こういう時は運がいいんだから……まだ口がヒリヒリする……。」

「まゝね!僕にはシュークリームの神様がついてるから!」

「そう、良かったわね……………あら?」

ふとサムスがソファーに目をやると、口からエクトプラズムを吐いて死にかけているマリオとルイージが、人形の様に横たわっていた。
「あらら、二人共どうしちゃったの?」

「ロシアンルーレットでいろいろとね……………アハハハ……………」

乾いた笑いをするシークに、サムスは『?』と頭を傾げる。

「ただいま子供達〜!……………おや?まだシュークリームが余ってるな。」

「二人共食べる?何が入ってるか分からないけど……………」

「ああ、ちょうど腹が減ってたんだ。」

「私も、一つ貰うわね。」

パクッ

「おおっ!父さんの好きな納豆だ!シュークリームにしても旨いんだなあ。」

「私は豚カツね、ご飯が欲しくなるわ〜。」

「……………いいな、肉……………」

(一回も当たらなかった)

ふと、シークはソファでノビているマリオとルイーダに目をやる。
白目を剥いて気絶する二人の様子から、当分目覚めることはないな
と予測できる。

「（……後でおぶって家まで送っていかなきゃ……。）」

終わり。

中身が分からないもの程怖いものはない（後書き）

受験が終わり、ようやく一息ついたところで久々に書いた作品。マ
ルスがシュークリームに入れた、モザイクのかかる気絶するほどの
ものとは……………各自ご想像にお任せします（ハ―ハ）

美味しいものは皆を幸せにする

すま村公園。

子供達が遊具で遊んでいる中、買い物帰りのピカチュウはカゴいっぱい

のリンゴを抱えて歩いていた。ガノンドロフから大好物のリンゴを山盛りに貰い、ピカチュウはすっかりご機嫌である。

「ピッカ ピッカチュピ？」

ふと顔を上げると、少し離れたベンチにリンクが腰かけているのが見えた。その表情は落ち込んでいるように見える。

てちてちと近付いていくと、ピカチュウの存在に気付いたリンクはニコリと微笑んだ。

「やあピカチュウ、お使いの帰り？」

「ピカチュピカピカ？」

「え、俺？俺は ちよっとね」

そう言っているとリンクは溜め息をつく。

「ピカチュ」

ピカチュウはベンチにカゴを置くとベンチによじ登り、彼の隣に座った。

「ピカピ、ピッカ？」

「何かあったのか、って？もしかして心配してくれてるの？」

「ピカチュ！」

「...ありがとう.....」

実はさ、ゼルダとケンカしちゃって……。」

「ピカ？」

目を丸くするピカチュウの顔が、『ケンカだなんて珍しい』と伝えている。

「本当些細なことだったんだよ、原因は……でも、言い争いになつてるうちにお互い感情的になっちゃって……しまいにカツとなつて家を飛び出したんだ……はぁ……。」

もう一度溜め息をついたリンクの表情にはゼルダに対する怒りは見られず、むしろ彼女と仲を戻したいという思いが滲み出ていた。

「このままずっと、ゼルダと仲直り出来なかったらどうしよう……」

「……ピカ。」

どうすれば良いかピカチュウが思考を巡らせていると、ふと隣に置いたカゴが目に入る。

「ピ……ピッカア！」

ピカチュウはカゴからリンゴを一つ取り出すと、リンクの前にそれを差し出した。

「ピッカ。」

「え……何？くれるの……？」

「ピッカ、ピカチュウ！」

笑顔で差し出されては断るわけにもいかず、『ありがと……』と礼を言いリンゴを受け取る。

綺麗に赤くなつたそのリンゴを眺めていると、以前のおやつの際のことを思い出した。

「（そういえば……前にアップルパイを作った時、ゼルダ凄く喜ん

でくれてたな……。）」

もう一度作っても、許してくれるとは限らないけど

あの時の彼女の笑顔は、本当に幸せそうだった

「……よし！」

突然気合いの掛け声と共に立ち上がったリンクに、ピカチュウは『ピ?』と首を傾げる。

「ありがとうピカチュウ!君のおかげで何とかかなりそうだよ!」

「ピィ……………ピッカア!」

嬉しそうなリンクに便乗し、つられてピカチュウの頬も綻ぶ。

「よし、じゃあ早速家に帰って実行だ!……………よかったらピカチュウも来てくれないか?貰ったリンゴのお礼にアップルパイご馳走するよ。」

「ピカチュウ!」

喜ぶピカチュウを肩に乗せてカゴを持つと、リンクは家に向かって駆け出した。

美味しいものは皆を幸せにする（後書き）

久しぶりの更新で申し訳ございません（――；）< サイト
の方の更新やら受験やらでいろいろと忙しく更新できなかったの
あります。おまけに文章が短い……とりあえず、長い間更新出来
ず申し訳ありませんでした（――；）

パーティーとかは準備してる時が楽しい

街中がクリスマスツリーやリースのネオンで輝く、ドルピックタウン。

「えーと……次はあの店がよさそうね。」

楽しそうに歩くサムの後ろを、大荷物を抱えたファルコンがついていく。

「おいサムスー待ってくれー、この荷物じゃ前が見えないよ。」

「あら、ごめんなさいファルコン。でも今日中に全部買っていかなきゃいけないし……。」

「今年も毎年恒例、皆が寝てからだな。」

「そうね、フフ……きつとあの子達、今年は何かなって楽しみにしてるわ。」

所変わって、すま村学校。

校舎前にある広場では、学校の生徒達がいそいそとパーティーの準備に取り掛かっていた。

ちみっこ達が飾り付けているツリーは、モミの木ではなくウイスピーウッズ。

「ねえダーク、ツリーこんな感じでいいかな？」

「ああ、バッチシだぜ……悪いなウイスピーウッズ、いくら探して

もこの村にモミの木なくてよ……。」

「いいんだよ。私は皆が楽しそうにしているのを見るのが大好きなんだ、どんどん綺麗に飾っておくれ。」

嬉しそうに微笑むウイスピーウッズを見て、ダークもつられて頬を綻ばせた。

ドルピックタウンの、とあるオモチャ屋。

「よし、これだな！」

ルカリオは様々なぬいぐるみの並べてある棚から、大きなトトロのぬいぐるみを取り出し頷く。

「じゃあ私は会計をしに行ってくる。」

「ん……？それだけなのか……？」

「え？何が？」

「ブラコンのお前のことだ、プレゼントは山のように買っと思っていたのだが……。」

するとルカリオはニマアツと微笑み、その笑顔にミュウツーの背筋に寒気が走る。

「な……何だ？気色悪いぞ……。」

「んふふ、実はリオルがなあ……。」

〈3日前〉

「リオル、サンタさんに何をお願いするんだ？」

「ん〜とね……ちっちゃいトトロのお人形！」

「え？でもリオル、この間大きいトトロが欲しいって……………」

「うん、でもね…………あんまりおっきいと、サンタさん重くて大変だもん！だから僕、ちっちゃいトトロでいいんだよ！」

「……………つてさ！あ〜もう本当可愛いなリオルは！！お前のためなら兄ちゃん、何でもしてやるからな〜！！」

周囲の目を気にせず一人興奮するブラコ…………ルカリオに、ミュウツは開いた口が塞がらない。

その時、向こう側の菓子屋にいたメタナイトが、大きな袋を片手にようやく戻ってきた。

「すまない、待たせたな……………つて、ルカリオはどうしたんだ？ぬいぐるみを片手に気色悪い笑顔だが……………」

「いつものブラコンだ、気にするな……………お前、その袋は何だ……………」

「ああ、カービィにと買ったものだ。」

「ああ……………成程な……………」

「さ、早く村に戻らないと、今夜に間に合わないぞ。」

「おおそうだった！待ってるリオル〜！！」

物凄い勢いでレジに突っ込んでいくブラ……………ルカリオに、メタナイトも同じく開いた口が塞がらなかった。

すま村、オリマーさん家。

キッチンの設備や器具が充実しているこの家で、リンク・ゼルダ・トレーナーが料理作りに励んでいる。

「後は生クリームをいれて……ババロア、冷蔵庫に入れるよ。」

「あつ、待つてくださいリンク。テリーヌが固まった頃ですから、今取り出して場所を空けます。」

「ローストビーフ、そろそろ焼き上がりますよ。」

三人でいそいそと料理を仕上げていると、キッチンのドアからピクミンを連れたオリマーと、Mr・G & amp・Wが入ってきた。

「オリマーさんにウオッチさん、キッチン借りちゃってすみません。」

「

「いえいえ、お店のケーキもパンも午前中にみんな売れちゃいましたし、好きに使っていいんですよ。」

『ミ〜ミ〜!』

「今夜ノパーティー二向ケテ、美味シイモノヲイッパイ作ッテクダサイネ。」

『はい、頑張ります!』

リンクとゼルダが頷く隣で、トレーナーがオーブンから焼き上がったローストビーフを取り出した。

「うわぁ……綺麗に焼けましたね!」

「俺、お菓子が専門だから料理はあまり得意じゃなくて。ゼルダとトレーナー君がいてくれて本当助かったよ。」

「そんな……私だって、お母様のお手伝いくらいしか出来ませんよ。」

「

「僕も洋菓子はあまり得意じゃないんです、和・洋・中ほとんどのお

菓子を作るリンクさんだって凄いじゃないですか。」

「えー……そうかな？エヘヘ。」

リンクの頬が仄かに赤くなった様子を、オリマーとG & amp; Wは微笑ましい思いで眺めていた。

ドルピックタウン・大型スーパー内。

「よいしょっ………む、少し買いすぎたか？」

「これだけの量を買って、ようやく気付いたのか……？」

「こんなに買ってどうするんだデ……。」

ガノンドロフ・クツパ・デデ大王は、お供のワドルディ数人に大量の荷物を持たせ、店内を歩いていた。

大柄な男が三人も並んで歩いているのだから、ほとんどの通行人は驚いて避けていく。

「ったく、とんだ大出費だ……クリスマスプレゼントごときに、こんなに金をかけおつて。」

「ふふ……クツパよ、お前には分からんだろうな。子供の喜ぶ顔を見るためだったら何でもするのが、父親というものだ……。」

「自分とこの子供でもないのか？」

「おうよ！子供達（特にすま家）のためであれば、こんな出費屁でもないわ！」

「（お陰で今月赤字だデ………。）」

遠い目をするデデ大王だが、傍らには彼から子供達へのプレゼントがちやっかり用意してあったりする。

すま村学校、教室。

ピットとプクリン、シークは生徒達全員分の衣装を作っていた。

「どおです？大丈夫ですの……？」

「余裕だよ……はいピット、君の衣装が出来上がったよ。」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

シークに手渡された衣装を受け取ると、ピットは満面の笑みでそれをギュッと抱き締める。

「プクリンちゃんのもすぐ出来るから、もう少し待っててね。」

「本当ですの？嬉しいですね。」

その様子を、物陰から眺めるフォックスの背後からは、嫉妬のオーラが滲みでている。

「ぬぐぐぐぐ……！！シークの野郎、またプクリンさんとイチャイチャと……！！」

「あつ！いたフォックス……何やってんだ？」

「ファルコオオオ……！！このやり場のない怒りを、俺はどこに向ければいい！？」

「あゝ……そうだ。会場の準備すると、案外スツキリするぜ。」

「本当か！？よっしゃあヤケだ！やるぞ……！」

玄関にダツ！と走っていく後ろ姿を見ながら、ファルコはやれやれと首を振り彼の後を歩いていく。

「じゃあ二人に早速仕事。この出来た衣装をそろぞれの人達に渡し

てきてくれる？」

「はい、分かりました！」

「分かりましたわ、いってきます。」

完成した衣装を持ち、二人は教室を後にする。

「さてと、この調子で残りも　　！」

針を持つと右手を伸ばした瞬間、スウ……と指の先端が透けたように見えた。

目を擦ってもう一度見るが、右手はいつものまま。

「（まさか、もうそんな時期が……いや、まだ早いよね。）」
そう解釈するものの、胸の内には僅かな不安が残っている。

「（さて、とにかく今はこれをやらないと。）」
シークは針をつかみ、次の衣装作りに取り掛かる。

一方、人がよく集まるすま村中央部では、サンタに扮した3兄弟＋プリンが、ティッシュ配りをしていた。

「ったく……何で僕がティッシュ配りなんか……。」

「仕方ないじゃん。このティッシュ全部配ったら、お肉屋のおじさんが七面鳥くれるっていう条件なんだからさ。」

「プリ お肉を貰うためでしゅ。」

「今夜のメインのためだ…お前ら、気合いをいれていけ……!!」
相変わらず淡々とした口調だが、いつも眠たげな目がヤル気に満ち溢れている。

「さすがアイク……肉がかつてると強いね。」

「アイク様素敵でしゅ……!!」

「うう……プリンちゃん……。」

「ほらロイ、泣いてる暇あったらさっさとティッシュ配りなよ!…
…あつ、お願いしま……す!」

マルスは客を見つけるやいなや、ニツコリと営業スマイルを向けてティッシュを渡す。

受け取った二人の女の子は、マルスを見ながら黄色い声を上げて歩いていった。

「ロイしゃん、一緒に頑張つてティッシュ配るでしゅ!」

「プリンちゃん………よお……し!」

プリンの一言によりヤル気を出したロイは、『ティッシュどーぞお……!』と自ら客に近付きティッシュを配り始めた。

「よし、これで全部ね。」

「沢山買ったなあ……。」

ようやく買い物を済ませたファルコンとサムスは、車を停めてある駐車場に向かっていた。

そんな時、向かい側から見慣れた二人が歩いてくるのが見える。

「あら、マスターにクレイジーじゃない。」

「よっ。」

「どうも、ご夫婦そろって買い物ですか？」

「ああ、子供達のプレゼントを買いにな。」

「今日はクリスマスですからね、私達はパーティーの後に家で頂くお酒を買いに来ました。」

「そうか。パーティーまでには戻れるよう、早く帰ってこいよ？」

「そうします、ではこれで。」

「よし！行こうぜマスター！」

クレイジーに手を引かれ、マスターはこちらに一礼し、その場を後にした。

「……さて、俺達は早く帰るか。」

「そうね、どんな風に素敵なパーティー会場になってるか楽しみだね、ふふ……。」

次に続く。

パーティーとかは準備してる時が楽しい（後書き）

一歩出遅れたクリスマス小説（^-^； なかなかUPする暇がなく
てすいません、楽しんでいただけたら嬉しいです（^-^）

思わぬプレゼントって凄く嬉しいよね

すっかり日が沈んだ頃。

「いけない！遅刻よファルコン！」

「ちよつとゆっくりしすぎたかな？とにかく急がないと！サムス、しっかりつかまってる！！」

サムスをおぶったファルコンは更に加速し、学校目指して突き進んでいく。

「あつ！パパママ〜！」

「遅いよ二人共〜！」

二人が到着した時には既に他の大人達が揃っており、サンタの格好をした子供達やトナカイの着ぐるみを着たちみつこ達が、いつ始まるのかと期待の顔を見せている。

「よおファルコン、随分遅かったな。」

「スマンスマン、今夜の準備をしていたら遅くなってしまってたな。」

「今やらないと、子供達に見つかっちゃうからね。」

「スネークこそ、準備は出来てるんだろ？」

「ああ、皆が眠ったら枕元に置くつもりだ。」

ファルコンとスネークは顔を見合わせると、クスリと微笑んだ。

『あーあー、本日は曇りなり、リンクはヘタレなり……よし！マイクOKだ。』

「くおらダーク！！さりげなく何て言った！？」

怒るリンクを無視し、司会役のダークはマイクが良好なのを確認すると、ポケットからカンペを取り出し口を開いた。

『えゝ本日は、ふ……ふけい（父兄）？の皆様、私達すま村学校の生徒一同が企画したクリスマスパーティーにお集まり頂き、誠にありがとうございます。今日はどうぞ、存分にお楽しみくだ……さ……

……もう小難しいことばかりだな！！おい皆！シャンパンもしくはジュースの入ったコップを上げる！』

「あら、ダークったら。」

「おっ、もう乾杯か？」

「乾杯やろゝ！」

「やろゝ！」

一同はダークの言葉に従い、シャンパンとジュースをコップに汲み手に持つ。

と、ここでもうやくマスターとクレイジーがやってきた。

「賑わってますね。」

「あつ、マスターもクレイジーも遅いよゝ！早く、乾杯するつて。」

「へいへい、俺シャンパンね。」

「はい、ダーク。」

『サンキューゼルダ………よおし！準備はいいか？』

『はい！』

『乾杯！』

カチャン、とコップ同士が軽くぶつかり合う。

一口飲んだ後、一同はさつそく料理や菓子に手をつけ始めた。

「立派なローストビーフだなあ。」

「ん〜！美味しいね兄さん！」

「今度家で作ってみようかしら？」

「わ〜い！ケーキおつきい〜！」

「Oh、It's tasty！一流シェフも顔負けだぜ。」

「リンクさん、ゼルダさん。すつごく美味しいです！」

「そお？良かった。」

「喜んでいただけで嬉しいです。」

「ピチュピチュ〜！」

「ピツカア、ピカチュ〜！」

「トレーナーさん、この苺大福とっても柔らかくて美味しいですよ〜！」

「うん、あんこも甘さ控えめで食べやすいしね。」

「良かった。クリスマスに和菓子って変かなと思ってたけど、そう言ってくれると安心するよ。」

「肉……………ようやく食える！〜！」

「わ〜アイク！皆で食べるんだから、七面鳥にそのまま被りつかないで〜！〜！」

「アイク様、ワイルドで素敵でしゅ〜！」

「サンタのコスプレしたプリンちゃん……………可愛いなあ……………」

「シークさん……………シャパンのおかわり、いかがです？」

「ありがとう、頂くよ。」

「シークの奴……………またプクリンさんと……………！！！」

「あ〜ウルフてめえ！！俺のローストチキン食いやがったなあ！？」「共食いしなくて済んだんだ、むしろ感謝してほしいくらいだぜ。」

「ん〜!! 旨いいいっ!!」

「確かに………どれもこれも皆、文句のつけようがない程旨い!!」
「子供だからといって侮れんデ。」

「ウツホ、ウホホ!」

「ウキヤキヤ〜!」

「ポヨ〜! いただきま〜す!」

「こらカービィ! ビュツフエパーティーでそんなに暴飲暴食してはいかん!」

「兄ちゃん、ケーキあ〜ん」

「あ〜ん」

（めっちゃデレデレ）

「（ふん……見ておれん……。）」

やがて皿が完全に空いた時、再びダークがマイクをつかんだ。

『あ〜食った食った………じゃあ本日のメインイベント・子供サンタからのプレゼント贈呈を行うぜ!』

「お? そんなものがあるなど、パンフレットには書いていないが……?」

「父兄の方々を驚かすために、内緒にしていたんです。」

子供達はそれぞれが用意したプレゼントを持ち、親の元に集まる。

「ルカリオ兄ちゃん、メタナイト兄ちゃん、ミュウツー兄ちゃん。プレゼント!」

リオルが笑顔で差し出したものは、3つの小さな袋。

「リオル〜ありがとう！兄ちゃん嬉しいぞ〜！」

「ありがとう、リオル。」

「……これは何だ？」

「えへへ〜開けてみて！」

早速リボンをほどき、中身を取り出す。

「ほお、これは……。」

袋から現れたのは、自分を象った可愛らしい小さな人形。

「シーク兄ちゃんに聞いて一生懸命頑張ったんだよ〜！」

「~~~~っありがとうリオル！！最高のプレゼントだ〜！」

ルカリオは喜びのあまり、リオルを抱き上げクルクルと回る。

「手作りか、凄いな……ありがとう、リオル。」

メタナイトが礼を言った隣で、ミュウツーも小さく『……ありがとう』と呟くように言った。

「はい父さん、これ僕からのプレゼント。」

スネークはトレーナーが差し出された、綺麗にラッピングされた箱を受け取る。

「ありがとう、開けてもいいか？」

「勿論。ちよつと恥ずかしいけど……。」

トレーナーの許可を得て、スネークはラッピングを剥がし箱を開ける。

そこに入っていたものは、手編みの腹巻き。

「これから寒くなるから、お腹壊さないようにと思ったんだけど……」

「……どうかな？」

「……ありがとう！凄く嬉しいぞ〜！」

ニッコリ微笑んだスネークの目に、うつすらと涙が見えた。

「ピ〜カピカ！」

「ピチユ〜！」

続いてピチューとピカチュウが差し出したのは、あったかそうな毛糸の靴下。

「親父！これ、俺ら三人から……………」

そう言つてフォックスが渡したのは、男性用のグルーミングセット。

「三人でバイトして、金貯めて買ったんだ。」

「これで少しは若返つて見えるんじゃないの？」

「本当高かったんだぜ？」……………大切に使つてくれよ。」

「お前達……………うおおおっ！！！」

スネークは両目から涙を溢れさせ、息子達をまとめて抱き締めた。

「わっ！父さん……………！」

「ピチュウ」

「親父、苦しいつての！！！」

『メリークリスマス！』

すま家の小さなトナカイ達、ポポ・ナナ・カービィは、三人で大きな袋を持ってきた。

「まあ大きい、中身は何かしら？」

「開けていいよ。」

「ビックリするよ。」

「楽しみだなあ、一体何が入ってるんだろう？」

ファルコンが袋を開けると、中から大きな抱き枕が2個現れる。

「おお、抱き枕か！」

「ペポ！二人で仲良く使つてね。」

「ありがとう、大切にするわ。」

三人に微笑みかけるサムスの隣から、二人の小さなサンタが箱を差し出した。

「お？二人は何をくれるんだ？」

「開けてみれば分かるよ。」

「喜んでくれると嬉しいです。」

「どれどれ………お！これは……。」

リボンを解いた箱の中身は、青とピンクのマグカップ。

「一生懸命選びました。」

「これからも夫婦円満でいてほしい、って願いを込めてね。」

「ネス、リユカ………二人共ありがとう。」

涙ぐむサムスの首に、不意に柔らかいものが掛けられる。

驚いて振り向くと、後ろには笑顔のピットが立っていた。

「僕からのプレゼント、手編みのマフラーだよ。」

「まあ手編み？凄いいじゃない。」

「手編みはピットだけじゃないよ。」

そう言ったシークと彼の隣にいるリンクの手にはセーターが、ゼルダの手には手袋、そしてダークは糸がほつれているマフラーを持っている。

「これから寒くなるからね。」

「風邪には気を付けて。」

「お二人には元気でいてほしいですから。」

「まあ不格好だけどよ、他のマフラーよりあったけえんだぜ！」

「あんた達………ありがとう……。」

「ほら、締めは君らだよ。」

「分かってる！」

シークの後ろからアイク・マルス・ロイが現れ、マルスの持っているものに二人は目を奪われた。

「まあ………！」

「ほお、これは……。」

彼の腕の中で赤い葉を花びらのように広げるその植物は、ポインセチア。

「僕らが育てたんだ。綺麗でしょ？」

「誰かさんが肥料あげ過ぎて一時大変だったけどね。」

「…お前は液体肥料とメロンシロップを間違えて、危うく腐らせかけただろう？」

「な……っ！失敬な！！」

「まあいろいろあったけど、無事綺麗に育ったんだ………はい、どうぞ。」

「………ありがとう、あんた達………皆。」

伏せたサムスの目から、雫が頬を伝う。

「わわっ！母さん泣かないでよ！」

「ママ…泣いちゃダメ！」

「ゴメンねえ………こんなに思われてるなんて………嬉しくて………」

ふわり。

不意に冷たいものが頬に触れ、リンクが空を見上げると………

「あ………雪。」

「あゝ本当だ！」

「ホワイトクリスマスだね………。」

空を見上げる一同に、白い雪が優しく降り注いだ。

パーティーも終わり、家に帰ったすま家の子供達が布団に入って眠る頃、シークはまだ眠らずにベッドに腰掛けている。

「（あの時の……気のせいだといんだけど……。）」

自分の手の平を無言で見つめていたその時、ガチャリと不意にドアが開かれた。

「誰？」

「……よかった、まだ起きてるみてえだな。」

部屋に入ってきたのはダークで、そのままこちらに歩いてきた彼は、珍しく浮かない顔をしている。

「どうしたの？こんな夜中に君が起きてるなんて、珍しいね。」

「ああ、ちよつとな……。」

ダークはしばらく俯いていたが、決心したように顔を上げると、シークの方を向き口を開いた。

「なあ、シーク！……俺達、まだ大丈夫だよな？まだあいつらといられるよな！？」

「ダーク……？」

「……今日、会場作ってる時見えたけど……俺の手が、微かに消えたんだよ……！！」

「……………」

「なあ、大丈夫なのか？俺ら大丈夫なのかよ！？」

「落ち着いてダーク……………大丈夫だよ、だってマスターからはまだ何も言われてないじゃないか。」

「……………本当か？」

今にも泣き出しそうなダークの顔を見つめ、シークは頷いた。

「そうか……………サンキュ！何か安心したぜ。」

ダークは微笑むと体を反転させ、ドアまで歩いていく。

「じゃあシーク、お前も早く寝ろよ。」

「うん、おやすみ……………」

ボタンツとドアが閉められたと同時に、シークの顔から笑みが消える。

「（『大丈夫』か……………僕自身にも、言うべきだよね……………」

窓から入る雪明かりに照らされ、シークはもう一度自分の右手に目を落とした。

終わり。

思わぬプレゼントって凄く嬉しいよね（後書き）

シックとダークに起こった不可思議な現象……それについては、
後ほど明かされていきます。

バレンタインはチョコの数で競い合う男の勝負の日

2月14日のすま村。

今日は土曜日のため、学校は休み。したがってすま家チルドレン達の起床はいつもより遅かった。

「……………何これ？」

そんな彼らがリビングに来て目にしたのは、コタツの上に所狭しと並ぶチョコの山。

「朝起きたら郵便受けの中と周りにあったのよ、運ぶの大変だったわ。」

「え？これ全部母さんが父さんに作ったんじゃないの？」

「やあねえ、いくらバレンタインだからって、愛するダーリンにこんな力カオ大量摂取させてどうすんのよ。」

「ハッハッハッ！いくら父さんでも、この量じゃ鼻血が止まらなくなってしまうよ！」

「……………そっか、今日バレンタインだったっけ…………。」

ポツリと呟くシークの隣で、ポポとカービィは『やっほう　チョコだ』とはしゃいでいた。

「で、このチョコどうすればいいの？」

「全部アンタ達宛に届いたのよ、それぞれ分けなさい。」

『ウチの子達はモテルわね』と言いながら、サムスは済ませた朝食の洗い物をするため台所へ行く。

「このままコタツの上に置くと溶けちゃうし……………とりあえず分けてようか。」

「ふう…… やつと分け終わった。」

「ふふ」と息を吐くマルスを含むすま家男子達の前には、大小異なるチョコの山が出来ていた。

「今年もいっぱい来たね。」

「ペポ」 チョコ食べ放題だよ！」

「あれ……？ 何で父さんのところにもチョコがあるの？」

「ん？ あるとダメか？」

「ほら、このチョコって試合を見てるファンの娘からもくるじゃない。ファルコンはカッコいいから、ファンだって多いのよ。」

「ま、俺にとつては母さんからのチョコが一番嬉しいけどな。」

「まっ、あなただったら。」

イチヤつく夫婦をよそに、男子達は互いに成果を自慢し合う。

「見て見て、ポポね」 10個も貰ったよ。」

「ポヨ」 僕は20だよ。」

「僕は18個です、ネスさんは？」

「36個…… 食べきれるかなあ？」

「僕は42かあ…… シークさんはどうですか？」

「64個、手紙付きも沢山あるよ。」

「72個もチョコ貰ってもなあ…… あっ！ この娘シュークリーム入れてくれたみたい！」

「ロイに勝った！僕は83個だもんね、しかも僕の好みを知ってチーズケーキくれた娘がいつぱい。」

「おっしや俺91個！リンクは？」

「俺は…… 何だ、ダークと同じか。」

皆が結果を発表していく中、アイクは高く積み上げられたチョコマウンテンを見上げた後、盛大なため息をつく。

「そうだ、アイクは何個貰ったの？」

「結構あるけど、この俺に勝てるかな？」

「……………個だ。」

「え？」

一同が聞き返すと、アイクは再度ため息をつき、口を開いた。

「……………125個だ。」

「ええっ！？」

「何それ！？三桁いつてんじゃない！」

「くそっ！！何でナイスガイな俺様より普段からポケットとしたアイクの方がモテるんだよぉ！？」

「アイクさんは、いざとなったらとってもカッコいいですから。」

「今年のNo.1はアイクだね、おめでと〜」

「はい、賞品に僕からチョコあげるよ チーズケーキさえあればいいし。」

「…いらん、これ以上俺の胃に負担をかけないでくれ……。」

「……………ところでさ、母さん。」

「ん？なあにリンク。」

「ずっと気になってただけど……………ゼルダ達は？」

リンクの言葉に一同はハッと気付き、辺りを見回す。

「そういえば……………起きてから見てないね。」

「ポヨ、言われてみれば。」

「へっへっ！俺は気付いてたぜ！」

「…絶対今気付いたくせに……………」

「ああ、あの子達ならプリンちゃんの家でピーチも一緒にチョコ作りに行ったわよ。」

「え？バレンタインは今日なのに？」

「リンクさん、ゼルダさんとナナは昨日乱闘あったじゃないですか。」

「あつ、そうか。」

「そゆこと、だからゼルダからのチョコはしばらくお預けよ？リンク」

「んな……………っ！！」

一瞬にして耳まで真っ赤になったリンクを見ながら、サムスとシークは顔を見合わせクスクスと笑っていた。

一方、スネーク家。

こちらにもコタツの上に乗っているチョコの山を分割していた。

「ピカッ！」

「ピチュピチュッ！」

「おう、今年も大漁に届いてるぜ。」

「父さんにもいっぱいきてるよ。」

「おおー！そりゃあ嬉しいな！」

「本当かよ？宛名間違えてねえか？」

「……………グスツ……………ひどいぞ息子よ……………」

ファルコのキツい一言にべそをかくスネークに、トレーナーは心配しながらハンカチを渡す。

「去年はウルフが勝ったが、今年は負けねえぞー！！」

「正直勘弁してほしいぜ……………甘いもん嫌いなんだよな……………」

「え？でもお前いつも、トレーナーの作ったおやつ喰ってんじゃねえか？」

「トレーナーのは和菓子中心だろ？それにコイツが作るもんはしつこい甘さがなくてうめえんだ。」

「そんな……………ありがとう、ウルフ。」

ニコツと微笑んだトレーナーの笑顔に、ウルフは『お、おう…』と照れながら返事を返す。

「しっかし今年もピカチュウ宛のチョコ多いな。」

「ピ？」

「ピカチュウは可愛いから人気あるだろ……………そういえば、サムスさんから『後で皆と一緒にチョコ届けに行く』って電話があったぜ。」

「ピッカア！」

（超テンション上昇）

「皆って？」

「他の女子のことだろ、ゼルダとかプクリンちゃんとか……………」

ガタッ！！

「何いつ！？プ……………プププ、プクリンさんが来るのか！？」
突然フォックスは立ち上がり、あたふたとし始めた。

「落ち着けて。午後の4時頃に来るみてえだから、まだ時間はた
んまりあるぜ。」

「だってあのプクリンさんが……………今10時だからあとたった6時間
後に……………！！」

慌てふためくフォックスを、家族達は半ば呆れた様子で見ていた。

こちら、すま村市場。

「兄ちゃん見て見て〜！いっぱい貰ったよ〜！」

買い物用のエコバック（ルカリオお手製・リオルの刺繍付）いっぱい
に詰められたチョコを嬉しそうに抱えながら駆け寄るリオルを、
ルカリオは優しく抱き留める。

「お帰りリオル〜、大収穫だな！」

「うん！あのね、八百屋のおばちゃんと花屋のお姉さんと、あとは
いろんな人から貰ったんだよ！」

「そうかそうか〜リオルは可愛いもんな〜」

にへら〜と笑うルカリオの持っている買い物籠の中にも野菜に混じ
ってチョコが入れられており、彼の後ろにいるメタナイトとミウ
ツーも自分宛てに貰ったチョコの入った袋を持っていた。

「……………ったく、バレンタインなど悪しき風習に過ぎん、私は好ま
んな。」

「そんなことを言っで、私よりも多く貰っているではないか。」

「フン……。」

こちらはスマブラスタジアム。

マスターとクレイジーは送られてきた&村の女性達から貰った大量のチョコをコーヒーと共にひたすら食べていた。

ふと、トリュフを持つクレイジーの手が止まる。

「マスター……………」

「何です？」

「……………あきた。」

「きりたんぼとナマハゲが有名な県がどうかしましたか？」

「違いよー！飽きたんだよ！このチョコの甘さに……もういらねえ。」

「私より多くチョコレートを買って喜んでいたくせに、今更何を言うのです。」

「だってさあ……………」

ブスツと頬を膨らませるクレイジーから顔を背け、マスターは目の前のチョコマウンテンを見る。

「しかし、さすがの私もこの甘さが立て続けに来ると少しまいりますねえ……………あ、そうです」

するとマスターは立ち上がり、近くにあった段ボールにチョコを詰め始める。

「？……………何してんだよマスター、もしかして捨てるのか？」

「そんなもったいないことしませんよ……………このチョコレート達を『リサイクル』するのです。」

「『リサイクル』するってどういう……………まさか……………」

「ようやくご理解して頂けましたね、では貴方も早く段ボールにチョコを詰めてください。」
にこやかな笑顔と裏腹の考えが伝わり、クレイジーは口端を引きつらせながら段ボールを手を取った。

村を見下ろせる丘の上に建てられた、デデデ城の庭。

『GIVE ME チョコ~~~~~~~~っ!!』

半分沈みかけている夕日に照らされたすま村に向かって、ガノンドロフとクツパは叫んだ。

「……………お前ら、何やってるんだデ？」

「今日一日、村中を回ってもチョコを貰えなかった男の叫びだ！」

「デデデ！お前もやらんか!？」

「いや…………遠慮するデ。」二人の誘いを断ったその時、数匹のワドルディが大きな段ボールを3箱抱えてこちらに歩いてきた。

「何だ？」

その箱を見てみると、3つそれぞれに宛名が書いてある。

「おゝいお前ら、何か荷物が届いたデ。」

「荷物だと…………？」

「何だ一体…………？」

不振に思いながら、二人が箱を開けると……………

「お……………おおおおっ!!チョコだあっ!!」

「我輩のもチョコ……………こんなに沢山……………!!」

箱いっぱい詰められたチョコを見て大ハシャギする二人に背を向け、デデデ大王も箱を開ける。

すると、沢山のチョコの上に手紙が置いてあった。

「（何だ……？）」

封筒から取り出し、早速読んでみると………

『そのチョコレートは差し上げます。
どうぞ溺れるまでお食べください。』

マスター』

「……………」

デデデ大王は無言でその手紙を懐にしまい、手を繋いでくるくる回っているガノンドロフとクッパを、潤んだ目を見た。

「（……やっぱり、モテない男は辛いデ……！！）」

所変わってすま家。

「はい、ロイちゃん」

プリンが差し出した箱を、ロイは震える手で受け取る。

「あ、ありがとうプリンちゃん!!」

「ロイちゃんはシュークリームが好きって聞きましたから、プリン頑張って作ってみましたしゅ、クリームはチョコなんでしゅよ。」

「はうっ!! プ……プリンちゃんが、僕のためにシュークリームを………もう、死んでもいい」

プシュ……と真っ赤になって倒れたロイを『大丈夫?』とネスが声をかける。

「さて、いよいよ最後は………アイク様あつ!!」

勢いよく飛びついてきたプリンを、アイクは平然と受け止める。

プリンはアイクから降りると、持っていた可愛いラッピングの青い箱を差し出した。

「あ……あのあ! プリン、アイク様のために一生懸命チョコ作ってたでしゅ!! あんまり甘くないからパクパク食べれるでしゅ!! だから……えと………」

恥ずかしさのため上手く言えずにいたその時、プリンの手からアイクがチョコを抜き取った。

「プリ………」

「………俺のために作ってくれたんだな。ありがとう、プリン。」
優しい微笑みと共にクシャツと頭を撫でられ、プリンの小さなハートは破裂寸前であった。

「プリ………ッ!! ……あ………もう、死んでもいいでしゅ………」

プシュ……と真っ赤になって倒れたプリンを見て、『二人目か』とネスが呟く。

「はい、シークさん……。」

頬を赤く染め、プクリンはシークに箱を渡す。

「私、お菓子作りはあまり得意ではないのですけれど、ゼルダさんやピーチさんに沢山教わりましたの！自信は少しもないんですの……形だって悪いですし……こんな私のチョコレートでも、受け取ってくださいますか？」

おずおずと箱を差し出す様子がいじらしく、フツとシークの口元が緩む。

「手作りの贈り物に形の悪さなんて関係ないよ、大切なのは『その人を想ってくれる気持ちなんだから』……ありがとう、プクリンちゃん。」

チョコを受け取ったシークの笑顔があまりにも眩しく、プクリンの乙女ハートは張り裂けそうであつた。

「私……もう……このまま天に召されても構いませんわ」「プシュ……と真っ赤になって倒れたプクリンを見て、『もう場所ないよ……』とネスがため息混じりに言う。」

「あ……ウチの家族って本当やかましいよね。」

「クスッ、本当に……リンク。」

「えっ？何　あつ。」

名を呼ばれこちらを向いたリンクの手の平に乗せられていたのは、緑色の小さな箱。

「ゼルダ……。」

「私の想い、受け取ってくださいね……。」

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093e/>

すま村のすまさん家。もういっちょ！

2010年10月11日12時30分発行